

6 7 8 9 18 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 18 4

特 218

278

同 鍋 日 統 著

蒙古德王閣下參詣記念出版

# 興亞の光

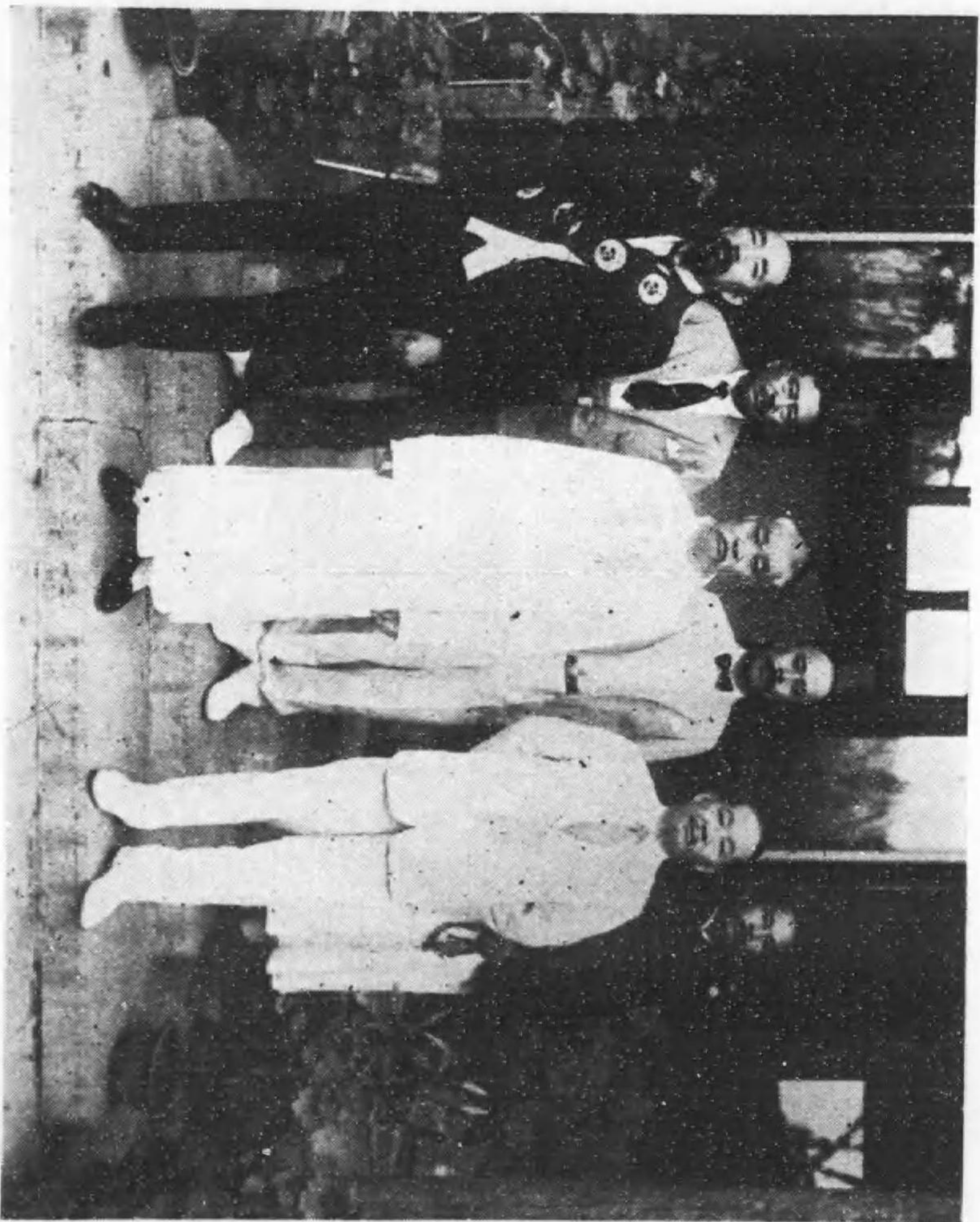
蒙古軍大供養塔建立由來

蒙古軍大供養塔東京事務所發行

(東京市大森區池上德持町四四六大亞細亞民族會内)

# 始





喜眞 前列向つて右より建川美次將軍、衆議院總裁古カラチン王、高橋日  
 統…後列井上義澄師、下永大尉、北京遊藝公所小平氏。昭和三年七月北京  
 カラチン王府に於ける高橋日統法語記念撮影。

# 皇明光日月

平沼驥敬書



字題下閣郎一駟沼平臣大理總閣内

特 218  
278

興亞の光 (一名 蒙古軍大供養塔建立由來)

高鍋日統著

蒙古德王閣下參詣記念出版

# 興亞の光

179

蒙古軍大供養塔建立由來



蒙古軍大供養塔東京事務所發行

(東京市大森區池上德持町四四六大亞細亞民族會内)

# 光もとも

林統十郎書



字題下閣將大郎十統林臣大理總閣内前

## 東洋大同盟

達人達觀高遠理。上徵天意下國是。大勢攸嚮自有方。進退何得背天旨。日東操觚中氣崢。敢進言中華諸士。諸公憂國僉忠誠。東洋危機駭目視。百年大計劃何人。三分出廬臥龍子。天下久欽諸葛風。武侯再生知何揆。先定近交出遠攻。由來中華傳統策。將夷制夷迹可尋。與元滅金催命革。宗朝傾廢豈尤人。三桂縞素訴大逆。漫依清主報國讎。朱明滅亡清祚闕。豈獨敬墟誤後先。近時殷鑑十且百。還遼以降深慨憂。何爲敢自顛黑白。欲踏前轍重悔尤。天下鴻猷在咫尺。中日同盟衛東洋。此心萬古終不易。襟懷磊々指天盟。宜先互釋其怨魄。同心一體對公仇。却道歐米不足愬。可畏唯在東隣強。既奪朝鮮夷東壁。更踞滿洲窺朔方。凌壓中華來屈厄。使我億兆思臥薪。特至山東堪蹙額。我賴歐米抑日東。雖欲已豈又可得。誰聞此說不啞然。朔北嘗見屈強露。清廷微力艱斥攘。遂使日本發義怒。奮爲貴國起北征。膺懲強露安國步。當年事業何絮言。若使滿韓露國

附。我亦相次亡東洋。既爲中華挫強敵。繼承優越代露人。畢竟依之作外塞。華日藩翊防外憂。唯爲東洋行天職。徒將感情休是非。天意攸存要看識。若夫青島我所屠。使中華免彼蠶食。履行公約信國交。合辨經營同失得。切怪高義歸徒然。借問諸公何攸惑。躊躇遂逸參戰期。我直決策奏征克。克爲東洋劃安全。諸公盍省檢其德。中日利害固相同。當期相互制危仄。交竭輔車隣佑誠。何事誣我爲脅逼。恩怨顛倒頻相報。吾曹何能不歎息。自毀長城利敵人。危東洋豈止歐米。盍反其本濟其謀。西歐元來貴物質。大陸接壤急自防。利害當見錯綜密。殘忍不免虎狼性。尙裝正道銜終一國際情僞由來瞭。東西并吞概同律。前敗後失四百州。青史彰彰似皎日。野心大小日與歐。較之判之毫不失。遠援英米苦隣邦。日本破白禍愈溢。終局中華屬何鄉。米耶英耶必甲乙。蜂壘有毒況人間。日本雄武絕群匹。一旦決意向貴邦。勝敗何其易豫述。蚌鷓相爭利漁夫。中日命運至此畢。五大洲中唯米英。俱爲臣妾屈厥膝。痛憤誰不哭蒼昊。君不見喜馬山南垂天地。英雄崛起統一成。莫臥帝業太卓異。如今形勢極愁悲。三億蒼生咽血淚。

沙上偶語呢英皇。標榜撫民掩暴治。亡國末路愈如斯。我思笠民酸其鼻。誰識我亦同盛衰。每思前途切心悸。願與諸公披誠心。努力一致防崩墜。當年勢力與文明。復活誰疑第一義。

四

周末山東六大強。離合無常交柔剛。關中全域即秦國。地險人勇國勢張。遠交策士近交客。縱橫馳騁似龍驤。知亡六國非西狄。合縱弗密失大綱。如今強秦。英歟米。亞洲到處亡閱牆。唯剩中華與日本。中華富源冠八荒。四億民衆無限地。寰宇通商一大場。又見日本驍武俗。不易國體鍾萬祥。同洲同文自一致。洋鬼畏我似朝光。蘇張不慮大局事。唯快一時事摧戕。達人惟察高遠理。百年大計明否臧。嚮背自見適國是。君不見東洋文明主靈光。仁義忠孝自成粹。釋尊哲理萬世揚。孔子風教與年顯。中華重孝我尙忠。國風各有異彼我。但不以利害爲崇。俱期心的全靈質。神氣攸通無西東。識者一視爲同域。不必止空談捕風。佛國博士有李姓。博學閎識著歐洲。遍巡世界積觀察。論斷終及日東洲。指導東亞回頹勢。扶殖自由伸鴻猷。日本天職存乎此。又聞博士我長雄。久遊貴邦究往史。中華國情鈞立

幽。不朽文化證保合。正觀篇成教我儔。天下至文在茲上。西歐文化非其讎。達人所論識者說。東西往々一其流。何者向我笑迂濶。呬也佛問有說不。妄言無辭頓首謝。客者悠爾鼓舌頭。中華民性喜事大。迎元戴清親虎彪。古今史蹟盡證是。以武觀我冠半球。以財遙不及列國。宜憑英米劃便籌。以隣邦故強親睦。何得免迂濶之嘲。主人歎曰噫如此。中華前途亦可知。不列國自企分割。則必以同治臨之。獨立有名其實已。諸公何時披愁眉。盍反其本行大策。勿爲感情誤本支。勿爲政爭忘大局。勿將權謀忽常規。須相協心衛東亞。努力奮勵樹鴻基。所謂鴻基知何意。中日同盟振綱維。復活文化與勢力。以欲威德宣天涯。觀之於國家事業。將觀於人生行爲。眞有大風拂雲概。以足稱萬古快奇。男子不生則可已。生逢此時何伏雌。願相與奮伸鵬翼。區々政爭歲月移。坐逸千秋一遇會。豈止人事之滯遺。奈天與不取嚴譴。客笑予曰噫彫龍。高說雖美誰行是。重實行者賤空論。貴功利者輕理想。與爲鯤翮飾莊門。不如牙籌爭鎔朱。主人怫然排其言。華民何盡止功利。能憂大局思黎元。無此人以何維國。溯尋大道達其源。

五

一脉道流當不盡。宜俱相照護其根。同盟基礎全在此擴充發大滿乾坤。夫下何人無雄志。每思前途淚欲吞。嗚呼中華不強我亦弱。畢竟兩者爲弟兄。中華富源日本武。洋鬼唯恐成合勅。百端離間僉由是。或不察自毀長城。將使外力溢中國。請見列國共同營。財經借款又鐵道。存亡危機傷心情。

### 聖日蓮

上

宗中立宗分派流。	紛々鼓說迷津頭。	一天四海皆歸一。	釋尊正意何處求。
精進欲釋胸中惑。	讀破萬卷不暫休。	靜坐沈思忘寢食。	却覺法程漫悠悠。
法堂一夜吐心血。	忽然自覺法命浮。	衆生濟度用方策。	四十年間沒真幽。
無量義經惟一語。	髣髴窺得覺王猷。	片鱗提取逸龍尾。	苦悶難遣似籠囚。
艱難何辭尋正徑。	飄然下山周八洲。	名山到所求師友。	研鑽欲除剜心愁。
維時仁治庚子載。	法算漸長十九秋。	誰知東海漁人子。	日輪乘蓮母懷留。

夢兆雄恢表高顯。	右府創業關東都。	陪臣執政鎌倉地。	八宗並興競優殊。
教壇獨見念佛盛。	法然流弊毒浮屠。	又登叡山探法窟。	究極萬經疲肺腑。
忽排濛雲開天樞。	最澄遺述法華經。	俱是法界真玉壺。	釋尊正意知此在。
出山又向甕水涯。	天台兩派詳盛衰。	法論得失明方寸。	京洛諸宗悉究知。
南都尙存古宗美。	飛錫欲問法燈基。	堂々伽藍七大寺。	爛眼所觸發幽思。
巨浸不厭細流合。	望蜀難禁雄飛資。	更遊高野覈密宗。	學海茫茫望無陲。
再入京師修儒學。	又學國風莫不窺。	釋尊識言正像末。	不疑白法隱滅時。
妙法流布在今日。	誰絕鬪諍正法旗。	沙門日蓮發勇奮。	自信天生獅吼兒。
垂天欲搏大鵬翼。	銳利揮來法華錐。	喝破各宗舌如火。	念佛無間禪天魔。
眞言亡國律國賊。	霹靂忽起覆天池。	鐵鞭縱橫驚上下。	勿怪當年瑞相奇。
靈驗果見哲人出。	釋尊識言誰有疑。		

中

疊々波瀾詎足歎。一身捧佛金剛漢。厥膽如天厥氣虹。欲創妙宗排萬難。

東海佛使僧日蓮。學殖富贍且材幹。自詣大廟誓神靈。護持王法期一貫。  
誠心惻々動神宮。論破各宗一斷案。唯言妙法即正經。謗法畢竟長禍亂。  
一天四海不容岐。法怨如炎黃舌爛。屢遇危難轉晏如。猛進如此見真髓。  
紛々毀譽窓外移。豈無天下相憐意。此時天變極慘悽。地妖頻々臻年次。  
朝野競々見魂消。曰是謗法招罪累。積惡餘殃及人天。宜乘此機諫曉致。  
滿腔瀉來飛筆花。安國篇成凝精粹。當路不信長嫌忌。論彈各宗諫大吏。  
更推國運明憂衷。當路不信長嫌忌。迎合報怨古來然。煽動衆愚揚妖燧。  
一炬灰燼法堂空。悔恨勿言逸雄鷲。雄鷲元是遊天涯。澤鷲何知奮搏志。  
每經一難勇奮加。感化漸遍關左土。府下復驚天鼓降。猛氣宛似負嵎虎。  
推數按命知遇窮。更究神道擴學圃。徹上徹下涉古今。教說精妙感滄父。  
折伏斷々寒老奸。法怨如燃動權戶。哲人到所多福賜。龍神歛波表親媚。  
漁父寄情護法輪。哲人到所多福賜。閑中却喜修養深。歸來哭母昨者父。  
至情自見厚雙親。法化德音八隅普。兇焰未免危佛身。世路崎嶇要勉努。

不奮破邪顯正亡。偷安不知何所補。一死固期殉道心。既憂天變長民苦。  
還慨外侮損國威。惕惻不禁陳萬縷。欲遏異端塞禍因。正顏仰議警人主。  
惟望召對決正邪。慷慨意氣萬丈吐。

下

敢決萬死排瞞蒙。嚴譴不來法敵恟。禍機欲熟知未至。悠悠移錫遊峽中。  
振衣萬仞之嶽上。托脚東海之鴻背。玉趾所印盡妙化。更望法力挫敵雄。  
又激異類催召對。山雨將到風蓬々。雄心竊期滌濁穢。鐵腕一揮破不同。  
當路固執似茅塞。鍛練成獄誣孤忠。日蓮不恤又不畏。顛倒是非沒秉公。  
誰任內外多患責。尙論正邪竭誠衷。讜議沾禍然今古。法難復至江島東。  
臨刑從容唱題目。氣節凜々凌蒼穹。儉手揮劍起愴感。道俗哭地天色濛。  
忽見怪光天外落。紫電一擊雄劍空。俄行恩赦移越北。龍口長想哲人風。  
山容水色留行客。越山雲深海島遙。北溟風物腸欲斷。龍駕不還暗淚澆。  
百難嘗盡又千患。欲濟衆生心骨銷。親謁皇陵弔怨魄。王法一念動九霄。

至誠所溢化法敵。霜雪經來舒柳條。果見春風傳恩籟。師弟禍福同長消。  
 一貫不渝重情義。德化汪溢如浩潮。關左靡然歸妙宗。當路感悟披和調。  
 公認妙宗表優遇。憾尙未及遏異標。禍根不除存流漫。日蓮喟然衷心焦。  
 三諫不聽奈尸位。不如勇退隱岩嶠。立宗既經廿餘載。棲後尙見拓四荒。  
 法壽數盡六十一。瑞雲靈臺千載香。借問哲人本來志。萬邦統來歸扶桑。  
 一天妙法化九域。天壽有限附後良。六老不和空祖意。尙見宗風追年揚。  
 七字唱號遍天下。君不見萬馬防敵玄界洋哲人豫言果巧中。休論偏梗逸經常。  
 嘗見鎮西水城畔。王法並照一大相。

### 祭蒙古軍戰死者文

維昭和三年三月七日日蓮宗管長大僧正酒井日慎與清淨大衆俱具香  
 華茶果之奠敬仰佛祖三寶之照鑑謹誦醍醐一實之妙典以祭大元蒙古  
 軍戰死者之靈曰忝惟吾高祖之立教也舉其化境云日本乃至漢土月支  
 一閻浮提示其流布時云末法萬年盡未來際其意在欲令閻浮同歸一乘  
 妙法此土直爲常寂寶刹也是故其唱宗之始著立正安國論諫國家其中  
 則當衆難實其事其終則及蒙古事託玄猷於微詞一代起盡懸在于斯蓋  
 智慧不能去其惡威力不能全其愛其唯妙道乎可以歸群有於一善施至  
 仁於萬年是所以其振別頭教化乎聞蒙古來其兵凡十餘萬艤幢掩海貌  
 貅蔽野而忽遭颶風起一時殲滅云嗚呼何其來之壯而其盡之慘且過也  
 屍漂博多之灣骨填志賀之海雲日晝晦幽鬼夜泣潮氣帶腥濤聲吞恨悠  
 々六百有餘載茲枯骸往々委于沙田惟其師固雖非有名其兵何辜生蹈



血途死沈業海弔祭不至精魂何依茲本宗蒙古特命開教使高鍋日統等  
夙有意於慈拔嘗欲建之供養塔永祀其靈以祈冥福資日支親善有日乃  
與有志者相謀募緣於四方拮据經畫漸茲見其完成又至修此大供養會  
實可謂體吾祖立教大意者矣余感喜曷加焉今也世界各國皆唱平和慎  
乎用凶而精嫌未絕何日果得止修羅鬪爭見和平樂土靈而有知將謂之  
何謹按祖詰云修萬祈不如禁一凶未禁國內之謗法而殺蒙古之無辜誠  
可愍傷也嗚呼仁忠惻怛伐根塞源之意千歲之下誰不仰之金言一語煌  
有光不可以徹照幽顯二界除諸冥闇乎若夫新塔造立意具在張氏塔銘  
今唯舉吾祖慈教之一端敢以告諸亡靈聊伸以法供養之微誠云爾

日本の本の稜威の光り照りそひて

四方の國々彌榮ゆるらむ

皇國沙門 日 統 詠

### 祭大元蒙古軍戰死者文并序

我高鍋日統師少壯修菩薩行遵奉靈山別付之妙法追慕宗祖大師之盛  
躅勇猛精進以欲濟度幽顯二界之羣萌現出常寂光土其秉志可謂遠大  
矣昔者元蒙古王忽必烈屬邦視我國且怒不朝貢遂興無名師企圖併吞  
我軍奮戰鏖殺絕彼非望以輝國威者古今中外之所識也爾來六百五十  
餘季予茲回顧當時邈如煙霧今也宇內之形勢屢經沿革不敢以攻伐爲  
賢列國競唱平和或縮少軍備或約束不戰以欲令天下安穩固善計也雖  
然以法章聯盟各國未如以教法和合人心也人心一和何事不成故致各  
國平和先和合亞細亞人之心欲和合亞細亞人之心先和合日支人之心  
欲和合日支人之心先和合日蒙人之心夫日蒙同種族同宗教禮祖敬長  
習慣亦同況彼我之人心同有三因佛性之在佛性與佛性相對磨礪豈不  
發光輝乎抑天下之人皆有慈悲心慈悲心即利他心苟捨己利人豈有日

蒙不和之理乎故以此心善導教化則必得和合日蒙人之心和合日蒙人之心而後和合日支人之心和合日支人之心而後和合亞細亞人之心和合亞細亞人之心而後和合一天四海人之心於是乎得慧日慈光明照庶物慶雲瑞氣徧繞率土人天群萌蒸々乎躋寂光之域嗚呼日統師追慕宗祖之盛躅躬行菩薩之弘誓住平等慈悲心忘怨親之差別建立一大浮圖度無告之怨靈以此資日支之親善併祈世界之平和日勝偉之不自揣製祭文曰

維昭和三年歲次戊辰三月初七日大日本東京赤坂圓通寺住持沙門日勝等謹仰佛祖三寶之照鑑誦醍醐一乘妙典具清茶香飯之奠以致祭于大元蒙古軍戰死者之靈嗚呼人孰無欲欲是禍根無欲無累有欲有煩禍福得喪皆湧心源是故古之仁君慎獨避怨常行正路不恥乾坤寶祚綿々傳福子孫天下億兆欽仰至尊多欲之人未嘗知足悠々海外擅張戰局欲拓版圖却蒙敗辱壯夫曝尸怨靈無告物換星移六百餘季不嘗法味枯飢增瞋嗽々餓鬼哭志嶋邊蓬々燐火燃博多濱愁雲黯淡慘鎖海天縣曠沒在奈此沈淪幸哉能仁慈教廣大無際橫極十方縱徹三世圓鏡高揭輝平等

慧有情無情俗諦真諦萬象森羅不漏微細皆入慈室令浴同惠相和相親如兄如弟恩讐此泯慈筏同濟大哉慧日之力照他肺肝宿怨忽散心地頓寬譬如大瀛之水狂風驚瀾折檣覆船風收歸安妙哉法華妙典開顯秘密凡夫心中夙認活佛十界三千眞如唯一迷悟凡聖法性同律不移一步直在寶刹涅槃山頂悠々觀月追薦供養能事既畢靈也遐顯欣々解脫尙饗

# 東亞親善界和平之聖業



元の太祖成吉思汗

## 蒙古軍大供養塔落成除幕式

- (一) 除幕式 三月七日前十時志賀島博多築港出船 午前八時博多築港出船 乗船引
- (二) 管長御親教 七日午後六時より橋町勝立寺にて
- (三) 元寇後身復 萬靈供養大法要 八日午後一時より東公園元寇記念館にて
- (四) 東亞親善大講演會 七日午後六時より橋町勝立寺にて 八日午後六時より東公園元寇記念館にて 蒙古志士本縣警備局長朝野名士出演
- (五) 滿蒙大活動寫真會 六日夜 西洲第一公會堂 (入場無料) 同夜大講演 滿蒙開發の世界的使命 蒙古特派員高鍋日統師
- (六) 蒙古展覽會 自五日 午前九時 至十日 午後四時 會場天神町 商品陳列所にて 入場無料 滿蒙關係大講演會
- (七) 東亞親善大懇親會 九日午後三時より 博多商工會議所樓上 官民合同主催 (日蒙支那馬隊の歓迎会 供養塔落成祝賀會等) 福岡市橋町勝立寺内(電話六四四番) 蒙古軍大供養塔事務所

亞細亞大親社主催  
右開會中毎日  
滿蒙關係大講演會  
入場無料

蒙古軍大供養塔の完成を記念し、東亞親善の発展を期す。塔の設計は、東亞親善の発展を期す。塔の設計は、東亞親善の発展を期す。



昭和三十一年一月蒙古王閣下博多東公園日蓮大師の大銅像に参拝する先頭二人目下



徳王閣下大銅像前に於て元寇記念館主湯川僧正より日本刀を受く



大折伏の日蓮大師大銅像

「ものゝ心の心つくしのはてにこそうべ神風もふき起りけれ」元寇國難の一大非常時に神風は起りたり神風は如何に皇國に仇なす敵國といへとも、やがてはこれ聖天子金輪大王（世界天皇）に統化さるべき同



日蓮大師大銅像建設の中心人物（佐野僧正）を圍める僧衆

胞なりとの大慈悲の折伏より起るものなり。博多東公園に於ける元寇記念日蓮大師の大銅像は實にその大折伏の形益を示現せるものなり。蒙古の徳王閣下、その聖容を拜してより一層日蒙親善興亞の大信念を強化せらる。うべなりと謂ッべきなり。



二 景光の涙流拜禮香焼に塔養供大軍古蒙下閣王徳



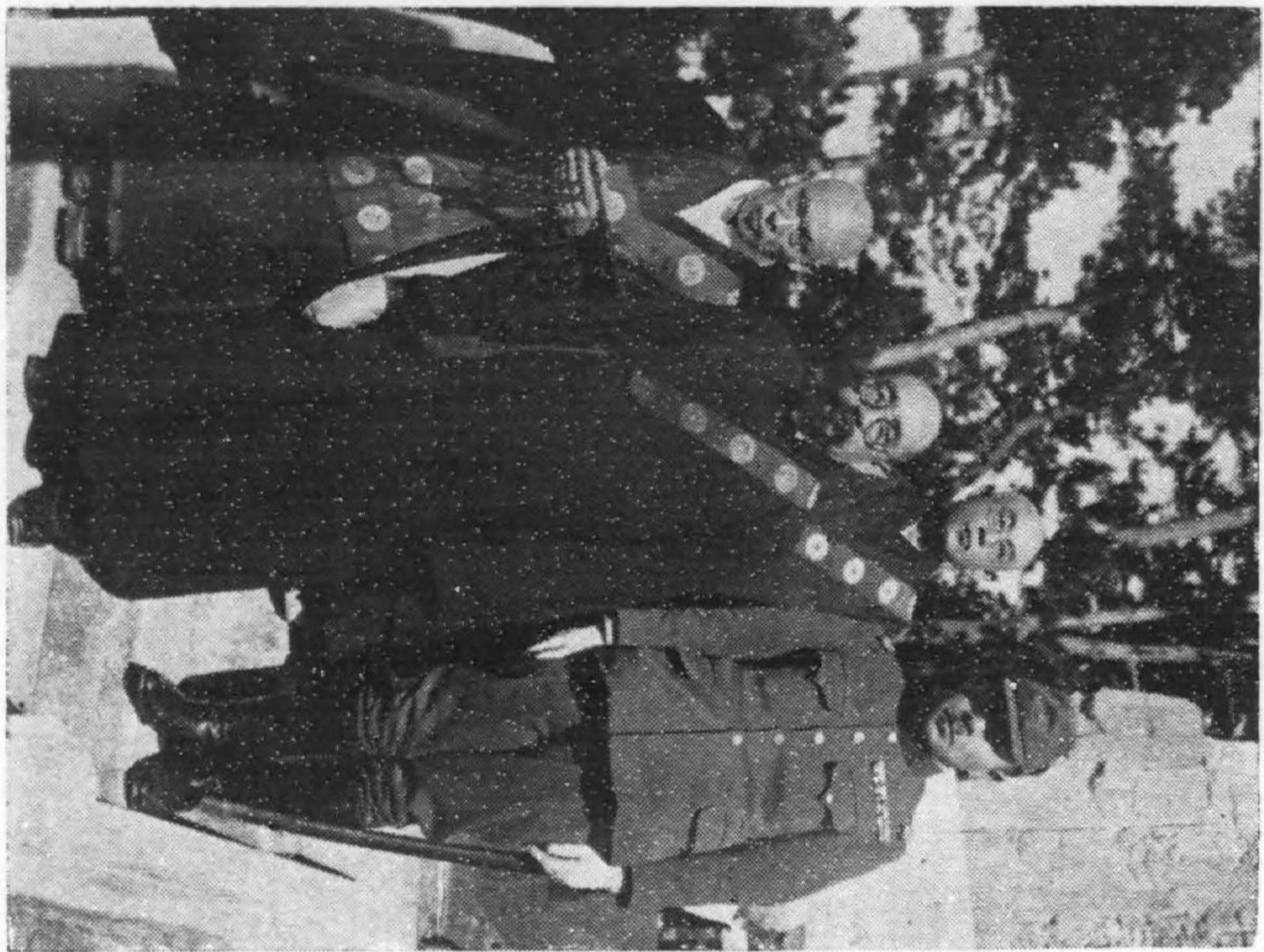
情風き如がるす語面に先祖の前年百六で撫を石臺の塔養供軍大古蒙下閣王徳



。るき與授を經華法及尊本大國護りよ師統日鍋高下閣王徳て於に前像銅大師大運日



下閣王徳後背其向回交信蒙日に下の師導師統日鍋高に塔養供大軍古蒙嶋の賀志頭淵多傳



蒙古軍大佐養塔畔に於ける左より徳王軍事顧問金川中佐、湯川信正、高鍋師、仰木圓徳師



蒙古軍大佐養塔畔に於ける李守信上將、徳王閣下一行



てみ園を下閣王徳に畔塔養供大軍古蒙



笑微の悦法大の下閣王徳しせ下降を段階の塔養供大軍古蒙



徳王閣下蒙古大軍供養塔に別れを惜み低徊去るに難き光景の後方にゆるはる海女



徳王閣下蒙古大軍供養塔の所在地に鶴賀の別れ多き汽船に乗り移るとす

尋持尊才芬躅  
法光照心滿蒙

管長 子正 漢

管長望日月大僧正題字

蒙古德王第一王子都王の  
揮毫「日蒙親睦」

日蒙親睦

宗務總監出正題字

宗務總監

日蒙親睦

古

宗務總監出正題字



## 序

高鍋日統君は、讀經說法を務めとする布教僧でもなく、また讀書執筆を事とする學問僧でもなく、さればとて所謂社會事業を興す教化僧でもない。君の志すところは、本化大聖の王佛冥合闔浮同歸の大規模ある大法を、いづれの點よりか現代において一步乃至數十百歩を、能ふかぎり進展せしめたいといふことにある如くである。されば何等かの機會を捕へては、その目的に資せんと劃策する。しかもその企圖は尋常でないのが、既に常識的の宗門人には解せられにくい處へ、君の資性は個儻不羈であり、加ふるに直情徑行である。こゝを以て往々にして誤り解せられ、往々にして常軌を逸して事を蹉跌せしめることも少くはなかつたらうと思ふ。而かも君の志の君國に在り大法に存することは、予の疑はざる所である。予つねに惟ふ、若し君を能く活躍せしむるところの大人材あらんには、君の貢獻する所は、想像の外に大なるものがあつたらうと。

君、明治晩年支那革命の交より、日支共存の世界的使命なるものを叫び、大日本肇建の大理想、佛祖豫識の娑婆即寂光の實現は、日支兩國一心同體となりて、大亞細亞民族の中軸となり

世界真正平和實現の中心勢力たるを第一歩とせざるべからずと爲し、爾來、諸般の劃策を怠らず、或は三韓順逆の蹟に照して水城院を創建して、大陸經營の記念とし、或は志賀嶋に蒙古軍大供養塔を築造し、世界的名將たる東郷元帥の揮毫を以て、永世の洪蹟として、以て怨親平等日蒙一心日支同體の先表とせんとしたる等は、その著顯なるものとすべきである。故後藤新平伯が、ヨツフェ氏を招き懇談を試みし中に、北樺太の割讓若くば賣却を要求する一項あり。その「日露内交渉に關する主要文書」の第三號の二、附屬書なるものには、右要求の史學上の論據として二點を挙げたるその第一に、第十三世紀の末、僧日持樺太嶋を經由して沿海洲に入る。是れ我が國民の先づ此の島を探險せし證なりとせるは、また君が同伯に獻言せしところに基くといふが如き、また君が尋常方袍子に非ざるを證するものといふべきであらう。

今回蒙古現代の盟主たる徳王の來朝せらるゝや、歸途九州に遊び、宮崎八幡宮に詣で、日蓮聖人の銅像に禮し、更に蒙古軍供養塔に焼香せられ、低徊願望去るに忍びざるの狀ありしといふ。徳王英毅聰明、志さるゝ所甚だ大、内蒙の諸部ひそかに成吉思汗の昔を回想して、王を中心として發憤興起せんとすと。君等が怨親平等日蒙一心の先表として建設したりし蒙古軍供養塔は、こゝに於てか英雄徳王の心中に印象して、大日本神國の徳風を感銘し、蒙古族幾千萬の心中に展轉普遍せんとする。君等の志願は十年にしてその花蕾を著けんとするものといふべきであ

らう。

三

君近く蒙古に入り、一身を日蒙一體の實現に捧げんとすと聞く。日蒙は日滿であり、將たまた日支であり、日藏であり、東亞一帶であり、大亞細亞であるとは、蓋し君の觀念であらう。君の大亞細亞民族會は、言論文筆よりまさに歴史事實の上に躍動し來らんとするの概がある。予、嘗て君の數奇の命運と、その劃策君國に盡さんの志とを見て、平野二郎國臣大人の餘風を享くといつたことがある。君いふ、われ二郎大人と同町に生ると。國臣大人は皇政維新を見るに及ばずにして凶刃に殞る。君は建國以來未曾有の國運に會し、更に活きて自家劃策の一部の實現を見んとするに會ふ。國臣大人に比してその僥倖いくばくぞ。その多幸の命運を私することなく、いよく皇國と大法との爲め、吾等をして刮目するの成果を期することあらしめよと祈り、江湖の義人が、君をしてその志を就さしめんことを併せ祈ると云爾。

昭和十四年一月下浣

鎌倉松楓居學室に於て

文學博士 山川智 應謹識

序

聖戰三週年、皇軍將士の雄叫は東亞大陸の空を覆ふた陰鬱な大氣を一掃し、その貴い血は四百餘州の地質を一變させ、今や東亞の天地は數百年來嘗て見ざる生氣に蘇りづゝある。北支にも、中南支にも、將た蒙疆にも、八紘一字、四海歸妙の旗印が高く掲げられ、この旗印の靡くところ攘黨も滅共も唯だ時間の問題として残されるに過ぎず、やがては堅き東亞協同體が形造られ、皇道日本の指導による新秩序が東亞に建設されるにちがひない。そして其れは逐次全亞細亞に擴がり、亞細亞の文化、民族、國家が全亞協同體の上に、確乎たる地步を占めて興隆するであらう。その時こそは、七百年前に於る大聖日蓮の豫言が、偉大なる現實となつて光るのであつて、我等は其時が速かに來らんことを切望して止まない。

著者高鍋日統師は、夙に大聖日蓮の理想を實現すべく、燃ゆる如き信念をもつて亞細亞の覺醒と奮起と團結とを叫びつづけ、其の實現に努むること多年。今般宗命を帯びて近く蒙疆地方の開教宣撫に趣き、日持尊者の躅をつぎて平生抱懷するところを實際に施し、以て國策に奉ぜんとするに當り、去秋徳王閣下より贈られた懇志の精神を活かすため「興亞の光」を刊行されたことは、承前起後種々の方面から極めて有意義である。勿論本書の内容は、師の信念、抱負の凡てを説き盡して居るものではないが、以て其の意氣と熱と不斷の努力とを知ることができであらう。一言もつて序に代へ、師が近く防共線として特殊的意義を有する蒙疆地方に趣かんとする門出を祝する。

昭和十四年三月八日

日蓮宗教學部長

馬

田

行

啓識

三

多喜多喜  
 多喜多喜  
 多喜多喜  
 多喜多喜

四海兄弟  
 兄弟

東亞聯  
 為一家  
 肅親王第四  
 女麻兒

甲海福如  
 洪化  
 洪化

# 興亞の光

## 蒙古軍大供養塔建立由來

高鍋日統著

### 蒙古の「クビキレ」の地點に 蒙古軍大供養塔建立さる

大元蒙古の太祖ジンギスカンの王統徳王閣下（蒙古聯盟自治政府主席）蒙古軍大供養塔に參詣す。時維れ昭和十三年十一月十四日。處は、蒙古襲來元寇國難の一大史蹟：：日蒙、日支の古戰場たる博多灣頭志嶋の嶋である。我が蒙古軍大供養塔は、その志賀の嶋の「クビキレ」といふ珍妙なる地名を有する地點に、昭和二年五月十五日日連大師敵國降伏、蒙古退治の大曼陀羅：：別名護國大本尊顯發の弘安四年五月十五日に因めるの聖日を卜して建立し了つたのである。珍名「クビキレ」：：然り「クビキリ」にあらずして「クビキレ」てふ地名の古事由來は蒙古軍の「クビキリ」に存する。「首切り」だから地名も「クビキリ」と命せばよろしいのにそれを何んと「クビキレ」とある。彼等蒙古軍、何等日本を攻めねばならぬ王道的理由も何もあつたものにあらず、英雄

の飽くなき侵略霸道主義の然らしむる所だ。すなはち天理に勝き人道に背ける謂ゆる霸道攻略の爲めであるから、攻めらるゝ日本の方からその首を切らないでも、攻めて來た方の敵自身：：自業自得の天罰として、おのづと首が切れたといふ哲理を表徴したのが「クビキリ」にあらずして「クビキレ」てふ珍妙なる地名の存する所以と予は解して居る。その「クビキレ」には、「蒙古首切塚」と稱する高さ一尺四五寸の五輪の石碑があつた。勿論、敵をすら愛するてふ大和民族の皇道心の發露としての供養塔であらう。それが、いつの間にか博多東公園の元寇記念館に移されて居る。

「蒙古軍」それは一體何者だ。其主體は我が大和民族と同一根ではないか。言はゞ兄弟であるのだ。その兄弟と六百何十年の昔に喧嘩をやらかしたといふのが、謂はゆる蒙古襲來といふのだ。

「蒙古軍」と謂つた所で、大英雄成吉思汗（元の太祖）やその子や、その孫たちが歐洲はおろか、支那四百餘州等を征

服した結果其主権者の出身地に名づけ、發祥地に因みて然るので、謂はゆる蒙古軍としての兵隊の民族的分類から申せば漢民族：即ち支那人が多分を占めて居るのだ。随つて蒙古軍大供養塔とは申せ、その實は、大陸信交塔なのである。東亞民族同心一體塔なのである。大亞細亞建國塔なのである。それは大正年間より發表せる本塔建立の趣意書に、公々天に叫び、明々地に稱し來つた所である。

その蒙古軍大供養塔に、大英雄ジンギスカンの王統蒙古復興の英主徳王閣下が參詣したといふのだから、：而も復興亞細亞の聖戰眞ツ最中の昭和十三年十一月十四日であつたといふのだから、その意義や眞に玄妙なりと稱しつべきである。

これより先、望月管長親下は、別項「七百年前の日持上人の因縁熟して、管長親下と徳王閣下の歴史的會見」の記事にある通り、十月二十二日を以て帝國ホテルに於て、徳王閣下渡日最初の妙法下種結縁があり次いで予は徳王閣下の福岡入りを機会に、蒙古軍大供養塔に參詣案内すべき旨の宗命に接したのである。法華經壽量品に曰く「久しく業を修して得る所なり」と。我等が徳王閣下と蒙古軍大供養塔に於て、日蒙同根、日支一體の回向に資し供養を爲し以て興亞聖業達成の祈念を爲し得たのも、一にそれ等の因縁薰習の然らしむる所と感謝に堪へざる所である。實は、本塔の落成は昭和二年五月十五日であるが、その除幕式は別項紹介のポスターの如

く翌三年三月七日を中心として前後一周間も舉行したのであるが、その際は、中華民國蒙藏院總裁カラチン王コンサンノルフ閣下が、參詣するゝ事に決定して居たのであるが、あまりに神經過敏的に國際影響を考慮されたる結果、遂に病氣といふ理由の下に渡日中止といふ事に相成つたのである。

予等のこの經營苦心に同情なき者共は、カラチン王は、始めから渡日せなといふ事が判明して居るのに來るゝと宣傳した山師坊主とばかり、除幕式當日は某所に於て言ふ忍びざる耻辱を與へた某々等もあつた。それ等の連中は、冷靜に本書に記述せる眞相を讀み。而もその連中は、指導階級であるとしたら、當年の非常識極まる行動を反省せむ事を切望する次第である。左にカラチン王からの書翰の一を發表し御參考に資するであらう。

高鍋大師法座遠達  
 應教時切思馳昨奉  
 手書敬悉

法座發大慈悲願建設蒙古軍供養塔俾數百年幽贊忠魂得所歸依曷勝欽仰辱承  
 賜函見台又重以本庄君諱々致屬極欲趁前瞻禮籍叙淵業經具呈乞假整裝待發適以感冒春寒寒及舊恙醫者戒以避風靜攝以致不克成行至爲悵悵北條君遠道枉駕虛勞一行本擬遣人代表△前觀禮因北條君匆々返國又未能同行尤深歡友茲特寄上祭文項詞各一通以表嚮往々忱嗣後若有

賜教仍當竭力贊助鱗鴻有便並懇 常賜德音以慰飢渴相違匪  
 速晤面緣慳翹念

輝光曷勝馳仰肅後敬頌  
 道綏諸惟

垂鑒 貢桑諾爾布拜啓  
 日本福岡市橋口町勝立寺 轉交

高鍋 日統 大師 台啓

略喇沁王府緘  
 何にしる、六百何十年來、日蒙支兄弟喧嘩の仲直りをこの一舉に斷行し、以て兄弟一致協力大亞細亞建國の聖業達成に躍進しやうとするのだ。この除幕式は相當大仕掛けで、數萬圓の費用をかけて

三千有餘マイルの日蒙親善  
 訪日大騎馬旅行隊

も組織さるゝといふ騒ぎで、今にも大亞細亞和平國が實現せんする光景であつた。その計畫の大要及委員は左の如くである。

計畫の大要  
 日蒙親善のため日蒙青年十數名は、露國産名馬オルロフ  
 トロツター種に騎し、露支國境滿洲里を起點として、興安嶺  
 を越へ、哈爾濱、長奉と、東支鐵道沿線を辿り、南滿洲鐵道

沿線を大連に南下し、船に依りて博多に上陸、偶々同所に於て開催さるゝ、蒙古軍大追悼會に参加し、更に馬を門司、下關に進め、山陽、近畿、東海道の各所に、日蒙親善和平の精神を宣傳し、帝都に至る實に三千有餘哩の大騎馬旅行會を企畫す。來りて、此の壯舉に賛せられんことを。

- |    |           |       |
|----|-----------|-------|
| 委員 | 東京市長      | 西久保弘道 |
| 委員 | 陸軍中將      | 内野辰次郎 |
| 委員 | 大藏政務次官    | 大口喜六  |
| 委員 | 商工參與官     | 牧野良三  |
| 委員 | 東京商業會議所頭  | 藤田謙一  |
| 委員 | 大阪商業會議所頭  | 稻畑勝太郎 |
| 委員 | 東京商業會議所副頭 | 大山斐瑛麿 |
| 委員 | 衆議院議員     | 大島要三  |
| 委員 | 衆議院議員     | 中村清造  |
| 委員 | 衆議院議員     | 今里準太郎 |
| 委員 | 衆議院議員     | 比佐昌平  |
| 委員 | 志村儀亥知     |       |
| 顧問 | カンジュルジャツプ |       |
| 顧問 | 高鍋日統      |       |
| 顧問 | 大隈信常      |       |
| 顧問 | 川島浪速      |       |

カラチン王の渡日中止の災難に遇つた上に、その又「日蒙親善」がよろしくない、日本が對蒙政策に資せんとする野心と誤解されては困る……といふその筋からの御注意で、折角印刷したる「日蒙親善」のポスター何千枚……それも二百圓や三百圓の費用でない。とにかく少なからざる費用をかけて立派に出来上つたポスターを、勿體なや破棄し「東亞親善」と看板のぬりかへ……意匠の作りかへ……といふ苦心談まで擔ぎ出せば際限もないが、兎に角、經濟的に、思想的に、感情的に、國際的にあらゆる方面から來る魔障を克服して蒙古軍大供養塔の落成除幕式は舉行された。換言せば蒙古軍大供養塔除幕式てふ名の下に、日滿蒙同族、日支一體を中軸とする大亞細亞和平國建設の光明は、博多灣頭から赫々として發揮されたのである。

### 建國史上の最大重要な地 點としての博多

それもその筈である。博多とは大日本建國史上最大重要な地帯で、國史の權威久米邦武博士等の堂々主張する所の大日本古代史等の有力なる史論に徴するに三貴子（ミハシラノウヅノミコ）即ち天照大神と素戔鳴尊、月讀尊の三貴子が、御父イザナギの神より、内地日本の統治は勿論、世界和平郷建設の一大使命を奉詔された事に成つてゐる。それは、大本教や、人の道教團の如き邪教迷信輩の無學文盲のお筆先の御託

宣にあらすして、これを神話の比較研究上より、これを言語學、考古學等の討究より、これを歴史地理學上の講明よりこれを歴史科學等の考察上より、綜合大觀されたる斷案である。コハ皇國建國史を如實に研究して居る者ならば、何人だも反對し得ざる論道であり予は絶対にそれを信する者である。我が建國史上、爾かく最大重要な地點である博多灣頭から、世界天照らしの天業、八紘一宇天下光宅の基礎的宏業たる大亞細亞和平建國の光としての蒙古軍大供養塔の建立……それに蒙古徳王閣下が參詣されたといふのだから、その教訓やまことに以て雄偉であり、玄妙であらねばならぬ。それかあらぬか徳川時代の大學者佐藤信淵は文政六年に「混同秘策」(宇内混同秘策ともいふ)なる一書を著述し皇道中心世界統一策を論じて居るが、その炯眼卓識實に驚くべきものがありその一半は、今や既に着々として實現されて居る。その一節(世界大思想全集日本思想篇四一七頁)に曰く

「支那國王、いはゆる清主なる者の既に困苦するを探り得て、而して後に渡海すべし。先陣の〇は、直ちに江南の地方を衝き、早く南京應天府を〇り、之を〇〇とすべし。乃ち支那人の文才ある者を登用して、清主の邪魔左道を崇信して、天地の神意を蔑如し、痛く皇國の法教を拒み、人類の艱食を憐まず、罪を皇天に得たるを以て、天罰を行つて、蒼生を救ふの趣きの大誥を作らしめ、周ねく天下に撒し、新附の支那人を憐み、その材あるものは悉く之を撰用

二十歳以上の男子七十萬を得べし。軍船兵器を多く備へて朝鮮國の西南諸州を〇〇、之を以て支那を〇〇〇の基根となし、時々勃海より以南、登州、萊州等を〇〇し、敵もし大いに備ふる時は、周施し他所を〇し、少しく勉むる時は直ちに出で、諸城を〇〇〇〇、支那人を〇ふる毎に、之に金銀衣服を與へ、美酒を飲ましめて、之を放ち歸らしめ、盛んに仁徳を施し、彼の國人を悦服せしむる策を行ひ、且つまた皇國の支那を〇〇するは、明室の遺族の請願たるの趣きを以て、遠近諸州に檄すべし。明室の子孫朱氏の皇國に在る者少からず。その内、一人を立て、明の先君を祭らしめば、これまた、支那を悦服するの一助たるべし。云々と云つて居る點に特に注目すべきである。

註、文中「十科の人材」とは、信淵の國體主義的革新教育を受けた人物である。即ち、國體主義的大學校(教化臺)の學科(誠明、神祇、儀禮、音樂、法律、武備、醫術、天數、地理、通譯)の十科卒業の新人材を謂ふのである。

信淵のこの説は「混同秘策」の總論中にもなされては居るが、その各論の「筑紫」の内「博多府」を論じて、

「博多府は筑前、豊前、豊後の三州を管領す。此の府の屬州には便良なる津港甚だ多く、海船の進退極めて自由なり殊に博多は古來有名の大港なれば、此處に治所を建て、諸州の兵を命じ、水陸の營を設け日夜操練の精銳を極むべし今此の三州の男女を計ふるに三百萬に近し。五十歳以下

佐藤信淵の論は、一見侵略の如くであるが、『ますく産靈の法教を明らかにし、萬民の疾苦を除き、處々に神社を造營して、皇祖の諸大神を祭り、學校を興立し、十科の人材を起し、日夜勉強して、長く怠ることなく、子孫永久、よく祖業を擴充し、天意を奉行して間斷することなき世界天照らし、スメラミコトの和平郷の實現を念願とせるに外ならぬ。彼れが本編をものしたるは、文政六年とあるから、その論述の筆法が、今日から見れば侵略主義のやうであるが、その實は、八紘一宇、天下光宅の天業恢弘なのである。彼れが、博多を論ずる中に、『明室の子孫朱氏』の事を以てせる點に、活眼以て活讀するを要する。

たゞ彼れが博多が我が建國史上の最大重要な地點である所以の國體學的論道を爲して居ないのは、物足らぬが、實はその博多こそは、彼れの所謂

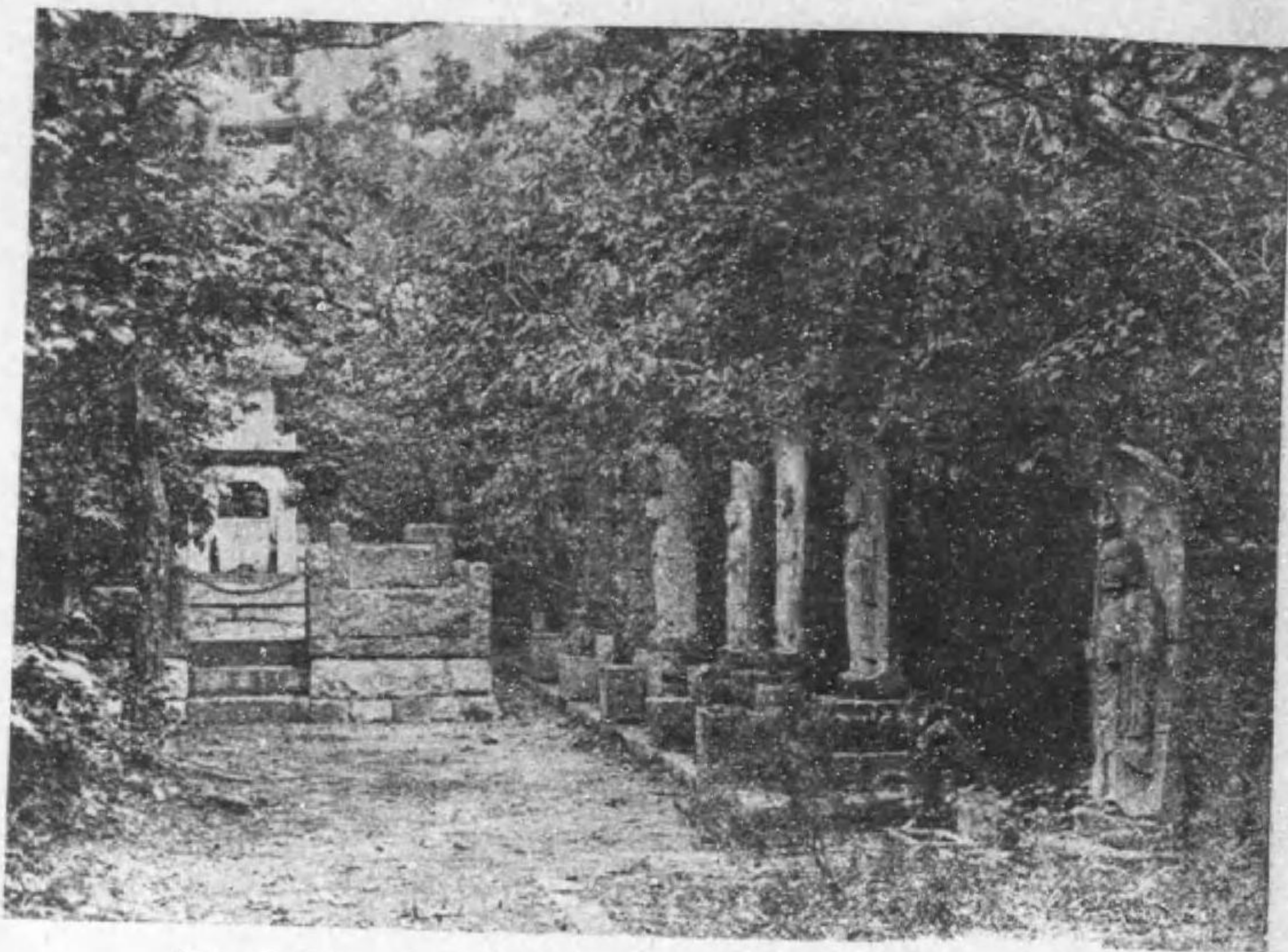
「皇大御國は、大地の最初に成れる國にして、世界萬國の根本なり。故に能くその根本を經緯するときは、則ち全世界悉く〇〇となすべく、萬國の〇〇みな〇〇となすべし。謹んで神世の古典を稽ふるに「所知青海原潮之八百重也」とは皇祖伊邪那岐大神の速須佐之男命に事依し賜ふ所なり。然らば則ち、産靈の法教を明らかにして、以て世界萬國の蒼生を安んずるは、最初より皇國に主たる者の要務たることを知る」

てふ最大重要な地點であるのだ。「大地の最初に成れる國」とは「三貴子の使命」に約せば開顯的であり、「皇國に主たる者」とは大日本皇國の主権者としてのスメラミコト(天皇)であらせらるゝことは申すまでもないがその天皇の第一世にてまします神武天皇の御生母は博多の豊玉彦尊の御子玉依姫尊であらせらる。即ち龍宮世界の物語の乙姫さまの歴史御正體にてあらせらるゝ。換言せば博多灣頭及びそれを中心としたる附近一圓は龍宮世界なる物語化して傳へねばならぬほどの大日本建國史上の要地であり神地であるのだ。その灣頭の香椎に 仲哀天皇によりて大陸經綸の大本營は置かれたのである。その雄圖を繼承し給ひしが 神功皇后の新羅征伐なるものである。その新羅征伐とても征伐にあら

で、新羅はモト／＼日鮮一域であり、速須佐之男命(スサノオノミコト)の國であり、神功皇后御母系の祖先たる天日槍(アマノヒボコ)——新羅の王統の國であり、神武天皇の御皇兄稻飯命(イナイノミコト)の王統を垂れ給ひし所である。この日鮮同族の根本への還元の聖戰が所謂 神功皇后の新羅征伐なるものである。征伐とは申すものゝ、實は還元の聖業なのである。それ等の建國史的一大警訓を垂れ、大陸經綸の一大哲理を啓示せるの地が博多なのである。(詳細は拙著大日本建國神論第二卷八十八頁以下参照を乞ふ) 佐藤信淵が、博多の地點を論ずるに因み特に「明室の子孫朱氏」を叙したのは、決して偶然ではあるまい。

### 生死一如安樂の 寂光土は大日本國

その博多から三里の太宰府神社は菅公所謂天神さま(菅原道真公)を祭つた所であるが、その御神殿の左側に「和魂漢才之碑」が立つて居る。(北野神社にも立つて居る)その碑文は「漢土三代周孔之聖經革命之國風深可加思慮也」云々。とある。ツマリ、支那の『エライ聖人や賢人の教へが如何に尊くともその王統は常に猫の目玉のやうにぐる／＼變り皇國大日本のやうに天壤無窮萬世一系ではないから、そんな外國の學問に迷ふなよ……との誠めである。



(墓の甫振張代初は端右所墓の家張統王國明大る在在市屋古名)

この革命なるものが、ナカ／＼に恐ろしい事で、外國の興

亡は一に革命の然らしむるものと言ふも不可はあるまい。殊に支那と來たらそのお手本で王朝は先さまお代りイタチゴツコ、ネヅミゴツコで宛ふ常設修羅劇場の觀がある。支那建國何千年などと言つてみた所でその主権者は猫の目玉のやうにぐる／＼變るのである。その夏の國とても十七主四百三十九年、殷は二十八主六百四十四年、周は三十七主八百六十七年であり、秦の始皇帝の如き萬世一系天壤無窮と皇國大日本の眞似をするつもりで居たが、皮肉千萬にも三主四十年といふ悲惨なる滑稽を演じた。爾來、前漢十三主二百一十一年、後漢十三主百九十六年を始め、三國、西晋及東晋、五胡十六國南北朝、隋、唐、五代、宋、遼及西遼、金、夏、元、明、清といふ風に王朝が變り、易姓革命があり、一王朝として千年の壽命すら有したものは無い。この易姓革命は、新主権者が君臨すると同時に前朝のものは一切合切片付けて仕舞ふ。「三族を誅し、九族を滅し、遺種無からしむ」るのが、その特色である。ロシアのロマノフ朝の滅亡も同様、否、ヨリ以上の悲惨なる歴史を残してゐる。宋の順帝の如きは、その謫位の時、我が子孫は、是より後、二度と天子の家に生れて來ない様にと泣き叫ばれたほどのあはれをとめて居る。彼の願後身世々勿復生三王家」

の語は、すなはちその慘劇を物語るものである。ところが我が皇國大日本はどうだ、嘗に 御皇室は天壤無窮、萬世一系にましますのみならず、他國の王統すら御保護

遊すのである。今更らその古き歴史を出引さずとも、清朝最後の皇帝たる宣統帝の如きは、間一髪の危い處で玉體の安全でありし事は一に 天皇御稜威の然らしむる所である。

これを近き歴史特に徳川時代に徴するも、蒙古族の元から亡ぼされた明の王統の如きは、今現に名古屋市東區片端町二丁目十三番地に張秀彦氏（その令弟は張貴之氏として東京に現住）されて居るのである。この王統が、我が日出づる 皇國に、儼然として保護されて居る事は、名古屋の土地の人すら知らないくらゐであつた。想ふにこれ、徳川氏の鎖國政策等の都合上、絶対秘密にされたものらしい。この嘘のやうな事實は、貴族院議員赤池濃氏の研究に成れる「明の君臣の亡命と其の庇護」なる著書に公表されて居る所である。予も本書に啓發されて名古屋市に於ける張家の墓所に回向供養、以て日支共存共榮、大亞細亞建國の祈念にも擬した事がある。前紹介した佐藤信淵の混同秘策の中に「明の王統朱氏」云云の記述は正しくこの張氏の祖先なのであつた。古來支那では「滅國を興し絶世を繼ぐ」と言はれ、それが王者の理想とされて居るが、あはれ歴史的事實はそれを裏切つて居る。

今日の日支事變を見よ、皇國大日本は何んが爲に戦ひつゝあるか。共產匪や、蔣介石の爲に支那國は滅國たらんとし支那人は絶世（滅亡）せんとするのを救護せんが爲めではないか。爾かく我、皇道天然法爾の發動は、生も護るのみならず、亦死も救ふのである。

軍の供養塔を建立せしめたといふわけだ。蒙古軍とは申せ、前述のやうに、漢民族（即ち支那人）が多分であるので、血は水より濃しの人情にもれず。漢民族であり、支那人である祖元が建立せしめたといふのは、もとよりこれ當然の事で、特にほめ立てる迄もない事である。ましてや彼れ出家沙門の身であり而も同文、同血、同族の間柄としたら何にも不思議ではない。別項に寫眞凸版に複製して紹介したるが如く、その碑文は何にが何んだか薩張り讀めない。コハ勿論、我が日本に仇なし來れる賊軍を祭るのだから、わざと難讀離合の文字を使い、文章亦た古體を用ひ、建立地とても奥州不毛の邊地を特に求めたその事情は、言はずと知れた皇朝に憚り、幕府に祕し、國民に知らしめず、心と心と相通する魂ひのラヂオ主義を採つたものである。因みこの碑文の意味は今、活字が無いから略するが、大元蒙古軍戦死者の供養たるや勿論の事である。

今、予は支那僧祖元が、蒙古軍の供養塔を建立したのは、その謂はゆる蒙古軍なるものゝ民族的要素は漢民族即支那人を以て大多數を占めて居る點から觀て、その支那人であり、漢民族としての祖元和尙としては、當然の仕事であると申ししたが、いづくぞ知らん斯く申す予等日本民族と蒙古民族なるものは、本來同族なのであり元來同根なのである。であるにも拘らず、民族學や人種學の發達せざる時代の人々は全然異民族であり、異人種のやうな事に誤識してゐたのである。

明治天皇は 國の爲め仇なす仇は摧くとも、いつくしむべきことな忘れぞ

國の爲めたゞれずなりし民草に惠の露をかけなましそと御製遊ばさる。「國の爲め」とは單に大日本國のみではないのである。トツクニも然りである。吾等が博多灣頭に於ける蒙古軍大供養塔の建立は、正しくこれ 明治天皇の大精神を國際的に顯彰し奉らんの外ならぬ。げに我が日の本國は、生死一如の安樂國であり、靈肉救済の寂光土とや稱しつべきである。蒙古軍大供養塔と言へばこゝに六百何十年の昔にもこの擧の有りし事の、珍歴史を發見したから序ながら一言する。それは

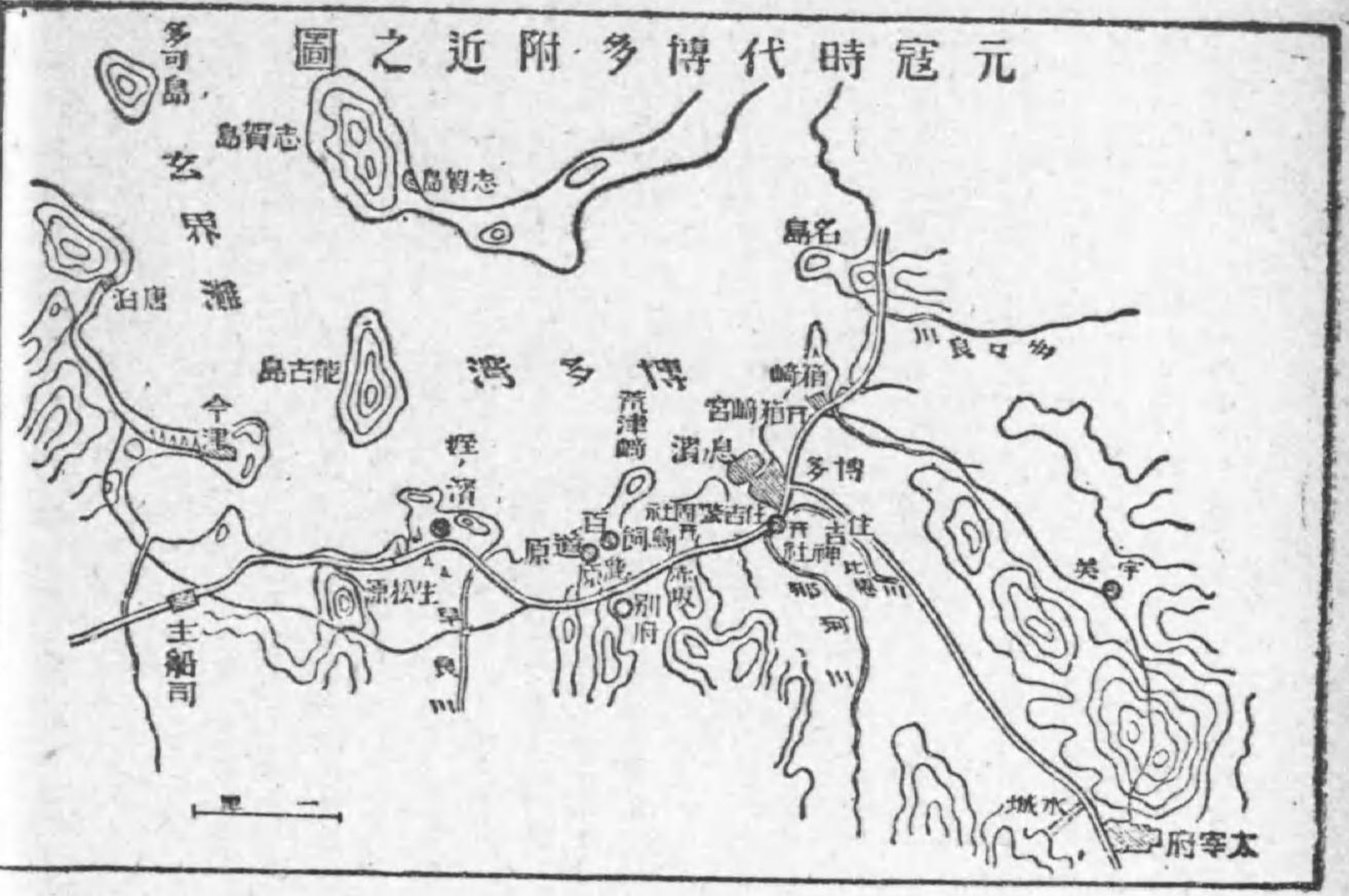
### 弘安五年に支那僧が 建立したる蒙古軍供養塔

といふ珍歴史なのである。これは關東大震災數年前に發見したる古文書によつて承知したのであるが、實に珍らしき事柄である。この碑は、仙臺より鹽釜に下る道中、比丘尼坂とへるがあり、その下道を燕澤といふ。その燕澤に弘安五年に建立されたといふのだから、今より六百何十年といふ昔である。即ち蒙古襲來元寇國難の翌年に建立されたのだ。その建立した人が、支那僧の祖元和尙の從弟里末清俊といふ人なのだ。祖元はこの清俊にその碑文を托して奥州不毛の地に蒙古

イヤ、今日でも國民の大多數は左様な認識不足といふよりも、むしろ無認識、無知であると評しても過言でないほどの状態である。

今の中華民國、孫逸仙等の革命思想によりて易姓革命されたる所産としての中華民國……その組成せる國民なるものは、謂はゆる滿、蒙、回、藏、漢の五民族の共和とあるが、その五族の中で、我が大日本民族と最も血の近き者は蒙古族ではあるまいか。その容貌を見よ。その骨格に徴せよ。その氣性等に考へよ。予は慥かに爾かく信するものである。因みに、その謂はゆる蒙古軍の内、江南軍は漢民族とは言はれてゐるが、回教（マホメット教）徒も相當居たものと信する。若し左様としたら、我等蒙古軍の大供養塔（祖元和尙のそれではない……）なるものは、その回教徒も共に祭つた事に相成る。

予等が、大正の晩年、大亞細亞和平建國の光明として日本塔の建立を發表するや、大亞細亞主義に相當理解あるべき職掌柄にも拘らず日本の本を忘れるな日本人の方はどうしたと……反問などする人々があつたが、我等は決して日本の本を忘れての盲動ではない。否むしろ斯くする事が日本の本を強固にする所以だと確信してゐる。蒙古軍大供養塔を建立する事、その事が直に我が大和島根を固める所以の最も意義ある文化事業なりと思考するものである。「日本の方はどうした」とのお尋ねではあるが、その日本の



方こそは、博多東公園(千代の松原)に、龜山天皇の御銅像を  
 始め奉り、立正安國の日蓮大師の銅像を建立し、年々歳々盛  
 大に御祭りが舉行されて居る。蒙古襲來元寇國難に殉難し戦  
 死せる我等の祖先は斯くして回向され、供養されつゝあるの  
 である。殊に立正安國主義の我等にありては、「日本の本を忘  
 れる」ところの驕ぎでなく、その大日本を建設遊ばされたる  
 建國の神々の御垂統の地：我等大和民族祖先の郷土滿蒙の  
 民族も共にお祭り申したのが、昭和二年五月十五日を以て建  
 立せる我等の蒙古軍大供養塔なのである。若夫れ強ひて「本  
 を忘れて居る」と言張るならば、予等は敢て反問するであ  
 らう。蒙古襲來元寇國難よりも、更に六百年も前昭和の年代  
 より二千何十年も前天智天皇時代日本と支那との大軍が、  
 朝鮮白村江(今の錦江)に於ける大戦の結果あはれ日本軍の大  
 多数は全滅に等しき敗戦を演じたのである。(拙著水城論參  
 照)その爲に大陸政策は千二百年の長期に及びて中斷された  
 のである。明治天皇の朝鮮併合迄千二百何十年といふ長期の  
 間、嘗に大陸政策を中斷し、放棄せるが如き結果と相成つた  
 のみか、その朝鮮放棄の期間に於て、日本開闢以來の大國難  
 は發生したではないか。文永、弘安の元寇は如何。刀伊の賊  
 の襲來は如何、應永年間蒙古襲來は如何、豊太閤征韓の不  
 結果は如何、徳川時代に於けるロシアのアルパチン市建設以  
 來の南下政策の結果は如何。即ち日露大戦の原因や果して  
 如何ぞ。ペルリより熱鐵を呑まされたる國辱は何んが爲め

ぞ。(太平洋問題は單に太平洋のみにては解決不可能だ。大陸  
 政策を無視しては金輪際駄目だ。大陸政策亦以て然りとす。  
 海と陸の統一的政策を我古典上ミハシラノウヅノミコ——三  
 貴子とは稱す。この三貴子の建國史に無自覺なりし政策が徳  
 川の反國體政治である。反國體。反建國精神の閥族政治の眞  
 ツ最中に北はロシアより、南はアメリカや、南蠻方面より國  
 難のタネがマカれた。それ等のあらはれの一種が、ペルリか  
 ら熱鐵を呑まされたのである。)

それ等の國辱外交や國難や國難のタネの原因は一にかゝり  
 て朝鮮を放棄せざるを得ざる一大悲痛事が産んだのである。  
 その悲痛事を演じたのが、天智天皇時代の日本と支那との大  
 戦だ。謂はゆる日唐大戦である。その役に於ける我が殉難戦  
 死者は果して祭られて居るか。元寇よりも六百何年前、昭和  
 より千二百何十年前に於けるこの殉難戦死者は果して祭られ  
 て居るか。これ予が「日本の本を忘るゝな」と注意せる人士  
 に反問せんと欲する所である。予等が、天智天皇の御創建皇  
 國最初國防の要處、皇國最先築城の靈地としての筑前太宰府  
 水城國防史蹟に於ける「大陸山水城院」の建立は、正しくこ  
 の殉難戦死者を祭る爲めであつた。我等は斯くして「日本の  
 本を忘れて」は居ないのである。

蒙古襲來を豫言し、立正安國を警策せる日蓮大師は何んと  
 教へられたか。大師が文永八年九月十二日相州片瀨龍の口に  
 於て、北條幕府(鎌倉政府)の爲に首刎ねられんとする時、

「今夜頸切られにまかる也、此の數年が間、願ひし事はれ  
 也此の娑婆世界にして、雉となりし時は鷹につかまれ、  
 鼠となりし時は猫に噉はれ或は妻子の敵に身を捨、所領  
 に命を失ひし事、大地微塵よりも多し。法華經の御爲  
 めには一度も失ふ事なし。されば日蓮貧道の身と生れて  
 父母の孝養心にたらず、國恩を報すべき力なし。今度  
 頸を法華經に奉つて其功德を父母に回向し、其餘をば弟  
 子檀那等にはよく(配當)べしと申せし事はれ也」

類纂遺文三九六頁

と教誡された。『今度、頸を法華經に奉つて其の功德を父母に  
 回向し、其餘をば弟子檀那等にはよくべし』の一條、これ  
 今日政治的用語を以て言ふならば、民族自決主義の指導原  
 理にあらずや。否、自決ではイケないといふなら民族協和で  
 もよろしい。その協和の根本原理はこの一言にして盡くされ  
 て居る。「法華經」とは何んだ。宇宙の公道人倫の常經だ。否  
 其原理と實踐が統説されたる大王經典である。諸法實相の汎  
 神論と天壤無窮久遠實成の一神論との統説の妙典である。そ  
 れを修行し、實踐し、實行する事ほど、天下に善事は無い  
 としたらその功德たるや亦天下第一、世界最高のものだ。そ  
 の功德を「先づ父母に奉る」とある。大ていの宗教家なら、  
 一切衆生にとが世界全人類にはよくべしと言ひたい所だ。日  
 蓮大師はそんな不自然な事は言はない。「先づ父母に供養せ  
 ん、回向せん」等と申された。それが本統の事だ。人間とし



# 日支親交

尾野實信大將揮毫

前の關東軍司令官尾野實信大將揮毫

ての自然の聲だ。そこから他人を愛し、弟子（大師の弟子出家）や檀那（大師の信者）や（大師の弟子出家）や（大師の信者）を愛する。それが順序だ。それを無視する者は秩序の破壊である。無平等である。我等の蒙古軍大供養塔の建立の由來先づ日蒙同族、日支共榮等の

原理に安住して大亞細亞主義和平建國の聖業達成以て八紘一宇、天下光宅の理想の實現に貢献せんとに外ならぬ。我れこれを興亞の光とは稱す。豈に自贊と評すべけんや。我等のこの運動は決して我等の發明でも、專賣特許でもない。我が大日本建國の神々の歴史的御教訓であり、就中、六百何十年前に於ける日持上人の身を以て警訓し玉ひし所である。

### 日持上人は實に大陸教化の先行者である

日持上人は、日蓮大師にあまたの弟子のある中で六英傑の一人で、大師の入滅後永仁三年元旦を以て、世界鎮國の山富士の麓を出發して北海道よりサガレンへ、サガレンより滿蒙支那に進入したる英雄僧である。上人の大陸進入は單なる宗教の開教といふが如き事でない。その理想とする所は、一天四海皆歸妙法てふ大規模ある玉佛冥合主義第三帝國主義者であつた。早く言はゞ昭和の今日ある事を六百年前より、身を以て豫言したる眞の大日本人であつた。

上人の事は、予は日刊新聞「日本」に長編論文を連載したのであるが、その中の一節を國策指導の一原理に約して大亞細亞人（昭和三年六月號）に發表したるものを左に轉載し以て今日の警訓に資する。曰く、

普選劈頭の特別議會では七八人の少數黨が二大政黨を自由にあやつたといふので、小黨の有難味を妙な所に應用せん

とするけふこの頃、酒井管長親下が後藤子を招待すると聞いたら、世間では坊さんを中心とした第三黨を造るんだなどと珍らしがるだらうが、毛頭左様な政治的意味や黨派的野心ありての業にあらずして這は一昨年（昭和元年）來岡田内局時代からの予の献策が實現されたので、その献策といふのが六百年前に於ける日持上人蒙古入りりの歴史的策勵の然らしむる所である。然らば後藤子と日持上人とはどんな關係があるかとは、予のこの運動についての何人もが發する疑問であつたが、それも何んの不思議もない事で、予爵によりて日持上人の雄圖や理想の一部が國策に活現されんとした事に起因する。今更ら言ふまでもなく、予爵は大正十二年の春日露内交渉の主人役で、ロシヤのヨツフエ氏を日本に招致した人である。予は前年サガレン軍に従軍し聊か日持上人の大理想の實現に奉公しその博し得たる信念に依り献策したる結果、宗務院に於てはその献策が採納され遂に左記の如き案内狀が發せらるゝ事に相成つた。案内狀に曰く、

拜啓貴聖彌々御多祥之段奉賀候、さて予爵後藤新平氏は數年前東京に露國のヨツフエ氏を招き

北樺太島（北サガレン）の割讓若くは賣却を要求するに當りて主張すべき史學上の論據として

『第十三世紀の末、僧日蓮の高足日持、樺太島を經由して沿海州に入る是れ我國民の此島を探險せし證ある初めなり』

と主張し日持上人入蒙の雄圖を國際的に紹介されたるの人由來滿蒙等は我が新世界政策樹立の基調を爲すべき重要な地帯なり。今や東洋の風雲は我が國民として座視すべからざるものあり就中元寇國難の結果に入蒙の雄圖を垂れたる日持上人を有せる我宗門人としては特に奮起を要すべきの秋と存入候。此際北方アジアに關し特殊の經綸抱負を有せる後藤子爵を招待し別記プログラムの通り御高話拜聽旁々粗餐呈上致度右管長親下の御思召に依り此段御案内申上候敬具

昭和三年五月十九日 宗務總監 望月日謙  
 教學部長 加藤文雄

プログラム

一、日時 五月二十九日午前十時半集會  
 一、會場 池上本門寺大書院  
 一、座談會 午前十一時より  
 一、午餐會 十二時半  
 一、講話 午後一時半  
 一、記念撮影

予は「日露内交渉に關する主要文書」を有してゐるが、その第三號の二附屬書に

「北樺太島の割讓若くは賣却を要求するに當りて主張すべき史學上の論據」

といふがある。左にその全文を紹介しやう。曰く。其論據に二あり。

せるが爲め止むことを得ず採りたる處置なること。  
(二) 黒龍江地方及樺太島の侵略は、極端なる帝國主義を抱懐せし露國前政府の暴力政策の結果なること。

三八

# 東亞信交

昭和三年七月 徳吉

(蒙軍)使公深芳の年當式幕除成塔愛伏大軍古蒙

先づ第一の論據を詳説せん。

(一) 樺太島は夙に我邦の勢力範囲に屬し明治八年(一八七五)之を千島列島と交換せるは露國が暴力を以て壓迫

「松前島郷帳」を幕府に上る。中にカラトの名あり、即ち樺太島なり。第十八世紀の初め松前藩、幕府の命を奉じて北地

の地圖を献す。樺太をカラトシマと號し之を島嶼とす。露國人ネベルスコイが其島嶼なることを發見せるに先だつこと百四十八年なり。  
千七百八十六年、幕府、最上徳内を樺太に遣して之を踏査せしむ後屢次幕吏派遣の事あり。千八百九年、間宮林蔵幕命を奉じ樺太を探險す。其目的露國の境界の事情を知るに在りしかども、樺太の島嶼にして其境界を看出すべきにあらざるを知るに及び對岸黒龍江沿岸の地に渡り滿洲官吏の出張所たるデレンに到りて歸れり。最れ露國人が樺太の島嶼なる事を發見せるに先だつこと四十年なり、幕府、其復命を得て全島を北蝦夷地と命名せり。

なせしと雖も日本は本國近きを以て移住民繁殖の力に於ては露國は到底日本の敵に非ず。然るに日本が能く隱忍して衝突を避けしは其國民の美德の致す所なりと、蓋し彼が前述の如き暴虐を敢てせしは、我國を刺戟して全島を放棄するの已むなきに出でしめん策なりしならん。

北樺太の割譲若くは賣却を要求するときは彼必ず言はん北樺太若し他國の領有に歸せば黒龍江を脅威し浦鹽との連絡を絶つに至らんと(是れ近東會議に列席せる露國人チチエリンが我朝日新聞特派員の間に答へし所なり)露國前政府が此説を唱へて私の要求を拒むものならば當然のことに係る。然るに今日の勞農政府が此説を唱ふるときは是れ自由主義の假面を被りて前政府の侵略主義を續行するものと謂ひつべし。

千八百五十三年、露國使節ブチャーチン長崎に來りて國境を議せしより兩國の間屢次其議を重ね、我は大に讓歩して五十度説を提出せしと雖も、彼は全島の掩有を希望して止まず、已むなく雜居を約して以て王政維新に及べり。  
明治の初年、露兵屢次我官舎を襲ひ、土人の墓地を發掘し或は漁場を蹂躪し暴戾跳梁到らざるなく、毫も我官憲の制止を聽かず、甚だしきに至りては露國軍隊の我移住民住居の地に埠頭工事を起すあり、露國人の我漁夫及農民を殺して金穀を強奪するあり、又露兵の自費我官舎に放火するあり、我政府は其終に兩國大衝突の端を發せんことを虞れ、斷然樺太千島交換の約を結べり。露國人ウラヂミールは其著「太平洋に於ける露國及西比利亞鐵道」に述べて曰く、兩國雜居の約を

元來、黒龍江地方は、清國の領土なり。其政府長髮賊の亂に苦しみ、此方面の防備を怠れるに乘じ暴力を以て之を強奪し、其扞衛として私の勢力範囲たりし樺太島を掩有するに至りしなり。畢竟前政府の罪惡の遺物たるに外ならず。當時露國外務大臣ネツセルロードは東部西比利亞總督ムラビヨフの暴力政策に反對し、此の如き手段を以て他國の領土を強奪する時は終に事端を惹起するに至らんとて、二人各々黨派を結び廟堂に相争ひしと傳ふ。以て其の正當の手段に依て掩有せるものにあらざることを知るべし。勞農政府たるもの宜しく前非を悔ひ適當の處置を採りて以て、其公明正大を證明すべし。庶幾くは列國の同情をも得て露國新政府承認の期を速

三九

めん。

以上、その全文である。日持上人の六百年前に於ける入蒙を目して單に六百年前に於ける歴史の夢物語りとし、壯快なる旅行談とのみ思つてはならぬ。昭和の現代に於ける國民としての、否、東方民族としての、活動すべき、玄妙雄大なる使命を警策されたものである。予等は之を宗教的純文化的方面より皇道を宣布せんと欲するものである。豈に他意あらんや。

以上、大亞細亞人の記事である。以て、日持上人の大陸進入が、普通一般の宗教宣布といふが如き單純なる運動でない事が推知し得られやう。

我等はこの日持上人の大信念と加藤清正公が、オランカイ（今の滿洲國間島省延吉方面にまで）進入せられたる雄圖を顯彰すべく昭和十二年六月一日を以て、清正公のオランカイ進入の史蹟に齋藤太氏、石本男爵等と共に日正會なるものを組織しその發會式を兼ねたる大講演會を左記のリーフレットの如く開催し、齋藤太氏の如きは、その所有に係る地所家屋を提供し、大陸開教の即是道場に轉活妙用して今日に至り、多々益々奮勵努力しつゝあるのである。そのリーフレットに曰く

#### 日滿建國精神大講演會

六月一日午後七時より 於延吉日本小學校  
想起せよ、聖雄日持上人は六百年前富士山の麓を發足して

#### 日本建國の七大理想と 滿洲建國の世界的使命

なる演題下に、非常時警策の獅子吼的講演會を開催せんとす。

更に日統師は夙に神典の科學的研究上より鮮滿等の大陸は、天孫民族祖先の郷土たる所以の大義を「神威護國論」等諸種の著書を公刊し、筆に、口に、事業上に活躍せられつゝあるの人たり。

非常時の此際、護法憂國の士女の奮つて來り聞かれんことを勸奨す。

昭和十二年六月一日

聖雄日持上人信念宣揚

英傑清正公雄圖顯彰

主催 日 正 會

日正會事務所（滿洲國間島省延吉街  
齋藤太方（電話延吉六〇一番）

後 援 帝國在郷軍人會延吉分會

延吉國防青年會

以て六百何十年の昔に於ける日持上人大陸妙化敢て宗教的開教と言はず。然り大陸妙化である。妙化の意義の裡には、スメラミコト主權の御稜威も、平和の爲めてふ統帥權の神武も含まれてゐる。日持上人は、その意義をヨリマス（光顯すべく、大陸妙化の聖業に精進された。その大精神を相承し

四〇

北海道に入りサガレンに渡りシベリヤより滿蒙に進み、六合統化八紘一宇の護國大本尊の正義を下種せるにあらずや。又見よ英傑加藤清正公は三百年前征韓の命を受くるや護國大本尊と建國祖神としての三十番神を祭り國體開顯の祈願文を奏し威風堂々釜山に上陸し長驅會寧に入り二王子を保護して皇國神武の使命を光顯し更にオランカイ（現間島）に進み、一舉、宿命的大陸政策解決の雄圖を垂れ昭和現代の非常時を警策せるにあらずや。

今回、上海に於ける皇軍の慰問より此處清正公進入のオランカイの史蹟に錫を留めたる高鍋日統師は昭和二年を以て護國大本尊の同志と共に、蒙古襲來元寇國難の大史跡九州博多灣頭に蒙古軍大供養塔を建立し以て東亞平和國創建の大精神を提唱し來れるの外天智天皇の朝、日唐大戰の結果に朝鮮を日本の統治上より放棄せざるを得ざる一大悲痛事が産める筑前太宰府水城國防史蹟に元朝鮮總督齋藤子等の後援の下に、大陸山水城院を創建し日鮮同城：：日滿同根：：日蒙同族：：日支共存：：東洋和平：：大亞聯盟：：世界彌榮のスローガンを高く揚げ以て國體原理の宣揚と建國精神の恢張に活動しつゝあるの人たり。我が日正會。

日持上人と清正公の大陸妙化、世界イヤサカの精神を、ヨリ益顯彰すべく日持の「日」と清正の「正」とを會名とせる我等の學團  
は、日統師に請ふて

法脈を傳統すべく活躍されたのが加藤清正公である。公は今  
の滿洲國皇帝陛下の祖先たるヌルハチユ氏が三十三四歳の時  
興京の奥で日明大戰の結果や如何にと、獲物を狙ふ猛虎のや  
うな眼を光らして居たのである。清正も三十何歳の壯年、否  
青年日本武士として威風堂々オランカイ今今の滿洲國間島省  
延吉（局子街）方面迄進撃したのである。たゞ遺むらしくは、豐  
太閣が征韓の眞つ最中に薨去した事や、アノ小西行長等の國  
辱外支や、海軍の敗北等の爲に、折角の大業も不得要に終  
つたのであるが、然し清正の征韓進滿のそれは、豐公の武力  
戰に開眼供養したも同様であり、清正公は

天照皇大神宮、八幡大菩薩の御たてなされたる御札な  
り。神慮にまかせ追ひつめ、帝王を生捕申すべし（拙  
著豐太閣と大日本主義參照）

と稱しての入滿であり、征韓であるので言はゞ豐公の大陸  
政策を國體信念を以て點睛したも同様である。而も清正公の  
大陸に於ける武力行使の精神は一に三十番神（大日本建國の  
神々と支那泰山の神々赤山大明神）の指導なりとの大信念の  
然らしむる所であつた（拙著大日本建國神論、約壹千五百べ  
ーシに及ぶ論編は公の大陸政策を畫龍點睛的に論道しつゝあ  
る。）

この日持上人の大信念や、豐太閣や清正公等の大理想を光  
顯しやうが爲の日正會なのである。日は日持上人を表し、正  
は清正を示す）

事の成るは成るの日に成るにあらず由つて以て成るの原因があるのだ。朝鮮が併合された。滿洲國が建設された。等と言つてみた所で、その爲に我等の祖先が、人柱に立ち、捨石に相成つた事を斷じて忘却してはならぬ。更に日持上人や清正公に因みて忘却しては相成らんのは間宮林藏といふ英傑である。その英傑間宮林藏とても日持上人の大陸妙化に感孚して然る所以と予は確信する。間宮氏の墓は現に深川淨心寺の寺中に在る間宮氏は日持上人や清正公と同じく立正安國宗を宗とせる信者である。間宮氏は、サガレン(樺太)が島であることを發見した人であるが、ロシアが黒龍江畔にアルパチン市を建設し漸次極東侵略即ち我が大和民族祖先の地に南下政策を實施し來り、遂にネヴレスキーなる海軍青年士官によつて同じくサガレンが島なりと發見したる何十年前からすでに間宮氏はその名の示すが如く間宮海峡を發見したのである。否、間宮氏より何百年前の日持上人はサガレンが島であるかないかの問題よりも、大日本建國の神さまの昔に還元せしむべく精進されたのである。

大體、ロシア人などは、サガレンは亞細亞大陸の陸続きぐらゐに誤解して居た。サガレンは誰れが何と申したからとて我が大和民族祖先の土地である。そのサガレンを、もとく日本のものであるサガレンを、反建國精神の權化徳川幕府：……反國體主義の盲目政府「さきくあれ」「行矣」の御神勅を打忘れたる閥族政治の爲に、そのサガレンをすらもロシア

もの、外國のものど心得るやうになり、それを千島と交換したといふのだから、この位、ばか氣た外交があるものでない。予は、間宮氏の墓前に回向して大に感ずる所あり、昭和七年四月二十一日間宮林藏追慕大講演會を、間宮氏墓地の所在地と同じ土地「深川小學校」の講堂に、左記の趣旨書の下に開催したのである。

肅啓 愈御雄健爲國家慶賀此事に奉存候陳者帝國北門の銷鑰「間宮海峡」の名に依りて天下に籍甚せる間宮林藏先生の英名は小學の兒童と雖も能く之を知る處然るに先生が熱烈なる立正安國の信奉者たり其の北方探險の壯舉も遠く六五十年の昔日本佛教海外弘通の先覺として不滅の偉功を樹て現に其下種結縁の地に滿洲新國家の成立を見たることに依りて意義一層深重なる日持上人北境巡錫の雄圖に感孚したる結果なることは恐らく未知の人妙からざるべしと被存候 今や國家未曾有の時局に際會し當年邊防の國士としての先生の偉名が新たに識者の間に深甚なる注意を喚起しつ、ある折柄先生の雄圖が如何に其由來する所深く且つ遠きかを闡明して一は以て先生の眞の志を知ると共に他は以て立正安國主義本來の面目を明かにするは現下の時局に對し最も適切なる一舉たるを相信し先生の墳墓が現に深川淨心寺境内に存在するを機縁とし之れを深川在郷軍人會に議たる處同軍人會は欣然として予の獻策を諸し熱誠なる輪旋の下に來る二十一日左の如く「間宮先生追慕大講演會」を開催するの運びと相成り候當日は予の主たる講演の外に元予がサガレンに於ける軍除布教の際縁を結び爾來立正安國の眞意義に對し深き理解を有せらるる元サガレン派遣軍判

令官井上一次中將及び元同軍々政部長たりし高須俊二少將の兩將軍も亦出席の上有益なる講演有之候 日持上人の偉勳は申す迄もなく間宮先生と云ひ彼の江川坦庵先生と云ひ帝國の發展及び國防に關する重要な役目が熱烈なる立正安國主義の信奉者に依りて果されつつある事實は我等に對して現下の時局に對比し來り意義玄妙なる警訓を示すものに有之候 當日は何卒貴下に於かせられども御寸暇を割き萬障を排して御貴臨の上斯の「間宮先生追慕」の美舉に依る立正安國主義宣揚の國家的運動をして一層の效果あらしめられ度特に茲に御案内申上候 敬具

昭和七年四月十五日

爾かく日持上人と言ひ清正公と稱し、間宮氏と申す。何れもが立正安國の信者である。「行動は思想に依る」「行は信に依る」日持上人の行動に徴し、清正公の活躍に見、間宮氏の行績に考へてその信念なり思想なりを學べ。彼等の信念は現今の如き單なる法華信者ではないのである。彼等の思想は今日の謂はゆる日蓮信者ではないのである。吾等は、徹底せる王佛宜合、第三帝國主義開闢の大運動を起さねばならぬ。その光明として現はれたのが昭和二年五月十五日に建立したる蒙古軍大供養塔なのである。その建立上不思議の一大事の因縁に關し發起の一人故新野正觀師(福岡勝立寺第卅一世住職稱行院日慧上人)は

### 嗚呼 五月十五日 蒙魂我等を招けるか

と題し、本塔建立以前の「雜誌大亞細亞人」に一文を公表されてゐる。曰く 佛とは何を岩間の苔むしる慈悲の外には敷くものはなし。蒙古(今の支那の一部)を外國と思ふやうでは、決して東洋平和は實現せぬ。「我が國」と思ふくらいな熱情を以て親善共存の大精神が無ければ日本も亡び支那も危い。日露戦争の原因は痛切に這般の消息を教訓してゐる。日露戦争は言ふまでもなく支那の領土たる滿洲を露西亞が侵略し且つ朝鮮に我儘勝干なる横領の振舞に及ぼんとしたから起つたものである。言はば我が大日本國の信念がその侵略を防ぎ横領を喰ひ止めたものである。若し當時露西亞と戦ひ得ず、戦ふの義氣を有せず、戦つても敗戦したとしたならば、滿洲も朝鮮も今果してドウ成つて居るであらうか。イヤ、日本はドンナ運呼に陥つて居るであらうか。之を、古來、我國に襲來せる外患が十中八九は朝鮮を経て、若しくは朝鮮によりて國難が起つて居る事に徴するに、我國の大陸政策なるものは、決して侵略主義でなく、世界の平和に貢獻する根本策としての東洋平和の爲め、將た我國の存立を確保するが爲めに、避くべからざる天業なのである。而もその玄妙の教訓を垂れたる重要地帯が北方亞細亞である。即ち昔の蒙古がそれである。その蒙蒙古族に依りて我が國が一大國難に遭遇したといふ事は、珍妙不思議なる國病の最大なるものが謂ゆる、「蒙古襲來」の國難なのだ。何の事はない兄弟喧嘩の最も甚しきものであ

る。我等はその救済の一大梵音たる日蓮大師の立正安國論の大精神に依りて、世界の一大平和の春を迎ふべく東洋平和の實を確保せん事を祈るや、眞に切なるものがあつた。神佛の感應空しからず法華經に「佛種は縁より起る」とあるが如く我等の信念は茲に玄妙なる縁を生じた。それは昨年五月十五日の事であつた。妙法寺主、本長寺主、深見惠隆、伊藤壽保、相良寅次郎、高井章助、岡崎吉次郎、草野太作、古澤ヤエ、伊藤クラ、津野クマ、御手洗フサ、岡崎シゲ、淵上勇、吉村コマ、岡本カメ、村瀬貞吉、平原孝重、岡崎國男、本郷作一等の諸同信の僧俗と共に、志賀の島と相對して我が博多灣頭を形成せる能古の島に「水施餓鬼の法會」を執行せんとする事であつた。ところが誰れいふとなしに、「どうせ水施餓鬼に行くならば、志賀の島の「クビキレ」に、蒙古軍の迷魂を供養してやらうではありませんか」と、「ウンそれがよからう」といふので、期せずして志賀の島に行つたわけである。之れはアトで氣が附いたことであるが、この「五月十五日」とは、實に日蓮大師が蒙古の國難退治の大本尊を、身延山で御圖顯の月日に相當して居たことである。何んと恐るべき妙因縁であらうか。何んと不思議千萬な奇縁であらうか。我等は、何人が笑ふとも、何者があざけるとも決して差支へはない。斷じてビクともせない。この五月十五日に、前から豫定せずいはゆる期せずして志賀の島に供養の一轉機を造つた事は、決してたゞ事ではない。蒙古の迷へる靈魂が、我等の信す

る久遠生命の大慈悲に依りて、成佛得道の妙縁を結ばんとするの、切なる願望であると信する。換言すれば靈魂我等を招けるものと確信する。

見よ、五月十五日に書き顯はされたる日蓮大師の蒙古退治の大本尊（一名護國の本尊）には、

「我が此土は安穩にして天人常に充滿せり」

との法華經の聖文が、高示されてゐる。即ち世界真正平和の大理想が標榜されて居る。更に「大日本國」の大文字も顯はれて居る。之を我が「大陸政策」に約し來れば決して侵略主義でない。世界真正平和の爲めであるといふ一警策とも拜すべきである。その爲めの根本策は東洋平和である。東洋平和の中軸は日支共存である。日支の共存は、之を心靈の活動たる信仰に基調を求めねばならぬ。即ち日支の信交を計る事が根本策と信する。吾等が蒙古軍の戦死者の爲めに、大供養塔を建立せんとするのは、一に日支の信交に資し、世界の平和に貢獻せんとする慈悲の外には何ものもないのである。

因みに岡田宗務總監よりの策勵の書翰が着したから左に紹介し同志の奮起に資する。曰く

拜啓春氣追日相加り候處愈御清健御奮闘の段爲法此事に存上候 扱多年宗勢の海外發展を策せられ特に今回蒙古供養塔建立の御計畫は誠に時宜に適し日支信交の誼を厚くし更に教勢を伸張せしむる絶好の事業と存候地下の持尊亦破顔冥助あらんと存候 貴師は其れ第二の持尊か此上共御奮勵

被下有終の美を齎されんことを願上候猶ほ爾後事業の成果時々御報告被下度先は爲法爲國滿腔の歡悅を申述候重々御奮勵希上候委細拜肩萬々 敬具

三月十八日

岡田 教 篤

猶ほ本塔の建立に就ては新野師等の事を記さねばならぬがコハ、何れ別冊として發行するとし、茲に予が師の送葬の際に於ける追悼文を紹介して、その増圓妙道に資すると同時に本塔建立の由來を物語る一助とする。（以下大亞細亞人記事）

迷信と笑はゞ笑へ時代遅れとけなさばけなせ、予は世間の科學の世界にラヂオが在るやうに、出世間の宗教の世界にも、タマシヒ（魂）のラヂオの存することを信するものである。昭和十一年十二月五日、福岡市勝立寺第三十一世住職稱行院日慧（新野正觀）上人の本葬に際し、この感や眞に切なるものである。

新野上人は予等立正安國の同志と共に蒙古襲來元寇國難の一大史蹟博多灣頭志賀の島に蒙古軍大供養塔を建設せる人である。此塔の建設には如何なる國際的センセーションをまき起したか、當時、在北京芳澤公使の如きは、これが落成除幕式を延期せば如何との相談すらあり、又除幕式に參列すべくあれほど確く約束したる蒙古（カラチン）王コンサンノルフ氏の如きはトウ／＼「病氣行かれぬ」との電報を打たれたほどである。當時予は博多比佐屋旅館にあり、新野上人は夜半その電報を持參され、「これまた一體どうした事か」と共に手

を取つて泣いたのである。共に泣いた當時の事は今に誰れも知らざる秘密境である。予は本葬式に於て弔文を讀むに際し、昭和三年春三月の當時の事が憶はれて、聲を立て、泣かざるを得なかつたのである。本葬は右申す十二月の五日だ。

予は宗務院の命で上海に於ける皇軍慰問と在留邦人慰問布教の爲に東京を出立したのは十一月の廿八日で、途中大坂の演説や、神戸に所用を爲し福岡に立寄り、同地よりまさに上海に出立せんとするその日が本葬式とは「あゝ何んとした妙な因縁か」と、全身電氣に打たれたやうな感じがしたのだ。本葬の通告は東京の本宅の方に出了たのであらうが、予は本宅の方に、一々旅行中の所在を知らせてない。勿論予はその通知狀を手にしてゐないので本葬が今日とは知るよしもないのである。それが何んと上人と予と結べる妙法正義の大因縁は、上人の靈子を招けるが、予の魂ひ上人にはせ參じたるか、これぞ正しく宗教界のたましひのラヂオの然らしむる所である。

何にしる、上海への出立日といふ非常に多忙の際に福岡本岳寺に在りて萬年筆のはしり書きで作りあげた弔文を讀むのだ。十四五行も讀み上げると瀧のやうな熱涙が流れて眼鏡をうるほし、文字が全然讀めない。眼鏡をはづせば萬年筆で書いたのであるから猶ほ更ら讀めない。とう／＼追悼演説に成つてしまつた。その用意せる弔文は左記の通りであるが、弔文とは名ばかり、それを兩手で捧げたのみで、棺前の追弔演

説で終つた。萬年筆での急作の弔文は左の如くである。

新野上人の遷化を送る

鳥のまさに死せんとする、そのなく聲悲し。人のまさに死せんとするその言ふことや良し。今、新野上人の遷化を送るこの日統の、眞實の聲を聞き玉へ。

上人！ この日統は、否私等は、今日只今凡眼に見ゆる形ちの新野上人とはお別れを致します。されど、今、さしあたり凡眼に見へざる上人の心「たましひ」とは、未來永劫離れは致しませぬぞ。

法華經化城喻品に曰く

『彼の佛の滅度の後、是の諸々の開法の者、在々諸佛の土に、常に師と俱に生れん』

新野上人！ 上人の心とはそも／＼何んでありませうか、ソハ言ふまでもなく、昭和二年五月十五日を以て蒙古襲來、元寇國難の一大史蹟博多灣頭に建立せる蒙古軍大供養塔に顯彰されてあります。

この塔は、宗祖日蓮大師が弘安四年五月十五日、身延山頭敵國降伏の祈念の裡に圖き願はし玉へる俗に蒙古退治の大マングラ：：即ち護國大本尊の時代の啓示に依りて建立したものであります。

新野上人！ 上人はこの娑婆世界（現生今番の化境）に於ていろ／＼の功德を積まれた中で、蒙古軍大供養塔の如きは、最も稱すべきものであります。

コハ蒙古退治の大マングラの啓示する「我此土安穩天人常充滿」娑婆即寂光：：世界眞正平和理想郷實現の基礎的一大聖業であり、東洋平和郷建設原理の光顯であり、日支共存共榮の宗教的指導精神の一大顯彰でもあります。

新野上人は、實にこの塔建立の功勞者であります。コハ嘗に宗風宣揚の一大功德事であるのみでなく、國家的にこれを觀るも、眞にこれ高遠々妙の國體原理の光顯であり、雄偉堂々たる大日本建國精神の宣揚であります。

新野上人！ その塔の落成除幕式は昭和三年春三月七日でありました。それにこぎ附ける迄の苦辛慘憺は到底筆舌の得て傳ふべからざるものであります。一番苦しかつた事はその除幕式の五六日前の夜半に「蒙古カラチン王病氣につき行かれぬ」との電報が北京から着いた時でありました。上人はこれを私の宿所ひさ屋旅館に持参された時、二人は手に手を取つて泣きました。ある大新聞やもろ／＼の小新聞は

蒙古王は始から來られぬ事が判つて居ながら、來る／＼と宣傳した山師坊主と言はぬばかりの報道を敢てしたので。私がおの際外務省の對支文化事業部長や北京の芳澤公使等の電報や手紙を公表すれば、その誤解を一掃する事は、何んでもないのですが、當時の國際情勢として、それが出来なかつた苦難！ 私は上人がひさ屋を引取つたアトで、更に瀧のやうな、而も熱き／＼涙を、とめどもなく流しました。

然し上人！ 私等の苦辛經營は、決して空しくはありませ

續ぎて、今日、こゝ博多の地を出立して上海に出發するのであります。

新野上人！ 上海方面はそのむかし蒙古軍の内、江南軍と稱する十萬の大部隊が、威風堂々、舳艫相衝んで我が日の本土國に向つて出發した近所であります。殊に現在の上海の地は、御經文の豫言の如く「鬪諍堅固白法隱沒」「未法五濁亂熾」の地であります。彼れ支那國が、我が東洋平和の大義を正解し得ざるが爲めに、排日、侮日、抗日の、あらん限りの蠻行の綜合地帯が今の上海の都市であります。その上海の地には、我が建國の平和的の一大使命を光顯すべき忠勇義烈の皇軍：：大日本帝國海軍特別陸戰隊數千人が駐屯して居るのであります。私は、今管長の特命でその皇軍の慰問と、在留邦人への布教の爲に、東京を先月（十一月十八日）出發し、途中、大阪や神戸に布教して、福岡の地に立寄り、いよ／＼今晩の六時に上海へ出立の豫定日が、上人の本葬とは何んとそれ因縁の奇にして妙、妙にして玄でありますか。

新野上人！ 世間の科學の世界にラヂオがあるやうに、出世間の宗教の世界に、豈にたましひのラヂオがなくして何んと致しませう。上人のたましひのラヂオは、この日統のたましひを引つけたのです。否、御本尊は日統をして上人の眞實の心を一生の別れのこの時この際に光顯し説法せしめ以て眞の追悼を爲さしめむとの慈念の然らしむるところと、固く信じて疑はざるものであります。

んでした。それから數年ならずして滿蒙平和國は建設されたではありませんか。私等は滿洲國が建設されたアトから、滿洲々々で騒ぐも者ではありません：：一にこれ六百數十年來の蒙古退治大マングラの御利益であります。護國大本尊の啓示のまに／＼不惜身命の修行努力を敢て致した妙果であります。言葉をかへて申せば、滿洲國の建設は、蒙古軍大供養塔を建立するが如き東洋平和：：世界イヤサカ（彌榮）の精神の華が咲いたのであります。：：イヤ、その華の果實が滿洲國と結んだものであります。この塔によりて六百數十年來九州の海に亡魂と相成つて、迷ひに迷つた蒙古の賊軍が妙法經力で即身成佛しその成佛したたましひが今の滿洲國民にのり移り、轉生し來り我が盡忠報國のスメラミタミ（皇民）と同心協力して出來上つたものが滿洲國なのであります。これほどの歡喜法悅が他にありませんか。

新野上人！ 上人の功德は眞に無上甚深微妙でありますぞ。私は今上人に、一首の拙歌を呈します。

### 蒙古軍供養の塔に華咲きて

### 滿洲國と結びけるかな

新野上人！ 私達は、今日いよ／＼上人とお別れするのであります。然し上人！ 肉體ある形ちの上人とはお別れをするが、目に見えぬ上人の心とは、私等同志の心と未來永劫離れは致しませぬぞ。殊に、この日統は、上人のその心をうけ

新野上人！ 上人は、私等と共に蒙古退治の大マンダラの啓示——護國大本尊のお導きのまに／＼活動された人でありますから、勿論、彼の西方十萬億土なんぞに、往ひて生るゝやうな人ではありません。必ずやまたこの娑婆世界に生れて来られます。この娑婆世界の中でも大日本皇國：大日本皇國の中でも九州：九州の中でも元寇國難の史蹟福岡市：福岡市の中でも勝立寺：勝立寺の中でもその寺に一大妙縁ある所に生れて来られませう。上人がおぎやア／＼と生れて来られたその時の上人の二人のお子さんトタル（利）さんもミノル（稔）さんも智慧と慈悲との統一された静子お母さんの手で、スク／＼と成育され天晴れ法華經の若人として活躍されんとする時でありませう。

楠正成公等は、湊川で、七度びこの日の本の國に生れ来りて國賊を亡ぼさんと誓願して戦死されたのであります。我等同志とても同じ事です。我此土安穩天人常充滿。立正安國の世界が實現するまでは、七度びはおろか、百たびも千たびも生れ来り死に變るべきであります。

宗祖大師は

極樂での百年の永き間の修行もこの娑婆世界でたつた一日の修行の方が幾千萬倍もすぐれた大功徳である。

と垂訓されて居ります。我等同志はこの「極樂百年の修行は穢土一日の功徳に及ばず」の大安心に住すること富士の山の如く不動でなくてはなりません。

ます。

生も死も甘露の海にさぼさして

涅槃の岸ぞ住み家なりけり

南無妙法蓮華經

維時昭和十一年十二月五日

蒙古軍供養塔建設發起人代表

高 鍋 日 統

以上は、新野師に對する追吊文である。何分にもその夜は博多を出立して長崎に向ひ上海に渡らんとする切迫せる日時に博多本岳寺に於ける萬年筆の走り書きである。これを毛筆を以て淨書する時間がないので、そのまゝふところにして勝立寺の葬式場につけたといふ次第なのである。會場に於て、それを朗讀しその始めは無事に朗讀も出来たが、「カラチン王病氣渡日中止」の所まで来ると、モウ、涙が瀧のやうに流れ出で眼鏡をうるほし吊文が見えない。勿論萬年筆の走り書きであるから全然讀めない。アト、どうしたものかとチヨット心配したがエーまゝよ追悼演説に轉換だとはかり熱烈にやり出した。それでも泣けてしやうがない。イヤ人間ならば泣くのが當然だ。「カラチン王病氣渡日中止」まで立至る國際的、微妙複雑なる困難、それに對處せんとする吾等の苦闘、その追想は涙あるのみだ。日蓮大師曰く「涙は善惡に通ずるものなり」と、吾等の善の涙である。その涙の心を解し得ざる某々氏等は「日統の追吊演説は九十點」とか、

新野上人！ 靈山淨土の本佛世尊への娑婆化導の御報告がすんだならば、どうぞ一日も早くまたこの娑婆世界に生れて来て下さい。

法華經法師品に宣はく

「諸佛の所に於て大願を成就し衆生をあはれむが故に此の人間に生れん」

と、又宣はく

「當さに知るべし、是くの如きの人は生れんと欲する所に自在なり、能くこの惡世に於て廣く無上の法を説かん」と、古歌に曰く

「山鳥のほろ／＼となく聲きけば母かと思ひ父かと思ふ」と

新野上人！ 私等は今、アナタと一時お別れするのは眞に涙であります。

併し宗祖大師は

「涙は善と惡に通ずるものなり、法華經の行者の涙は甘露の涙なり」

新野上人！ 上人がやがてこの娑婆に生れ来ました時、否上人の生命：その心と身との法脈が、お子さんに完全に開顯されたその時こそ、上人が娑婆再來の涅槃安住の光明赫々たる時でありますぞ。その時に流す涙こそ、宗祖大師の謂はゆる甘露の涙でありますぞ。

私は最後に望み更に歌を獻じて上人の増圓妙道に資し奉り

「九十五點」とか評したとの事だが、彼等には「男の涙」の心は解るまい。九十點とか九十五點とは何たる無禮の言辭ぞ予の追悼演説を芝居とでも解してゐるのであらう。それはおのれの心を以て男子日統の心を解せんとするものだ。千軍萬馬往來の男子：その男子の流す涙の通ずるのはたゞそれ宇宙の公道の存するのみだ。

コ、まで筆を進めた昭和十四年三月一日、北京の石本男爵（惠吉氏）から快報が来た。曰く

愈々御入蒙の趣、邦家東亞の爲め大慶至極に存候、小生上記に日正閣を興し、その中に蒼龍窟を營み申し候に付御止錫相成度候（北京西域達子營三四、日正閣）二月二十三日

石本男は日持上人大陸教化の大信念と清正公オランカイ進入の雄圖を體して多年大陸に躍進せるの人、そのオランカイ（間島省延吉）の史蹟には齋藤太氏等と日正院を創建し、今また。

### 北京に日持上人と清正公の

### 大信念を活現

せしむべく日正閣を興立す。蓋し日正閣の日は日持上人を表し正は清正公を示す。石本男は夙に日持上人や清正公を研究しその著述も公刊さる。男の大陸經論に關しての大信念は日持上人や清正公に依りて、ヨリ一層強化されたものと信ずる

が、後藤新平伯に依りてもその因縁を結成されたものと信ずる。予が、石本男と因縁を結んだのは、後藤伯に依りて然るものである。後藤伯と日持上人の事は前記述した通りであるがその際伯の（池上本門寺に於ける）講演大要は實に左記の如くである。吾等の東亞運動史上コハ斷じて看過し得ざるものであるからこゝに紹介する（題は政治は信仰の上に日持上人を有するは大和民族の大なる誇りである。當時の「日蓮主義」誌上に公表されたものを紹介する）

政治と宗教とは離るべきものではない。私は久しく政治の倫理化といふことを提唱して来たが、現在のやうな政權争奪に寧時なき政黨政治でなく、眞の政治には是非信仰が必要である。

露西亞では『宗教は阿片なり』といふてゐるが、その露西亞も遂に徹底的に宗教を嚴禁するといふことは出来なくなつて、今では十八歳になれば宗教の信仰を許すなどと言ふてゐる。

マルクスは物質文明としての科學が頂上に達した時に生れたので、彼の唯物論資本論が一時大變に流行したが、彼が死んだ時は、精神文明としての心理方面の發達が盛んになつたので、彼と共に彼の學説は衰退に向はなければならなかつた。其處に行くと、東洋は精神文明の國であり、科學の心理的方面が發達してゐるので、彼の思想に依つてそれ程の變化もなくして終つたのである。

斯う感じ出しましてから、政治と宗教とは離るべきものでなく政治家は常に信仰を持つてゐなければならぬと深く感ずる様になつたのです。

實にこの大膽な、實にこの雄大な、日持上人の心にして始めて、吾大和民族は海外に發展することが出来るのである。この先覺者を祖先に載いた日蓮教徒、更に日本人全體はよくこの心を以て將來の日本を荷負ふて立たなければならぬと思ひます。（以上後藤伯の説く所。當時子爵であつた）堂々乎たる大陸經綸論者であつた後藤伯をして今日在らしめば、伯は如何に歡ばることであらう。否、伯の活躍や眞に目ざましいものがあらう。失禮のやうだが、石本男が、北京に日持上人や清正公の大信念、大雄圖を、文化的方面から顯正しようが爲の日正閣の創建の如きは、後藤伯の感化も亦與りて力ありしものと予は信ずる。

石本男が、北京に日正閣の創建！これ活ける寺院であらねばならぬ。予は日持上人の事に關しては、上海日報（大正十二年）、日本新聞（大正十四年）、等に、何れも長編論文を連載したのであるが、その内「燕京城外の勝幡」といふのがある。左にその一節を紹介して、石本男の北京に於ける道場顯彰及び我が宗門の蒙古及北支等に於ける開教の精神昂揚に資する。

私が過般ヨツフェを招待したのは全く私的談判であつたが、政治家は常に信仰を持たねばならず、政治と宗教とは離るべきでないかと考へから、日蓮上人の御弟子六老僧中の事蹟を引いて、大いに日露親善を鼓吹したのである。日持上人の御事蹟に對する詳細のことは、歴史家でない私には解しかねるが、鬼に角、六百年以前の昔に於て、單身北海道から樺太に渡り、更に亞比利亞に渡つて、大法弘宣に努力せられたといふ日持上人は嘗に日蓮宗門の誇りばかりでなく、吾が大和民族の大なる誇りでなければなりません。

日持上人が樺太を見出したのは一三〇〇年代で、露西亞の樺太發見以前であつたといふことが、歴史家の研究で判つたのであるが、其後徳川時代になつてから永らく等閑に附されてゐたことが明かになり、維新後千島と交換してその南半が日本の領土となつたのであります。

日持上人の樺太渡來は、新島開拓の意ではなく、大法の宣傳にあつたのであるが、然しこれが眞の意味の開拓になるだらうと思ひます。こんな意味で私は、日蓮大聖人を一面非常な大宗敎家であると同時に他面非常な豪膽な大政治家であると感じてゐます。そしてその大聖人の一面を、海外發展といふ旗印の下に、日持上人が代表し率先して樺太に渡つたのだと思ひます。

私は廿代頃まで殆ど無宗教者とも云ふべき状態でしたが

## 燕京城外の勝幡

英雄僧日持と蒙古退治の大曼陀羅

和林王（蒙古）王保々の記録に曰く

『日僧日持、燕京より和林に來る。蓋し日持は、仁宗帝の崇遇を得、勝幡を西山の鹿苑に揚げ、周く妙法の津を啓き、紅淫の弊を矯む』

と、『日僧』とは日本の僧侶なり。「燕京」は今の北京なり。

『和林』は具さには喀喇而林と稱し、今の外蒙古オルゴン河畔に位し、成吉思汗の第三子窩闊臺が奠めたる蒙古の都なり『勝幡』とは妙法勝利の旗なり。（詳細は後に説くべし）『西山の鹿苑』とは北京城外に在り。山勢緩かにして下り林藪蒼蒼、溪水潺々、自ら寂光清淨の一仙境を成し、その位置京西に在るが爲に、人、之を呼んで西山と稱し、其の雪景は特に佳なるを以て『西山晴雪』の名の下に、北京八景の一に數へらるゝの處、我が日持上人は、此の西山の仙境高く南無妙法蓮華經勝利の聖旗を揚げたるなり。是れを『白旗動かず兵營靜かなり』と言はむよりは、『妙法の赤旗、四百餘州を風靡す』とも稱すべしむか。大陸の人、如何なる理由の下に妙法の旗を勝幡に即ち勝運又は勝利の旗と稱したるか。予を以て之を觀る。是れ元寇の際に日蓮大師に依りて顯現せられたる敵國降伏護國本尊（俗に蒙古退治の大曼陀羅）に起因すと。抑も元の世祖忽必烈が、文永十一年と、弘安四年の前後二回



に及びての征東の結果に、最も痛切に感じたるは、我が日本民族の武勇絶倫なりしてふ經驗と、その武勇に依つて以て生起し來る大和魂の基礎を成す宗教的大精神に存せり。之を豊大閣の朝鮮征伐に對する朝鮮史家の言に徴するに、

『勇悍戦ひを好むものは倭にして死を恐れざるは即ち其の天性なり。人の恐るゝ所は戦にして戦の難しとする所は死なり死にして苟くも難からずむば、何ぞ敵に勝たざるを憂へむ』云々、又曰く

『倭人其の必死を知れば先づ死するを以て快と爲す。故に一士斃るれば一士立ち、進むあつて退くなし。士卒の強きこと天下此の如き國なし』云々

是れ當に朝鮮役のみ局限せられて發揮せる武勇にあらざる也。朝鮮役は積極的の攻勢にして、元寇の如く消極的の守勢ならざるに猶ほ且つ斯くの如きの武勇を發揮す。元寇の際には我れに取りては眞に危急存亡の秋にして、その武勇を發揮するの程度たるや前者よりも、ヨリ一層強烈なりしや素より論なきのみ。憂國の士をして

『ものゝ心の心つくしのはてにこそ  
うへ神風の吹き起りけれ』

と詠せしめたるが如く『心つくしの結果』に感應生起し得たるの神風なり。元寇は前後に二回共、之の神風の爲に失敗せり。適に世界最大の帝王忽必烈も、此の不思議なる現象に對しては神祕的なる何ものかを考へたらむ。宗教的なる感慨

や切なるものありしならむ。果然彼れは當時大聖釋尊の再來とまで崇拜せられたる喇嘛の高僧發思巴なるものに『日本の祈禱とは何ぞや』と問へり。フアスバ答へていふ

『法華の祈禱なり。妙法の勝利なり。是れ地水火風を起し、森羅の萬象を制するが爲めなり』と

蓋しこの英主高僧の問答たるや、日本より歸來して燕京に引揚げたる將卒が世祖の詰問に對して

『日本の恐るべきは、刀杖弓箭の武器にあらず。戰略戰術の法にあらず。武勇と勝利の祈禱に在り。敵國降狀の祈念に存す』

と、應答報告せるに原因す。而してフアスバはその祈禱とは法華なりと明快適切に活斷す。茲に於てか世祖たるもの、深く大に考察せざるを得むや。元は當時に於ける世界最大の強國なり。彼の強大を以てして、三度び日本に捲土重來せむ事、敢て難事にあらざるなり。而も事、茲に出でず。至元二十八年（我が日持上人日本内地發足の永仁三年より四年前に相當す。即ち正應四年）に日本征伐の參謀本部とも謂つべき『征東行尙書省』を廢止したり。是れ果して何事を物語るか（これ等の消息を道破するには、世祖が南方支那の宋僧を平和的使節として更に國書を我れに送れる等の事實を研究せざるべからず。這是後日を期せん。予がいよ／＼本問題に迄進行せむか、舊來諸家の元寇論の大誤謬を暴露するに至らむ。乞ふ近き將來に待て）ラマの高僧フアスバが、何んが爲めに

爾かく『法華の祈禱なり。妙法の勝利なり』等と活斷せるか  
ラマとは言へ畢竟佛教なり。彼れは釋尊の再來と迄、敬意を拂はれたるの高僧なりせば、佛教思想の最高潮に達せる法華の大哲學を學習せしは勿論也。法華の哲學とは『一念三千の大法門』なり。『三千』とは一應は有限の數を擧げたるも、實は重々無盡の數にして宇宙萬有との代用言葉なり。彼れフアスバが『是れ地水火風を起し、森羅の萬象』と稱せる即ち是れなり。此の一念三千の大哲學の體系は彼れフアスバより前に、支那に法華大乘を弘通宣傳せる天臺大師に依りて組織し創造せられたる也。即ち天臺大師はその所依の經とせる法華經方便品に『如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等』とある十如是の諸法實相の宇宙論を基礎として組織せる一切の宗教一切の佛教等を綜合統一せる大哲學なり。苟しくもラマの高僧フアスバたるもの、之を研究せずして可ならむや。而して之の大哲學を日本建國の正義上に開顯し來りて堂々日本に宣傳し此の正義に誇かば敵國外患等の國難生起すべしと獅子吼論道せる立正安國論なるものを作りて、大に天下を警醒し、國民を策勵しつゝある英雄僧日蓮なるものが、東方の國、日出づる日本の皇國に存する在るを知らざらむや。而もフアスバの言は弘安四年後の事なり。弘安四年は元寇第二回の役なり。而してその第一回の來襲は文永十一年なり。即ち弘安四年より八年前なり。日蓮大師の後年『種々御振舞御書』に

『去ぬる文永五年後の正月十八日、西戎大蒙古國より日本國を襲ふべきよし牒狀をわたす。日蓮、去ぬる文應元年（太歲庚申）立正安國論に堪へたるが如く、今少しも違はず符合しぬ。此の書は白樂天が樂府にも超へ佛の未來記にも劣らず、末代の不思議、何事か之に過ぎん』  
との文書を徴するも、如何に其聲の廣大にして其叫びの強烈なりしかを知るべく、或はその餘音、支那にも響かざらんや。而も此の立正安國論は、文應元年の作なるが故に、文水十一年の蒙古來襲に先立つ十五前の事なり。蒙古はすでに文永十一年に來襲して、いはゆる神風の爲めに退却し、更に弘安四年に之を二度びす。來襲の將卒の内、豈に日蓮大師の行動の一端、主張の一片をも知らずして可ならむや。殊に況むや、文永役の翌年（建治元年）に北條幕府が大元の使節杜世忠、何文著、撤都魯丁、國人果及び鮮人徐贊の五人を相州片瀨の龍口斷頭臺上に斬りしに對し  
『あはれ平左衛門殿、相摸殿の、日蓮をだにも用ひられて候しなば、すぎにし蒙古國の朝使の首は、よも切らせまいらせ候はじ』（兵衛志殿御返事）となげき、  
『科がなき蒙古の使の頸を刎られ候ける事こそ不便にて候』（蒙古使御書）

と同情せる日蓮大師に對し、何等一點の印象無くして可ならむや。高僧フアスバが『是れ法華の祈禱なり』と斷じたる、決して是れ無根據の放言にあらざるなり。殊に『地水

火風を起し、森羅萬象を制するが爲めなり」と稱せるの點大に注目すべきの言なり。「地水火風」とは四大の義にして佛教の世界觀なり。宇宙觀なり。四大とは地大、水大、火大、風大、これ也。這は預る興味ある法相名目なるが故に特に左に分解を下し置くべし。

地大は堅礎を性とし物を任持するを以て能とす。水大は濕潤を性とし物を收攝するを以て能とす。火大は煖熱を性とし物を成熟するを以て能とす。風大は動轉を性とし物を長養するを以て能とす。

日蓮大師は之の地、水、火、風の四大を人格的に寫象して護國の大本尊(俗に蒙古退治の大曼陀羅)の中に特に四大菩薩として奉安せり。地大は曰く安立行大菩薩なり。水大は曰く淨行大菩薩なり。火大は曰く上行大菩薩なり。風大は曰く無邊行大菩薩なり。若夫れ、現代の國防要件に之を約し來らむか。

地大安立行は陸軍的國防の威力を活現すべき靈源なり。

水大淨行は海軍的國防の威力を活現すべき靈源なり。

火大上行は國民の精神的威力を活現すべき靈源なり。

風大無邊行は航空的國防の威力を活現すべき靈源なり。

(此四大菩薩の事、拙著『國難論』の序論中に詳論せり。參照を希望す)

日蓮大師が、本尊大曼陀羅を圖顯するに、何れのそれにも此の四菩薩を記入奉安せられ居るは勿論なれど元寇國難の「護

『法』とは天地の公道人倫の常經にして教育勸語には『之を古今に通じて謬らず、中外に施こして悖らず』と垂示せらる。是れ久遠實成の大生命にして、日蓮大師は之を『南無妙法蓮華經』と高唱聲言し給へり。人種の黃白を問はず國の内外を論せず、如何なる人、如何なる國も、此の正義を奉ぜざるべからず。

日蓮大師は『斯の國』『斯の人』『斯の法』の三者統一具存一體の基礎的哲學を、一念三千の大法門に置きり。『一念』とは『斯の法』を絕對無二に信するの心なり我等の一念なり。吾人の精神なり。斯の信念精神中に森羅三千、宇宙萬象、四大法界は本有具存せり。故に信仰の寸心迷へば法界は迷界なり宇宙は惡界なり。ラマの高僧フアスバの言、這裡一念三千の大法門に依りて開顯せらるゝの時、一段の意義を認むべきなり。日蓮大師の元寇の豫言も、畢竟するに、此の一念三千の大法門より流出し來れり。日蓮大師一生の遊化神通の大修行も折伏度生の大活動も、皆悉く一念三千の大哲理の發現なり。因みに池上本門寺の祖師堂に奉安された日蓮大師の木像は日持上人の本願で奉安された事が發見された。大師の尊像は座像でその御首に(のどぼとけの所に)日持上人の直筆で「南無日蓮大師」とあるその下に日持として花押が書かれて居る。立正大師も難有いだらうが、「日蓮大師」でも結構である。此の尊像には正應元年六月八日奉記されて居るから大師の七回忌に際し日持上人本願の尊像たる事が解る尊像は右手に御母の頭髮で作られた拂子を、左手に壽量品を奉持されて居る。右は宗寶調査員稻田海素師の吾輩への直話である。

國本尊』には特に『菩薩』の上に『大』の一字を冠せられたるは、此際深大の注意を拂ふべきなり。ラマの高僧フアスバ此の護國の本尊を知るや知らずや、『地水火風を起し、森羅萬象を制するが爲めなり』と稱し。日蓮大師はその著『觀心本尊鈔』に

『此の四菩薩(地水火風の四大菩薩)折伏(戦争)を現する時は、賢王と成つて愚王を誠責す乃至、此釋に開諍の時と云々、今の自界叛逆(内憂)西海侵逼(蒙古襲來の外患)の二難を指す也』と示す。

偶然の暗合か、故意の一致か、天人感應の境界。眞に絶大玄妙なりと謂つべき也。日蓮大師『立正安國論』に高唱すらく

『夫れ、國は法に因つて而して昌へ、法は人に因つて而して貴し、國亡び、人滅せば、佛を誰れか崇むべき、法をば誰れか信すべけむや。先づ國家を祈りて、須らく佛法を立つべし』

と、論中、『國』とは何ぞや、『法』とは何ぞや、『人』とは抑も又何ぞや。

『國』とは世界平和を理想とせる建國の使命を有するの國家なり。此の國家は世界の爲めに須く擴大せしめざるべからず。

『人』とは此の理想を有し使命を自覺せる道義的民族なり。此の民族は世界の爲めに須らく膨脹せしめざるべからず。

予は日持上人に關する史稿は、相當多くを有してゐるが、その内の一片の、漢文とそれを口語譯として左に紹介する。コハ和林王王保々(ワンボボ)の記録で、蒙古文のものもあるさうだが予は一見するの機會を得ない。今紹介するのは漢文の方である。曰く

日僧日持自燕京來於和林。蓋日持得仁宗帝之崇遇。揚勝幡於西山之鹿苑。周啓妙法之津。矯紅流(註紅流者紅刺嘛)之弊。帝益々寵信焉。因之衆愚狼構譏于皇后。帝懼日持之身危。又欲令布教於大蒙。使密旨勸入中和林也。

日持之妙法素出乎法華大乘。更易穢土於甘露。非紅教小乘之比也。日持之來。說妙法啓蒙愚。加之利用厚生之道。

導河川灌溉原野。說忠孝豐君臣父子之道。蒙民性強悍。文智乏而不辦。聖拓耕作之務。況於忠孝乎。日持導五河。設妙法日蓮井。備旱天。又開日持圖(註圖者寺)慧雨方靈矣。忠孝方勵矣。及遭三燕元(註元之郡燕京)漸衰。胡賊起乎四方。和林上下精忠勁節。振英風於元祚頽廢之際。惟無他。日持教化之力也。

或曰日持者高麗之聖僧也。雖然高麗與東瀛豈爭國土乎。承化久恩一也。記永傳後昆。

日僧日持なるものが燕京から和林に來た。この日本僧は元朝仁宗帝から崇遇され勝幡即ち法華の幡を燕京に近い西山の鹿苑寺に揚げた。そして周ねく妙法の津を啓き、かの紅教喇

嘘の濫弊を矯めた。夫で帝は益々寵信した。ところが衆愚共が狼狽して讒言を皇后に構へた。皇后は好人に迷ふてゐた。故に帝は日持上人の身邊が危険であることを懼れ、且は大蒙古に布教せしめやうとする考からして、上人を勸めて和林に入らしめたのである。

日持の妙法は素と法華大乘から出たものであるが、唯だ未來のことのみならず更に穢土を甘露と易へて下さる、到底紅教小乗の比ではない。殊に日持上人が來てから妙法を説き蒙愚を啓きたる上に、利用厚生の方法まで教へて下された。

河川を導き原野を灌漑して、忠孝を説いて君臣父子の道をも豊んならしめた。元來蒙民は強悍であるが文智乏しく、墾拓耕作を知らぬ。まして忠孝は、すこしも知らぬ。然るに上人は五つの河を導き妙法井を設け（日蓮井）旱天に備へた。又日持寺を開いたが慧雨は方さに靈妙であり忠孝も方さに勵むやうになつた。元の燕京が漸々衰へてから胡賊が四方に起つた。しかし和林は上下一致して忠節を盡し英風を元の末路に振ふた。これは一に日持上人の力である。或人は日持は高麗の僧であると云ふが、高麗であらうと日本であらうと承化の恩は一である。記して永く子孫に傳ふることとした。

#### 劉潭の「井徑關」の中

取三路定州。過曲陽。將涉定河。有邱林稍々高矣。躋而少憩。邱者以檜松千古之磊奇。得勝景。游目最佳矣。老松側視一寺一庵。共無住。且堂宇朽腐將傾焉。訊之乎里人。曰寺謂

日蓮。庵謂日持。日持者仁宗帝（元代）之時來於中國。久留錫真定府。說妙法。曲陽之父老歸依深。建寺庵於茲淨境。男女詣者項背相望焉。日持之去也。寺庵遂空。父老尙稱法城。崇信不措。近有改修之議云々。嗟呼余亦佛徒也。豈莫因緣乎。拜寺庵。掃蕪草而往。

路を定州に取りて曲陽を過ぎ定河を涉らうとしたが、一の邱林があつてやゝ高い。それで邱に躋つて少憩した。この邱は千年以上の檜や松があつて磊奇として勝景である。眺望が宜しい。所が一つの寺と一つの庵を視た。里人に訊くと、寺を日蓮、庵を日持と云ふ。日持なるものは元朝仁宗帝の時支那本土に來り久しく真定府に錫を留めてゐた。而して妙法を説いた。曲陽の父老が歸依して、寺庵を茲の淨境に建てた男女の參詣、項背相望み非常に多かつた。然るに日持上人が去ると寺庵も一空となつて朽廢して了つた。しかし曲陽の父老は尙ほ法城であると崇信し近々の中堂宇を修繕するさうであると、かやうに里人は語つた。

俺も僧の身であり、因縁がある。それで寺庵を拜禮し荒れた草などを掃ふて敬意を表して往つた。

あゝこれ等の文献を見、傳説を聞くに際し、多年大亞細亞主義運動を爲せる吾等の血は熱し肉は躍り、骨は鳴るのである。而して「日正閣」の正であるが、その正とは加藤清正の正である。清正は征韓の命を奉ずるや京都に於て聖戰勝利の祈願祭を修し大日本建國神（謂はゆる三十番神）を祭つた。

たゞその内の一柱の神（赤山大明神）なるものが支那の神である。而も山東省泰山の神であつた。ナゼ、三十番神の内他は皆大日本建國の神々であるのに、この赤山大明神なるものが支那の神であらうか。コハ數百年の大疑問であつたが予は僭越ながら、その解案の信念を把握した。（拙著大日本建國神論第一卷四十八頁以下参照）

### 赤山大明神は日支親善の神として示現す

この一節は乃ち然りである。この神は、比叡山の西坂本に鎮座され、「神社考」には

「支那の山の名なり。山に神あり、太山府君神と稱す。慈覺、唐に在り。清涼山にて引聲念佛を習ふ時に、神、形を現じ、慈覺と約束して日本に來る」

とある。この支那泰山の神の一ト柱のみが清正公の大日本建國神（謂はゆる三十番神）の中にお仲間入りといふわけである。否この泰山の神、外國の神と思ひきや、其の泰山神の光明赫々……その神光につままれたる北支……漢名祖光氏の研究（言語學上よりの）から申せば、我等日本民族と同族の郷土とある。その神の精神を政治上に活現せるが、支那人が聖天子として仰ぎ、理想の皇帝と確信せる堯舜といふわけだ孟子卷第八に曰く

「孟子曰く舜は諸馮に生れ、負夏に遷り、鳴條に卒る。東

#### 夷の人なり

と、諸馮は今の山東省内であり、負夏は河南省内であり、鳴條は山西省内である。宋の朱文公は、此の三ヶ所は皆東夷の地であるとキツパリと註解を加へて居る。東夷の地とは、ツングース民族と一體不離の關係にある我が大和民族ではないか（拙著大日本建國神論第一卷六十七頁参照）それ等の學說、これを歴史科學上より論證し來る時即今の日支事變に對して果して如何なる警訓を垂れつゝありや。

この泰山の神に何故に「赤山」が冠せられたるやが判明せず友人で支那學者の中野江漢氏に研究を依頼した所、左記の如く返書が來た。

#### 赤山考

後漢書烏桓傳曰。俗貴兵死、斂屍以棺、至葬、則歌舞送、肥養一犬、以彩繩纏牽、并取死者所乘馬衣物、皆燒而送之、以屬累犬使護死者神靈歸赤山、云々。

中華神廟靈山考曰。赤山不在中國、在遼東西北數千里、如中國人死者魂神歸岱山也。

赤山不在中國之考。案中國地誌、中國赤山在一處。湖名、在江蘇句容縣西南、唐書地理志注謂之絳巖湖、下通秦淮、今已漸涸。

中野氏朱註を加へて曰く

後漢書ニテハ其所在ヲ明ニセザレドモ、靈山考ノ「中國ニ在ザル」ト「遼東ノ西北數千里」トアルハ日本ヲ指シタル

ナラン

赤山ガ死者鎮魂ノ靈山ナルコトハ明カナリ。  
「岱山」ハ「泰山」山東省ニアリ、コノ山ニ「泰山府君」アリ。

赤山（山東萊城縣）

秦、漢時代ニ勃興セル神仙思想……  
魂神泰山神ニ歸ス  
佛敎渡來後ニ起ツタ他界思想……  
トノ思想ハ赤山ノ  
他界思想ノ移入

顧炎武ノ作「山東考古錄」「博物志」「漢書方術傳」「同鳥

桓傳」「濟南府志」

以上、中野氏提供の文献で、大體は推知し得るが、詳細の事は拙著大日本建國神論にゆづる。換言せば、大陸經論の雄圖をいだける豊太閤の精神を、畫龍點睛せんと期せる清正公の大信念の裡に、この赤山大明神が如何に靈在せしかの大問題は、予が今回大陸進入、開敎運動に課せられたる最も意義ある聖業である。石本男の北京日正閤の使命や又以て玄妙であらねばならぬ。

### 最澄空海等の海外求法と

### 日持の海外敎化

こゝに於て、予は力強く警告し置く一事がある。世には日持上人もエライが、それよりもモット〜以前に大陸に進入した最澄（傳敎大師）空海（弘法大師）があるではないか。更に見よ高岳親王の如きは羅越國（ローヨエ）迄進入された

五八

ではないか。と、なるほどそれに相違ない。殊に高岳親王に對する贊辭の如きに至りては（北澤正誠の高岳親王羅越國墳墓考、明治二十六年發行）

『余佛祖通載扶桑僧法傳を讀んで佛敎の東漸年代蓋し悠久なるを知る。漢土は晋の法顯、北魏の慧生の徒あり遍ねく五天（印度）に遊び、法の淵源を掬れり。（案するに漢土人の五天に遊ぶ者、玄奘三藏、義奘三藏の徒、各著書あり。世々其人に乏しからず。雖然、皆後代の歴遊にして先鞭にあらず。故に特に法慧二人を舉ぐ）唯憾む、我邦弘法、傳敎の徒、僅に漢土に至るも意に遠く五天を窺め、其源を探る能はざりしを。三代實錄を讀むに及び、高岳親王入唐し、法を求め流沙を渡り、羅越國（ローヨエ）に至り歿す。と云ふに至り嘆して曰く。これある哉親王は我邦の法顯、慧生なり料らざりき千載絶て無くして僅にある者を萬乘の皇子に得んとは。眞に曠代の一偉事なりと、喜び極て而して哭するに至れり』

等と泣き叫んで絶讃して居るが、予は舊著「大陸雄飛持尊論」中に

『…而して聖日蓮は、六百數十年の昔より、最も痛切に現代を警策せり。而も其高足日持をして、日本國難生起の本源北方亞細亞に進入せざるを得ざるが如き敎育を爲せり。否、日本建國祖神の統を垂れし大陸に世

### 日は東の天照皇國より

「印度無佛敎論」の提唱…事實はこれを證明してゐるではないか。佛敎は印度に興つた文化ではあるが、その眞髓は日本に發揮されてゐる。眞宗然り、禪然り、淨土更らに然りである。モハヤ印度に求むべく佛敎の何ものもない。是れからは日の本ツ國の統一敎を以て、佛敎の本源を救はねばならぬ。豈に印度のみと言はんや、支那然り、蒙古然り、世界更らに然りじや。

アノウぬぼれの強い白人…その白人が、事實は最後の勝利の前に降参したか「光は東方より」と本根を吐いた。予は學生時代にこの語は日本人か、支那人の言であらうぐらゐに心得えて居たが、三十何才かの時

（光は東方より）

とは西洋の古諺であることを知つて非常に愉快を感じた事がある。彼等は何を感じて左様な殊勝な事を申したか知らぬが、彼等の救世主と仰ぐキリストが亞細亞に生れ、その渴仰憧憬する聖地靈場が東洋に在り、孔子、孟子の儒敎も、釋迦の佛敎も、マホメットの回敎も皆悉く亞細亞に發祥したからであらう。白人が世界最高、最優、最善、最良の人種なりと云ふばれてみた所で、この三大宗教や、一大儒敎が、揃ひも揃つて我が亞細亞に生れた事實…その事實の前には頭が上

五九

界和平郷建設妙法下種の聖業を爲さしめたり。國民は最澄、空海等が、早く既に大唐に渡りし事實は知れども、日持が單身孤筇、北海を越へ、サガレンに入り、昧藪に進み、支那に雄飛せるを知らざるは何ぞや。而も最澄、空海等は、共に交明を海外に求めて、之を國內に傳へしと雖も未だ大日本建國の國體正義と、民族の使命との中堅思想に冥合せるの大宗敎を以て海外を敎化せざるなり。聖日蓮曰く「印度に佛敎無し矣」と聖日蓮は、身、佛敎の沙門にして而も佛敎の本源たる印度無佛敎論を道破す。然らば聖日蓮の宗敎とは何ぞや。曰く天御中主神南無妙法蓮華經王佛冥合宇宙天照らしの大光明界に本有の尊形を開顯せる世界統一の一大本尊是れなり。聖日蓮の高足日持は、此の大敎法を以て、然り此大法門を開顯すべく、國難襲來の本源に進入せるなり。『我れ』の獨立自主の中堅思想を以て、『彼れ』外國の衆生を敎化すべく、驍然として起てるなり。之れ最澄空海等が敎法を海外に求めたる消極主義に比し、その氣宇の高卑、事の難易、到底同日にして論すべきにあらざるなり。而も日持の大陸に企畫せる千古絶類の偉業、日蒙滿支を中軸とする世界和平郷建設の雄圖たる點に於て、その氣すでに世界を呑めるの勢ひあり。その唱導三十三天突破の光彩、陸離たるものあり。

らず、斯くは本根を吐いたものらしむ。それが本統の事だ。決して認識不足でも、思想の錯覚でもない。人間本来のホンネだ。我が東洋は爾かく「心の光」の大宗教のみでない、世界文化發展上、絶對必須の力である製紙、印刷、爲替、紙幣、磁石等の利器、即ち物の光の發見は、皆東洋人の聖業だ。更に軍事上から見ても火薬や大砲の使用は支那が開祖であるその支那人とても、日本人と同族の支那人が多分を占めて居ると信じられる。彼等白人が何んだ、かんだと大きなことを言つてみた所で、我がアジアで燦然たる文華の光を放つて居る時、西洋諸國の狀態は如何、その文化表徴の最高最大の現象たる國家的組織が整備されて居たか、殆んど蒙昧的に動搖して居たではないか。殊に近時益々盛んに研究されつゝある我が高天原文化に比する時、野蠻國と評するも斷じて過言ではないのである。高原天文化論は別に論ずるとして、さてその光なるものゝ本體は何んだ。そは日天子であり太陽であり日輪である。「日」が光の本源であり本體である。日の特色は「光明」と「熱」と「力」である。日の光明は世界に遍照する。その熱と力とは一切の物の生命である。我が世界天照らしの 天照大神の靈德は、この日にあらずんば表徴し得べからざるほどに靈德絶對である。某有力のインテリは日そのもの、太陽そのものを即天照大神なりと言はぬばかりの國體論を敢てして居るが、コンナのが我が崇高玄妙の國體を誤るものである。

六〇  
西洋人は光は東方よりと申したが、日蓮大師はモット中心的に「日は東より」と高唱されて居る。光の中心、光の本體は日だ。大師は中心的に高唱し本體的に宣揚された。「東」！言ふにや及ぶ我が日の本國だ。大日本皇國だ。西洋人の「光は東方より」では中心的でない。本體的でない。その

光に——「心の光（靈的、宗教的、精神的）  
物の光（肉體的、科學的、物質的）」の二種あり。これを國體的に申すならば「心の光」は伊勢内宮のヲホミタマであらせられ「物の光」は伊勢外宮のウガノミタマであらせられ。内宮を心の光と仰ぐ所以は本宮に鎮座します天照大神は鏡を以て御靈（ミタマ）とし給ふ。「ミタマ」は御魂であり、御まなしひであり、御心である。それを又「大御魂」（ヲホミタマ）とも稱し奉る。大御魂はニギミタマ（和魂）と、アラミタマ（荒魂）と、サチミタマ（幸魂）と、クシミタマ（奇魂）とを内容とし給ふ。それ等を内容とせるタマシヒが日本精神であり大和魂であり、國民精神なるものである。この四魂統一の大御魂が根本となり、中心となつて 天皇精神を光顯し皇軍精神を活現し、感應精神を宣揚し、厚生精神は發揮されるのである。四魂の事は大日本建國神論、第二卷一二五頁に國風に約して論道して置いた。伊勢内宮は實にこの「ミタマ」（御魂）を御鏡に表徴して奉祭されて居る。

物の光は外宮であらせられる。豐受大神のウガノミタマがそれである。ウガノミタマとは倉稻御魂とも書くが一切の物質、肉體的、科學的の光である。稻荷信仰は即ち物の光を仰ぐのである。一口に稻荷信仰と申せば、相場師や、花柳界の慾望の對照と即し低級なる宗教信仰と誤解されて居るが、ナカ／＼以て左様なものではない。國家の財政、經濟政策の指導原理の御神靈であり、國民産業の活動實踐を指導し給ふ御神威であらせ給ふ。

天皇陛下が、毎年十一月二十三日、官中に於て、その年の新穀を、祖神に供進あらせられ又 天皇御親ら聞き召され且つ群臣にも賜ふところの新嘗祭に「ひなまつり」又は「ひなめまつり」なる御祭典を擧げさせ給ふ事は、 天皇の御生活即國家の生活、國家の生活即國民の生活の原理を御啓示遊ばすのである。即ち皇道經濟原理の御實踐である。この新嘗祭の本據が 天皇御即位後、始めて新穀を 天照皇大神宮及天神地祇に奉りて祀らせ給ふ 天皇御一生涯たゞ一回：御一世御一度の御祭典が、大嘗祭とは申し奉る。その大嘗祭を「踐祚大嘗祭」とも稱し奉る。その御儀は、先づ「悠紀」（ユキ）「主基」（スキ）の二地方を定め、この齊田の稻を以て祀らせ給ふ。悠紀地方の神饌を以て地祇（クニツガミ）を祀らせ給ふのである。

天照大神の御詔勅に  
『是の物は即ち顯見（ウツ）しき蒼生（アラヒトクサ）』

民の食ひて活く可きものなり』

とある。『此の物は……』とありて『此の心は……』とはのらせられない。然り此の物であり、その物の光としての御神靈豐受大神の倉稻御魂（ウガノミタマ）なるものが、マルクスの唯物史觀をも救済し給ふのである。これ防共運動者の指導精神なのである。コハ獨り皇國大日本のみの指導精神ではない。獨逸然り、伊太利然り、滿洲國然りである。このウガノミタマの高き御教……皇道經濟原理こそは吾等の

豐受のうがのみたまにマルクスも  
まつろふ御代に早くなさばや  
の一大誓願であり、マルキストに於ても  
マルクスも目をまるくして逃げ出さむ

ウガノミタマの高き教へに  
とおそれかしくむべき國體論上の經濟學的神訓なのである。  
（大日本建國神第二卷一二五頁参照）

宣化天皇は、このウガノミタマ（皇道經濟原理及實踐の御神教）を、宿命的大陸政策一舉斷行の策源地福岡の地即博多（昭和の今日は福岡のガンノスを中心として世界への航空路は開かれたるに比照せよ）……に約し來りて左の如く詔勅を下し給ふ。

食は天下の本なり。黄金萬貫ありとも、飢を療す可からず。白玉千箱ありとも、何ぞ能く冷を救はむ。夫れ筑紫國は、遐邇の朝届（マイイタル）所、去來の關門たる所、

是を以て海表の國は海水を候(ウカガ)ひて以て來賓(マイキ)、天雲を望みて貢ぎ奉る。胎中之帝より朕が身に泊り穀稼を收藏めて、儲根を蓄へ積めり。遙に凶年に設け、厚く良客を饗す。國を安ずる方、更に此に過ぐるは無し(中略)官家を那津(ナノツ即博多)の口に修造(ツクリタ)てよ。又其の筑紫、肥、豊、三國の屯倉(ミヤケ)散けて縣隔に在り、運輸遙に阻れり。儻如須要(ニヤケ)とせば、以て卒に備へ難し。亦宜しく諸郡に課せて分移し、那津(博多)の口に聚め建て以て、非常に備へて、永く民の命と爲すべし。早く郡縣に下して、朕が心を知らしめよ。

(日本書紀宣化天皇紀)

何んとおそれかしこみ奉らねばならぬ御詔勅ではあるまいか。宣化天皇は、千何百年の昔に在りて、昭和の今日を豫言し玉ふが如き御詔勅を下し給ふ。而も那の津(博多)にウガノミタマの經濟政策の重點を置き給ふ。昨今の東亞新秩序の聖戰に對し、眞に無限の勅教を垂れ給ふ。この地に東亞の光として、大亞細亞建國の光としての蒙古軍大供養塔は建設さる。その使命や眞に雄偉である。

その他、仁徳天皇が、民の竈に炊烟の上らないのを見給ひ、三年の間も、課役を免せられ、三年の後、炊烟の盛に起つたのを見て 皇后に

『天の君を立つるは百姓のためなり。されば、君は百姓を以て本と爲す。この故に古の聖王は一人飢え寒ゆるも

『日本國の王となるは 天照大神の御魂の入りかはらせ給ふ王なり』

と宣し、四條金吾殿御返事には

『名のためたきは印度第二(印度は一名月氏國)扶桑(日本國)第一也。佛法は月の國より日の國にとゞまるべし』と示されて居る。以て『日の垂教』や仰ぐべく『光明の教義』や信すべきである。

日蓮大師が西洋人の「光は東方より」の言よりも、モット中心的に活斷し本體的に顯彰せる『日は東より』の提唱は右諫曉八幡鈔の結文に示されたる金言である。乃ち

天竺國をば月氏國と申すは佛の出現し給べき名也。扶桑國をば日本國と申す、豈に聖人出で給はざらむ。月は西より東へ向へり、月氏の佛法の東に移るべき相也。日は東より西に入る、日本の佛法の月氏に還るべき瑞相也。月は光明、在世は但八年也。日は光明月に勝れり。五百歳の闇を照すべき瑞相也。

本鈔は弘安三年十二月の作であり、蒙古襲來元寇國難中の作であり、文永十一年より弘安四年に及ぶ長期戦中の作であり非常時、國難時の警調である。宣化天皇の御詔勅の「海表の國」(朝鮮)：胎中之帝(神功皇后の胎中に在りまして海表の國の皇國への還元の聖戰を起し給ひしスメラミコト)の光明に照らし、「日は東より」の意義や眞に無上甚深微妙の法が開示されてゐる。

のあれば、顧みて其の身を責むといへり。今百姓の貧しきは則ち朕の貧しきなり。百姓の富めるは則ち朕の富めるなり。百姓富みて君貧しきことはあらず』(日本書紀 仁徳天皇紀)

と仰せ遊ばされた。以上、宣化天皇と申し、仁徳天皇と申し、何れもが天照大神の大御魂(オホミタマ)の本源から流出し來れる御言葉で謂はば心と物との統一：靈肉一如の第三帝國思想の開顯である。

明治天皇は

とこしへに民安かれと祈るかな

我が世を守れ伊勢の大神

とも御垂訓遊ばした。天皇の御言葉なり、御行動は、よろづ伊勢神宮の心と物との一如の光明に外ならぬ。その光明を『日本書紀』には

『光華明彩(ヒカリウルハシク)して六合(リクゴウ世界)の内(内)に照徹(テリトホ)らせ玉ふ』

とあり、日蓮大師は「報恩鈔」に

『神をば天照といふ、國をば日本といふ、又、教主釋尊の名をば日種といふ、摩耶夫人日をはらむと夢見てまふけ給へる太子なり』

と説き、印度の釋尊すらも日を仰ぎ給ふの思想が示されて居る。又、諫曉八幡鈔に

『日は東より』の日は「心の光」となり「物の光」となる光の本體である。コハ日蓮大師が世界統一の本尊として圖顯し給へる本尊に於て遺憾なく發揮されて居る。：その本尊は宇宙の公道、人倫の常經たる天御中主神なる妙法正義の光明赫々である。その光明に照らされて本有の尊形を開顯し給へるが光華明彩六合照徹の天照大神であらせらる。其 天照大神そのまゝなる「ヒジリノカミ」(日知神)がスメラミコト 天皇であらせらる。その 天皇とは日本一國のみの主權者にあらず世界の 天皇なりとの意義を光顯されたるが、弘安四年五月十五日に圖顯されたる蒙古退治の大漫陀羅一名護國の大本尊とは仰ぐのである。

大寶令第二十一公式令、詔書式に

『明神御宇日本天皇……』

とあるのは日知(ヒジリ)の神(陛下)の世界 天皇にてあらせらる、所以の意義を示したものである。

「明神」とは「アキツカミ」と讀み。「御宇」とは「天が下知し召す」との義である。即ち 天照大神の御正系であり、御延長神にまします 天皇が、宇内を統馭し給ふの義で、併もその御宇の二字を、特に外國に對する宣命に用ひ給へるの點に、大に注目すべきである。(拙著「天皇現神と皇軍精神」五六頁及四六頁のスメラミコト参照)是くの如く、我等の仰ぐスメラミコト 日知りの神 天皇は、心の光であらせられ物の光であらせらる。彼の有名なる露西亞の批

評家メレジュコフスキーやノールウエの南海岸に生れたヘンリック・イブセンの如きは心の物と物の統一と靈と肉との調和上に文明の建設を豫想している／＼と論策も發表した。就中、イブセンの如きは「皇帝とガラリア人」と題する小説を發表して靈肉統一、物心一如の第三帝國主義を主張したが彼等にして我が天皇の光を仰ぎ居たらんには、伊勢神宮の内宮に於てオホミタマ（心の光）外宮に於てウガノミタマ（物の光）を仰ぎ居たらんには、ア、これあるかな……これあるかなと隨喜の涙、ありがた涙を流したに相違ない。好漢憐むらくば我が日の本ツ國、スメラミタマ（皇國）に生れざりしことよ。

イブセンの第三帝國主義といふのは、物的、肉の文明（希臘主義ヘレニズム）を第一の帝國と名づけ、心的、靈的文明（希伯來主義ヘブライズム）を第二の帝國と名づけ、その肉肉的も、心靈的も各片方づゝでは、眞に世界を支配する所以の大道にあらず、即ち眞に世界を支配するものは靈肉物心統一の第三帝國ならざるべからずとの思想である。彼れはその思想を皇帝とガラリア人と題する小説を以て宣傳したのである。

日蓮大師は、それ等の思想を統一するために、否、嘗に思想のみでない、その思想の實踐行動、事實をも明快適切に批判し解決すべく（それが政治であれ經濟であれ……）本門の戒壇主義を主張された。（天皇現神と皇軍精神五二頁参照）

今、吾等の蒙古軍大供養塔の啓示する大運動は、世界天照らし……日知りの神の光明（物心一如、靈肉統一の大教）に開顯されたる大亞細亞主義和平國の建設である。それは白人國を侵略するにあらずして、白人に依りて侵略されたる國土の宇宙の公道への奉還であり、人倫の常經への安住である。かくして白人も救はれ、世界一切の人類もその所を得るのである。これをこれ人類平等、十界皆成佛とは申すのだ。予に一首あり。曰く

○ 日本のおつるぎの光りてりそひて  
四方の國々いやさかゆらむ

○ 草なぎのみいづはふるふもろこしに

天齋殿（アメノイハヒト）のひらけそめけり

（昭和十四年三月十一日朝七時稿了東京岩木屋にて）

高鍋日統大陸開教運動中の  
大日本建國史學會。大亞細亞民族會。大亞細亞人發行所統一社等の事業は、一切同志百井正明氏の監督の下に善處すべく、同氏邸内に會も社も移轉せり。乃ち左記の如し。

東京市大森區池上徳持町四四六番地

電話池上（〇五）三一五番

猶ほ家族は昭和十三年十二月を以て左記に移轉せしむ。

福岡縣筑紫郡水城驛前、大陸山水城院

### 七百年前の日持上人の因縁熟して

## 管長猊下と徳王閣下の歴史的會見

……日蒙の宗教的親善成る……

蒙古は立てり

曠漠たる砂塵をけつて單騎、包に歸つて來た彼れの手には獲物が澤山握られてゐた。

『今日の大手柄だらう』と得意満面の彼れのほころびた顔には、標悍な血潮のたぎるのを見逃がすことは出来なかつた。

この標悍な蒙古族の血潮は、如何なる艱苦にも耐える金剛の精神となり、不退轉の勇氣となり、騎士の魂となり、はてしなき草原を遊牧する蒙古族から遂に偉大なる鐵木眞を生んだのである。

彼れは外蒙古、黒龍江の上流オノン河畔に立ちて大汗の位につき諸部族を従へて現在の滿洲から支那本部を攻略し、更に西方にまでその勢力を伸し、大元蒙古國建設の基礎をつくつたのである。この鐵木眞こそ、かの有名なる成吉思汗その人である。

斯くして蒙古は歴代成吉思汗の血潮を

うけつぎ、遂にその版圖は洋の東西に亘る東洋史上に會て無き一大帝國を建設したのである。

然し平家の武士が文弱に流れて滅亡した如く、漢文化の奔流にもあそばれ、喇嘛教に對する盲目的信仰は遂に標悍な成吉思汗の血潮を濁らせ、十五代百六十年にして一大蒙古帝國は滅亡したのである。

爾來星霜七百年、蒙古は無限の廣限に過ぎし夢を追つて遊牧し、漢民族よりは硬軟の壓迫を受け、近世に至つて苛酷なる國民政府の重壓にあえぎ、ソビエト聯邦の赤化の魔手におびやかされては離合集散、彼等は月光淡き砂原に映す投影にいくどか衰滅の淋しさを感じたことであらう。

然し彼等の血管を流れる血潮には成吉思汗の血潮が脈々として流れてゐた。水草を追つて遊牧する馬上の嘯きにも、夕

餉の包の團樂にも、蒙古再興の雄叫びは擧げられ、彼等の血潮は爲めにどんなに高鳴つた事であらう。遂に彼等は幾多の苦難を克服して立ちあがつたのである。即ち昭和十一年七月七日、蘆溝橋の銃聲は東亞の天地を震駭し、懸軍萬里の聖戰は、舉國一致の火の玉と化して燃えあがつたこの時である。彼等は時こそ來たれりと成吉思汗への血潮を燃して遂に蒙古の獨立を宣言し、反共親日の大旗を押し立て、颯爽として立ちあがつたのである。この蒙古再興の立役者こそ誰れであらう。成吉思汗への思慕やみがたく常に成吉思汗章を胸間に佩す徳王閣下その人である。

蒙古再興の英主徳王閣下は、日本の蒙古によせられた厚情に感謝すべく、遂に晴れの帝都入りをしたのである。熱狂的市民の歡迎に一行は如何に歡喜し感謝されたことであらう。而も宮中に參内、天皇陛下に謁見を賜り勳一等旭日大綬章を授られた徳王閣下の榮譽茲に日蒙親善の契は愈々固く新しい東洋平和の爲めに、蒙古は更に／＼前進することとなつたのである。

蒙古は遂に立つたのである。

日持上人の蒙古開教



(下関王徳下親長管月望監總務宗出聖りよ左てつ向眞寫)

『お坊さまは、ここから何處までいらつしやるのですか』  
『何處までと云つて、國のあるところ、人のゐるところ、この妙法を弘めに行くのです』  
網代笠に手甲脚絆、草鞋ばきの颯爽たる旅姿の蓮華阿闍梨日持上人は驚き入る里人たちを後に、はてしなき異郷へと北海に船出をなされたのである。網代笠の中になすかに拜するお顔には四海歸妙の信火が燃え、きりつとしまつたお口には不惜身命の御覺悟の程が拜されて、神々しいお姿を里人たちは泣き入るやうにし

て拜んだことであらう。  
日持上人は斯くして北海道から沿海州に渡り、満洲から更に蒙古に入られ、本宗最初の海外布道家として其の足跡をたゞれたのであるが、實に伏見天皇永仁二年のことにして今を去る七百年前のことであつた。  
日持上人が蒙古に開教せられた時は、忽必烈の時代にして蒙古が元と稱し、威光四海を歴してゐた元朝の隆盛期であつたのである。  
蒙古と日蓮宗とは、實に日持上人の蒙古開教によりて七百年前より因縁があるわけである。硝煙の匂ひすらぐ大同に本宗寺院を建立し蒙古方面に活躍中の青年布道家福島圓明師が、五原への憧れとして日持上人の五原の遺跡を物語られたが、本宗と蒙古との關係は實に日持上人によつて下種結縁し、七百年前の妙種が愈々熟して、昭和の今日、管長大僧正望月日謙親下と徳王閣下との歴史的會見が行はれたのである。  
燦たり宗門史上の壹頁  
『私が今度上京したときの船には蒙古徳王閣下の御一行も御乗船でした』  
中山荒行堂へ入行の爲め山西省大同の身延別院から上京された福島圓明師は、

宗務院でこんな話をされた。

福島師の話聞いた教學部員は、七百年前の日持上人の蒙古開教——徳王閣下御一行の御乗船に本宗布教師の福島師乗船——と、この二つのことを考へて見ると、どうしても單なる偶然の出来事のやうには思はれなかつたのであらう。

『徳王閣下の御同船で光榮でした』と福島師に挨拶したものの、教學部員は、もつと深い意味があると云ふ神秘的の心持をどうすることも出来なかつたのであらう。教學部員は早速、堀庶務部長にこの神秘的心境を報告したのである。

『それはさうだとも、日持上人蒙古開教の因縁の然らしむる所である。この七百年前の因縁を昭和の今日、更に熟さしめ日蒙の宗教的親善を計つて皇國の爲めに御奉公申上げるのが門下の務めである』  
熱血の堀部長はこう云つて早速、管長親下に徳王閣下と會見していただくことを決定し金紙金泥の御本尊一幅、法華經一部八卷開結共に十卷、高祖遺文録拾卷、水晶の念珠一連を徳王閣下に贈呈することとして、準備を命じたのである。  
『これで日持上人の思召しに添ひ奉ることが出来る』

堀部長の力強い一言、福島師も感激して教學部員と共に準備に萬遺漏なきを誓つた。

それは丁度十月二十二日の夕刻であつた。

それから福島圓明師と教學部員は、管長親下と徳王閣下との會見に就て萬全の準備を開始した。漢口陥落の奉祝の提灯行列を徳王閣下の宿舎、帝國ホテルで眺めながら、夜の十二時近くまで宗門史上の壹頁を飾る淨業に精進した。

そして愈々十月二十九日午後二時、徳王閣下と管長親下とが會見なされる日時が決したのであつた。

### 感激の瞬間

漢口陥落の國民的奉祝気分のみなきる二十九日午後一時、管長大僧正望月日謙親下は宗務總監鹽出孝潤、庶務部長堀龍淳、財務部長肉倉實運、社會部長加藤通温の四僧正並に吉倉總務主事を従へて宗務院を御出ましになり福島圓明師、鈴木教學部員の御出迎を受けて帝國ホテルの一室に御休憩あそばされたのである。

定刻——午後二時、管長親下は四僧正並に吉倉主事を従へて階上なる徳王閣下のお室に參上、接伴員中根直介氏の御紹介によりて徳王閣下と會見なされたので

ある。

徳王閣下は蒙古服の上に、拜受の旭日大綬章を佩用して堂々たる英姿、ふくよかな圓顔に笑ひさへたゝえて、しかも犯すべからざる威嚴、蒙古再興に燃える眼は烈々と輝く、胸間に着用せられてゐる成吉思汗章に徳王閣下の成吉思汗への思慕が偲はれて、ゆかしい極みである。

紫の法衣に緋の袈裟で法體を包まれた管長親下が、徳王閣下と對坐するや、鹽出宗務總監は、かねて用意の贈呈文を開いて靜かに而も壯重に朗讀せられた。

『大日本國日蓮宗管長望月日謙親を閣下に通ずるに際し日蓮宗々務總監謹みて申上ます。閣下千里を遠しとせず東行來朝せられたるを驩迎し併て蒙張政權誕生の前途を祝福致します。』

吾が宗祖日蓮聖人、立正安國の教は大乗佛教の王位を占むる法華經の正理正法を以つて國家社會の總ゆる組織を開顯醇化して現實の佛國土を建設せんとするもので即ち八紘一宇の皇道精神と相即一如するものであります。此の精神こそ全人類を照す最高文明の光となり、極東日本より發祥するは、日は東より出でて西を照す、とも、一天四海皆歸妙法、とも日蓮聖人は豫言せられ



ました。七百年前の聖者の叫びは今や正に事實となつて現れ来りましたことは世界人類の大なる喜びであります。此時に當り、日蓮聖人護國大曼荼羅一幅、法華經十卷、高祖遺文録三十卷、水晶大念珠一連を閣下に贈呈する善因縁を結び得たるは最も喜びに堪えざる處であります。就中、大曼荼羅は世界開顯、人類平和の最も尊き御守りでありますから、特に蒙疆地區政權の圓滿なる發達を祈念して授與致します。何卒閣下、其心を以つて常に此大曼荼羅に對し至誠御祈り下さい。今日閣下の心に植えた妙法の佛種が他日發芽して清淨心の華開くことを念願するものであります。猶ほ念珠は總本山身延久遠寺大堂奉安の宗祖靈像の御手に懸けまゐらせ日蓮聖人の御魂が此の念珠に宿つて居りますことを申添えます。

鹽出總監の朗讀が終ると、堀部長は水晶の念珠をとり出して管長親下のお手に渡す。親下は念珠を押しいたゞいてから徳王閣下の御手におかけ申上げた。その瞬間、鹽出總監は静かにお題目を唱へ職員一同これに和して玄題三唱裡に大念珠は管長親下の御手から徳王閣下の御手に移されたのである。この瞬間の感激、管

長親下も隨員一同たゞ無言、感激の爲めに、目頭の熱くなるのを覺えたのである。徳王閣下は通譯を通じて

「本日は日蓮宗管長望月親下、態々遠路身延山より御出まし下されたことに對し謹んで御禮を申し上げます。蒙古政府の將來は今後幾多の政治的工

作を経て獨立の目的を達成したいと存じます。それに付ては蒙古傳統の宗教と日本の大乘宗教との眞の連絡親善に依り所期の目的に到達したいと存じますので宜敷御願ひ申し上げます。

本日記念の爲め眞心を籠められた日蓮上人の御本尊、法華經、遺文等を戴きまして眞に感謝に堪へませぬ。上人の尊い教の内容を承り度いのですが、本日は時間がないので何れ歸國の上ゆつくり拜見致します。」

と感激に感謝の言葉を述べられたのである。日蒙の宗教的親善は、こゝに成立したのであるが、管長親下が徳王閣下の御手に念珠をおかけ申上げた瞬間の玄題三唱のあの感激、七百年前の日持上人の思召に添ひ奉ることが出来たと思つた時の歡喜とめどなく流れる法悦の涙を幾度ぐつと呑込んだかわからなかつた。尙、李守信將軍を始め一行の方々には

吉倉主事より御妙判を夫々贈呈したのである。

會見わずかに壹時間たるも、熾たり、近世宗門史上の壹頁を飾つて宗門的不滅の會見は終了したのである。(すゞき・元りゆう記・日蓮主義昭和十三年十二月號)

### 本化教徒と大陸政策

先年我輩が于沖漢氏と會談した時、氏は日蓮大師の日支親善觀を聞かれたので蒙古退治の大マンガラと元使に對する慈悲心を以てした。「蒙古退治」がナゼ「親善」だと反問されたが、それは先きさまから攻略と来るからこちらも退治と出でるのが當然で、先きさまが親善と来ればこの本尊は即蒙古救済、世界和平とは轉じ来るのである。今、徳王閣下の時代は「日蒙一體」以て世界平和への聖業達成運動であらから「我此土安穩天人常充滿」を大目的とし給ふ大本尊の眞義は光顯せられんとするのである。況してや元使の首切りすら反對された日蓮大師の流れを汲む我等本化の教徒としての使命が皇國大陸政策の妙化に在つて存するは勿論のことである。(日統)

## 蒙古徳王と都王の妙法結縁

### ―有徳王覺徳比丘の其むかしを 昭和の今日に實現せんことを

高 鍋 日 統

### ◎入蒙開教根元準備工作

東亞新秩序建設の春に相應しく、櫻咲く聖天子金輪大王國目掛けて、七百年前日持上人に依りて妙法下種の一大事の因縁を結ばれたる大陸より續々と訪日視察團が繰込み来る事の噂しさよ。昨年は蒙古聯盟自治政府の主席(事實上の蒙古王)徳王(トムチヨクドンロツプ)閣下が答禮訪日に、我が朝野を擧げての歡迎に：：その最後『以要言之』の結論に、我が立正安國の同志に依りて建立されたる蒙古襲來元寇國難の大史蹟九州博多灣頭志賀の嶋の蒙古軍大供養塔に參詣して九識心王の根本から日蒙親善大亞細亞和平建國の光明に照され本有尊形の妙因縁を結び、非常なる感激を以て歸蒙されたるに引續きその第一王子都王(トガルスロン)さんが、世界天照らしの統一文化を攝收すべく、渡日留學さるゝこととなり

多數の家臣や要人を隨伴して、三月十一日蒙疆の首都厚和を出發し、スメラミコトの神威赫々たる我が東京に着されたのは十七日であつた。入蒙開教の内命を受けたる予は一日も早く入蒙せねばならぬ事情にあるのだが、然し一ヶ月や二ヶ月後れてもヨリ以上の教効を奏するには昭和十三年徳王閣下と蒙古軍大供養塔畔に於ける結縁と一體不離の關係にある都王さんにも、念ぎ教縁を結ぶ必要ありと痛感し、十七日先以て其宿舎たる山王ホテルに訪問したのであつた。着京勿々御つかれの所にも拘らず、快く會見され、翌十八日も再會し法話を爲すの機會を得たるのみか、共に記念の撮影、以て妙法下種の一大事の因縁を結び得たのは、その事自體がすでに蒙古開教の聖事と確信するものである。予が入蒙をグズ／＼してゐるやうに、批評する向きもあるやうだが、遅くされるには、遅れざるを得ざる理由の存する事情は、後日明白、なるほど

と、御合點がゆく事を楽しんで、何んと評されても、着々として、黙々として準備工作に努力してゐる事を言明する。

### ◎都王「日蒙親睦」の題字揮毫

曾て、現管長望月日謙大僧正が宗務總監時代であつた。予は後藤新平伯が日持上人大陸開教の史論を提げて、ロシアのヨツフユとサガレン問題に關し日露内交渉を斷行されたる因縁を開顯すべく宗門に献策した事に關し、快く採用しくれたるは時の望月總監と時の管長酒井大僧正の斷の然らしむる所として、予は忘れんと欲して忘れ得ざる法悦の歴史である。この歴史上の光明に、一段の光明を添え、大陸開教上に、有力な基礎を作られたるは現鹽出總監を首班とする宗務當局の敏活なる運動であつた。ソハ言ふまでもなく昭和十三年十月二十九日を以て舉行されたる望月管長、鹽出總監、その他宗務當局の徳王閣下に對する妙法下種の奉行であつた。コハ宗門として最も意義ある聖事で、予は法悦眞に切なるものがあつた。次で予は徳王閣下を、蒙古軍大供養塔に案内參詣の宗命を受けた。コハ外務當局としては蒙古人を刺撃するとかの理由で、反對意嚮もあり、非常に難事ではあつたが、元寇記念、敵國降伏、立正安國の大銅像日蓮大師（博多東公園に形益説法の宗祖）の感應の然らしむる所、遂に奉行し得たのであつた。塔畔に於ける徳王閣下は正さしくこれ覺徳比丘の正義弘通に絶對共鳴されたる「有徳王」の理想身の權化も斯く

七〇

やあらんかと疑はるゝまでに感激の態であつた。閣下が大枚の供養金を贈られたるが如きは道裡の消息を物語るものではあるまいか。吾等はその淨資をして、ヨリマス〜意義あらしむべく、今、着々としてその記念出版として「興亞の光」と題する大陸開教用の著書發行の準備に屬する。コハ約二百ページの本文に加るに六十個の寫眞銅版や凸版を併載すべきもので、これだけでも相當の日時を要するのである。予は閣下と共に參詣されたる蒙古軍の顧問金川耕作中佐…閣下の參詣に就て非常に盡力されたる熱烈なる日蓮主義者…に依頼して、本書に閣下の題字を送られん事を以てした。蒙古に歸任されたる中佐は、その約を果されたのであるが、残念な事には本書發行に間に合はなかつた。ソコでその代理の意味で山王ホテルの都王に依頼した所、幸に快諾され、蒙古文字

モンゴル（蒙古）ナラン（日本）イナク（親）ナイルタイ（睦）

と揮毫して贈られた。父君徳王血脉相承の文字で、げに、「字は心畫」とや、この父にしてこの子ありの文字身が今後蒙古開教上に、如何なる教益をもたらすべきか。御互ひの努力奮闘を要すべき秋である。

### ◎徳王と都王の名に就て

因みにこゝに特に注意して置かねばならぬのは、徳王の二



蒙古徳王第一王子都王（前列中央）昭和十四年三月十八日東京山王ホテルに於ける高橋日統都王（法話記念撮影）

字は單なる人名であつて王名でないとの珍説が、相當廣範圍である事である。コハ、予が徳王を蒙古軍大供養塔に参拜せしむる準備工作中に、相當有力なインテリ先生等が、徳王は本統の王様ではあるまい、徳王とは人名であらう……といふのだ。左様な珍説や誤認識は、東亞新秩序の建設運動上の妨害ともなるのだから一言辨じて置く。

徳王とは漢文字で、徳穆楚克棟魯普王の略字である。その読み方はトムチヨクドソツプで、これは蒙古語ではなく、チベット語で、御経文に因める人名である。我が日本に例するならば内閣總理大臣平沼騏一郎と申すのを平沼首相と略稱するが如くである。最終の王の一字は蒙古王といふ謂で單に人名としては王は不用だ。而してその令息(第一王子)の都王とても同じ意味である。都王は具さには「都嘎爾蘇龍」王と書くべきでその読み方は同じくチベット語(佛教の語)で「トガルスロン」王との謂である。

「名はその體を現はす」願くはその徳王の名をして「有徳王」の實を活現せしめよ。日蓮大師の三大秘法鈔(本門戒壇の條)に曰く、

『有徳王、覺徳比丘のそのむかしを末法濁惡の未來に移さん時』云云

この『有徳王』とは天地の公道、人倫の常經たる妙法正義を、神武國防の威力を以て擁護するの一大使命を有する理想的な人格者である。徳王閣下も、その血脉相承の第一王子都王

七二  
さんも、有徳王の理想身をして現實身たらしめよ。蒙疆政權の世界的使命が如何に幽玄高妙なるか、而も世界天照らしの大理想を以て建國された我が日の本ツ國の使命と合體しての蒙疆政權たるに於て有徳王の神武正義擁護の責務がトムチヨクドソツプ王に賦與されたにあらざるなきか。更にその血脉相承のトガルスロン王が、我が日の本ツ國に留學されたるの使命も亦同様である事を思ふの時、コハ單に東亞に局限されたる問題ではないのである。有徳王の理想身をして、世界の一大史實として、世界史上にその名を赫々たらしむるの雄偉堂々乎たる天命の降下と自覺さるべきである。(昭和十四年三月廿一日夜草)

### 寸善尺魔

人生の運命ほど不思議なものはない。清きこと天女の如き心もそれが俗惡の娑婆世界の苦悶試練を経ざるが爲に、惡魔の誘惑にあたら一生を涙で送る事に相成る。一寸の善に一尺の惡魔……謂はゆる寸善尺魔は娑婆世界の通患でもある。一國に國防を要するが如く、一身にも防禦を要するは同じ道理である。清き天女の如き少青年を善導すべき父兄の責務の重きが如く正義建國の理想を有する皇國を擁護する國防の使命の崇高なる今更ら言ふ迄もないことだ。その惡魔は赤魔を以て最大とする。赤魔もやがて、レブラで死する時もあるであらう。宗祖の聖歌に曰く立ち渡る身の浮雲も晴れぬべし、絶えぬ御法の鶯の山風。星山學人、(三月廿一日記)

### 滿洲の日正會と北京の日正閣

昭和十二年六月一日、清正公が滿洲に進入せる史蹟オランカイ(滿洲國間島省延吉)の地に、男爵石本惠吉氏、實業家齋藤太氏及予等發起して日正會を組織し更に齋藤氏はその所有の地所家屋を提供して日正院と稱する教會を創建せらる。日正の日は日持上人を表し、正は清正公を示す。要は聖人と信將との大陸妙化の精神を光顯せんとに他あらじ。今又(昭和十四年)石本男



は北京西城達子營三四に日正閣を創建し、その裡に「蒼龍窟」を置く。その理想や仰ぐべくその精神や讚すべし。寫眞は昭和十二年滿洲延吉(舊オランカイ)齋藤太郎日正會玄關前に於ける記念の撮影たり。向つて前列より齋藤太氏、(その前は令息その背後は齋藤氏夫人)高鍋日統、石本惠吉男にして後列は何れも同志者たち。因みに滿洲國皇帝陛下の御祖先スルハチユ氏が三十五六歳で多數の精兵を要し滿洲に威を振はんとして居た時清正公はオランカイに進入した。公は時に三十二、三歳である。その結果がどう相成つたか、曰く今の東亞新秩序の大運動である。

高鍋日統著 (千三百頁の以上長編論策)

七四

清正公滿鮮活躍大信念啓示の

# 大日本建國神論

第一卷及第二卷既刊

右は『皇道日報』紙上に昭和十一年秋以來昭和十三年春四月迄數百回に涉りて連載せる諸論文及び先年、月刊『日本及日本人』日刊『日本』新聞、月刊『大亞細亞人』等に連載せる。

- 一、皇國大日本國體原論 一、大日本建國史の新研究 一、宿命的大陸政策史論
- 一、大陸國防史蹟水城論 一、月讀尊の史觀と南進政策 一、豊太閤と大日本主義
- 一、神威護國論 一、天皇現神と皇軍精神 一、滿蒙平和國論
- 一、國難降伏論

等の諸論策の結要的論旨を骨子として大要左の如き分類の下に通俗的講話體に著述し始めたるものに御座候本書は引續き目下第三卷製版中に屬し、之が出版の上は更

に第三卷、第四卷と順次出版し第六卷にて完結の豫定に御座候

第一卷は……………

清正公が豊太閤より征韓の命令に接するや特に建國三十柱の神靈を祭れる理由

(今日迄清正公を論せるもの多しと雖とも、この點に就て論及せるもの一人も無きは何ぞや。この一點を看過せば畫龍に點睛を欠ぐの憾みあり。否、彼等はこの意味に於て清正公を論ずるの資格を有せざるものなり) 日統僥越ながら公の眞面目を光顯するの先行指導の爲め敢て本論著に着手せり。

第二卷は……………

大國主尊の政權奉還と宿命的大陸政策の原理史觀

(コハ清正公の謂はゆる三十番神即ち大日本建國諸神中の氣多大明神(大國主尊)祇園大明神(素盞鳴尊)の歴史科學上の啓示より宿命的的大陸政策の大教を高唱せるものなり)

第三卷は

神功皇后。豊太閤等の征韓は日鮮還元の聖戰なり

七五



### 第四卷は……………

#### 八幡大神の歴史的御正體と神威國防論

(コハ同じく、氣比大明神、(神功皇后御母系の御祖先新羅王統天日槍命)平野大明神(桓武天皇)御生母高野夫人の御血統百濟聖明王)等の啓示する日鮮同域、日鮮同種の大教上よりの論道たり)

(コハ清正公の朝鮮在陣中の軍令狀に特に高唱されたる所、之が現代非常時への國防的警策や如何ぞ八幡大(明神の歴史的御正體を單に應神天皇とのみ即了せる非科學的歴史觀を痛破し以て皇國々防の眞義を高唱論)道せるものなり)

### 第五卷は……………

#### 支那赤山大明神の啓示する日支共存の本義と世界 和平の提唱

(赤山大明神は清正公の信仰せる大日本建國神中に於ける特異の存在たる支那の神靈たり何故に支那の神靈を大日本建國神中に奉齊されたるやの一大疑問の解決及び支那人が理想の聖天子と仰げる帝堯帝舜なるものは我が大日本人と同族にして其統治の地帯は完全に大日本の一故郷たる所以の明快堂々の論道たり)

### 第六卷は……………〔結論〕

#### 豊太閤が征韓に際し清正公に世界天皇奉安の護國 大本尊授與の大精神とその現代への一大警策

(コハ清正公滿鮮活躍大信念統一の本尊にして、大日本建國神論開顯の一大光明たり。以て結論とは爲す。)

東京市大森區池上徳持町四四六(百井邸内)

#### 大日本建國史學會

電話池上(〇五)三一五番

代表 高 鍋 日 統

別項に本論の内容一端を示す爲め第二卷及第三卷の要目を紹介し置くべし。

### 本書第二卷目次

第十章 神功皇后の御祖先は新羅の王統天日槍なり……………(八八頁)

第十一章 世界政權奉還先行指導の大國主命……………(一一一頁)

第十二章 世界彌榮國建設の國魂日本精神の内容……………(一一九頁)

### 日韓一域史教目次

『日韓一域史教』中、第一章と第十七章以下を除き、第二章より第十六章迄を特に併載せるは「大日本建國神論」第一巻終りより第二巻に續き「神功皇后の征韓」及「大國主命の政權奉還」を論道し始めたるを以て、それに對する助説に資せんが爲めなり。かるが故に、必ずそれと併せ閲讀せられむことを念願するものなり。その目次左の如し。

◎韓國を失落せる大日本國號の錯覺意識(大八洲とは金色世界也)……………(一頁)

◎仲哀天皇の御雄圖を輕視したる嶋國根性(千歲宥史中の仲哀天皇)……………(八頁)

◎神功皇后の御祖先と新羅王統天日槍(皇后の血は通ず新羅國)……………(一四頁)

◎九州と本州は本來地續なりき(仲哀帝關門地峽の開鑿)……………(二一頁)

◎仲哀天皇は何が爲の長門還都か(仲哀帝豐浦宮跡の史光)……………(二九頁)

◎征韓四神の歴史科學的顯彰(仲哀神功兩皇神託體現)……………(三九頁)

◎軍國精神の神威と日本海國防神(伊勢荒魂と宗像三女神)……………(四八頁)

◎建國青年最後の卓言と出雲政權(出雲代表神と海神聯邦)……………(五八頁)

◎宿命的大陸政策斷行の英雄神(素盞鳴尊のカラ國經綸)……………(七三頁)

◎神事に示現し給へる大陸經綸の神靈(崇神帝と大國主の和魂)……………(八九頁)

◎荒魂と和魂との戮力一心天下經營(政權奉還と國作の廣牙)……………(一〇三頁)

◎建國史を紛亂せしめたる僧徒の大罪惡(大國主神と大黒天の別)……………(一一六頁)

◎豊太閤の征韓は堂々たる皇軍なり(大國主神靈と豊公征韓)……………(一二二頁)

◎絶對平和主義は亡國思想なり(劍光影裡大平和郷在り)……………(一四五頁)

◎先づ國家を祈れ國亡びて何の宗教ぞ(世界を救ふ神化の國防)……………(一六一頁)

## 大日本建國神論第三卷續稿

八〇

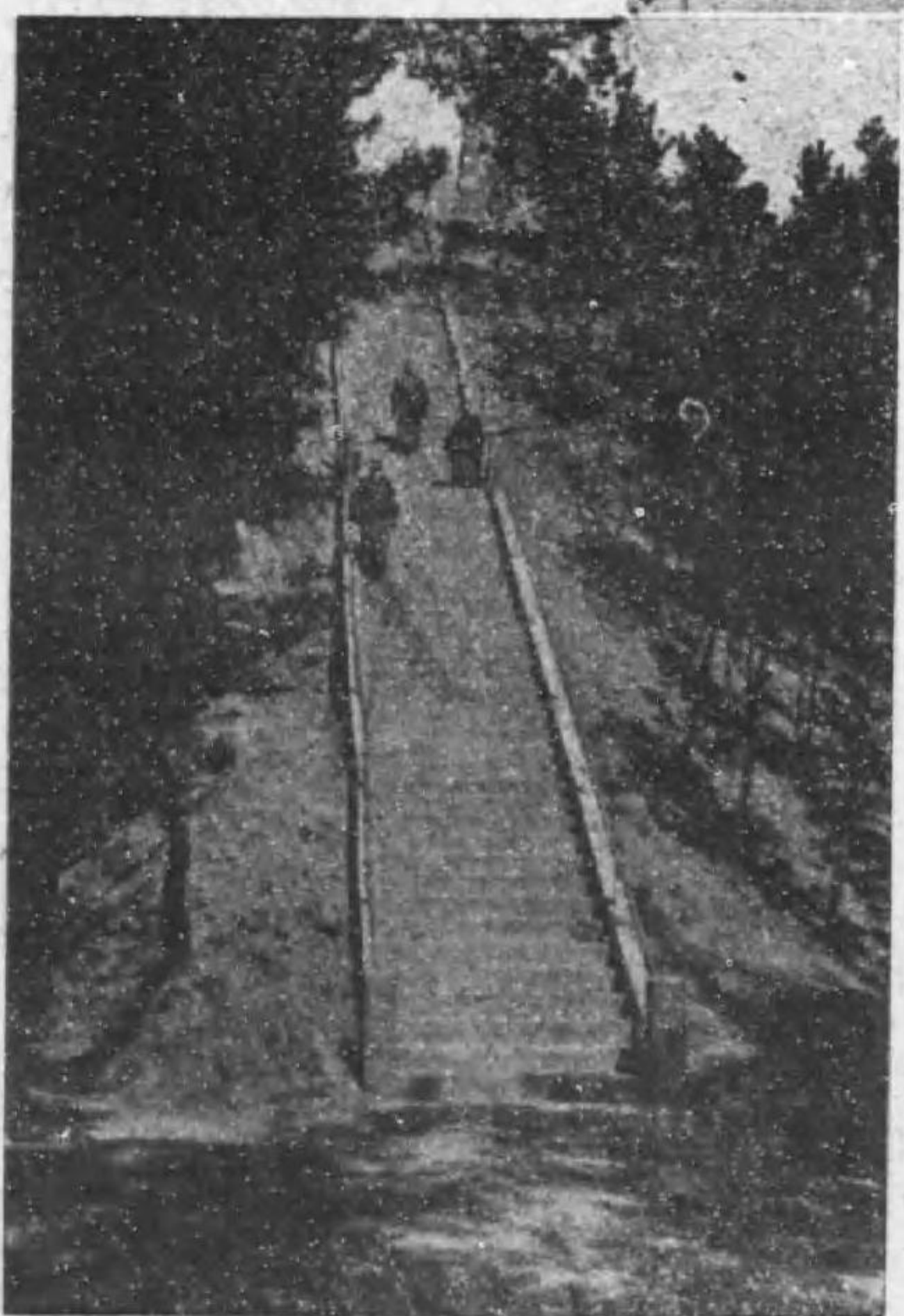
- 一、大國主尊の出雲政權奉還は單に裏日本出雲のみにあらず、朝鮮もその權内にありき。
- 一、神功皇后の新羅征伐と稱するも實は征伐にあらずして日鮮同域への歸一還元の聖戰たりき。
- 一、神功皇后の朝鮮還元聖戰の大本營が特に博多灣頭に設けられたる建國史上最大重要な警訓。
- 一、日本海に史蹟を垂れたる宗像三女神天孫奉助の使命と博多灣中心の建國史上の地位。







寫眞(上段) 滿蒙平和郷實現の指導精神として建設されたる博多灣頭の蒙古軍大供養塔落成は昭和二年五月十五日、除幕式は昭和三年三月七日を以て舉行し以て我大日本帝國の平和的使命を世界に光顯せり



寫眞(下段) は蒙古軍大供養建設の地點の山上迄の參道として築造せる鐵骨コンクリーの階段にしてその長さ十六間餘あり、其基底より約三間の海岸に蒙古首切塚ありしも數十年前博多東公園元寇記念館に移さる。

博多灣頭に敵國降伏の神威赫々たる箱崎八幡宮



箱崎やからくにかけて秋の月

蒙古軍の根據地となりし博多灣頭志賀の嶺「くびきれ」と稱する地點、此の山頭に蒙古軍



大供養塔は建設され滿蒙平和郷建設の大精神は光顯されたり

維中華民國十七年  
夏正歲次戊辰二月  
大日本國博多灣頭  
蒙古軍供養塔成略  
喇沁札薩克都楞親  
王貢桑諾爾布為文  
致祭曰  
於戲忠貞義烈如日  
行天無分中外千古  
不刊在昔有元威揚  
海內華夏祗肅干戈  
載厲庚辰十月有事

東瀛命右丞相秉鈇  
專征越歲孟秋帥卒  
於病將星斂芒大功  
何竟十萬健兒厄於  
海島見危授命殞若  
霜草哀此國殤成仁  
取義今七百年壽復  
論議乃有高士悲爛  
心存建供養塔以妥  
忠魂魂子上昇名焉  
不朽萬古馨香基此  
醴酒尚饗

蒙古カラチン王より高鍋日統への親書（蒙古文及漢文）

カラチン王より高鍋日統への親書

中華民國三年  
大日本博多灣頭  
蒙古軍供養塔成  
高鍋大師郵示傳  
起余既為文以祭復  
為之頌曰  
宏矣象教覆彼大  
千無遮矣碍人我骨  
謁仗慈悲力結廣大

緣况在同文唇齒相  
連扶桑震旦佛法同  
宣靈光普照法雨  
均霑巍表刹產湧  
金蓮天飛地踊供養  
莊嚴大車屹豈不敬  
不刊  
喇沁札薩克都楞親  
王貢桑諾爾布撰

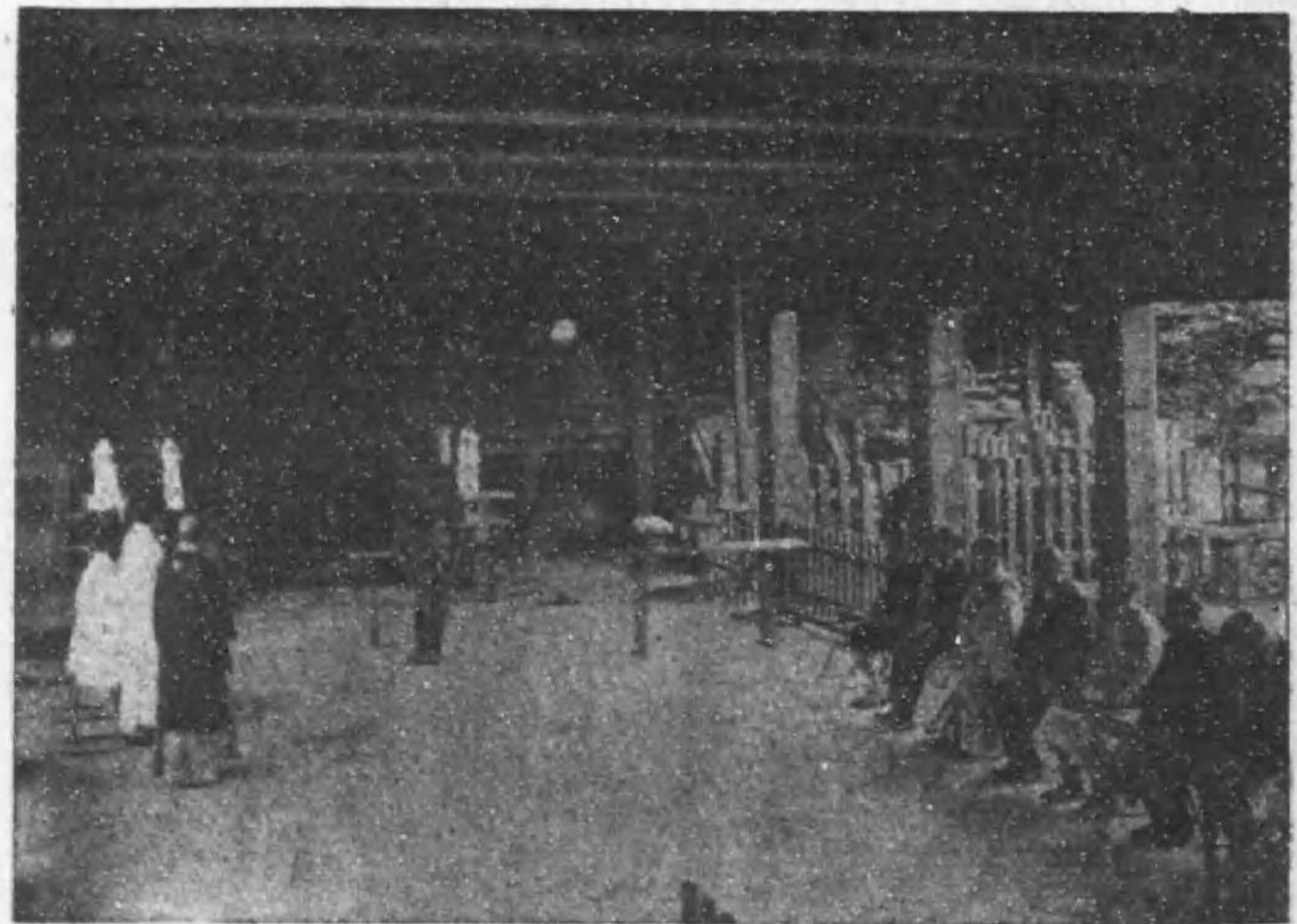




昭和三年三月七日「蒙古軍大供養塔」落成除幕式に肅親王府の總理川嶋浪速氏等と共に参列、翌八日の彼我萬靈供養の大法要に参拜、其夜の記念大講演會の壇上に立ち南無妙法蓮華經を大聲三唱し、堂々滿蒙平和郷建設精神を演説せる肅親王第四王女廉紹嬪



蒙古軍大供養塔建立發記人の一部福岡勝立寺に記念撮影



蒙古軍大供養塔落成除幕式に参列せる日蒙親善の大騎隊一行及蒙古獨立義軍肅親王、川嶋浪速氏、ルニョジ子遺の軍將ツヤチババるせ起の時、高鍋日統等、箱崎八幡宮に滿蒙和平郷建設祈願祭の光景、維和昭三年三月九日也

予が此の功徳の世に  
 元軍の戦死者に  
 法米塔を奉じ  
 揮毫を以て  
 東郷元帥の功徳  
 表すに努むる  
 趣旨を以て  
 元帥の功徳を  
 表すに努むる  
 趣旨を以て  
 元帥の功徳を  
 表すに努むる  
 趣旨を以て

此の功徳の世に  
 揮毫を以て  
 東郷元帥の功徳  
 表すに努むる  
 趣旨を以て  
 元帥の功徳を  
 表すに努むる  
 趣旨を以て  
 元帥の功徳を  
 表すに努むる  
 趣旨を以て

肅啓御依頼の元軍戦死者供養  
 塔の文字揮毫に關し本日東郷  
 元帥を訪問貴殿御發願の趣旨  
 詳説候處元帥に於ても仁慈の  
 御企と大に賛意を表され近來  
 殆ど筆を執られざるに拘もら  
 ず即座に願以此功徳の廿字を  
 揮毫被致候を以て御返附に及  
 候條御査収相成度不取取右要  
 件まで如斯御座候 敬具

昭和二年九月廿日

小笠原長生

高鍋日統殿

東郷元帥の蒙古軍

大供養塔の大文字

此寫眞銅版は、昭和三年春三月を以て、落成除幕式を舉行し、九州博多灣頭志賀の嶋に於ける、蒙古襲來の史蹟に建設されたる所の、蒙古軍大供養塔に

願以此功徳  
 普及於一切  
 我等與衆生  
 皆共成佛道  
 伯爵東郷平八郎書

刻入せる、東郷元帥の大文字である。蒙古軍大供養塔は、實に滿蒙平和郷建設の、指道原理の世界的一大宣揚である。道の張作霖も本庄繁將軍の手を通じて、予に書を贈り  
 「此塔、毀つ可からず、此願、終訖すること無けん、我れ今此讀を作り、雨涙胸臆を露し、願くは此因縁を以て、修羅の劫を消滅せん」と申して來た、あゝ張氏にして、予等との此約束を履行したらんには、氏自らも滅亡するに及ばずその子孫も亦た餘慶ありたらんに、さても残念な事であつた。  
 今や、滿洲國は建設せられ、東洋安寧の基礎は確立し、やがて世界平和郷建設への、一大光明赫々たらんとするの秋、地下に於ける張氏の感慨や果して如何んぞと申すも涙の種である。  
 然し、張氏は吾等との精神的盟約を破壊せる行動を執りて、あはれの最後を遂げたが、よしそれが一時的盟約でありしとするも滿蒙平和郷建設の大精神に共鳴せるの功徳は張氏自ら言へるが如く「此因縁を以て修羅の劫を消滅せん」  
 因みに此の供養塔の文字は、一字一尺大にして、小笠原長生の配慮の下に、東郷元帥が特に揮毫されたるもので、而も滿蒙平和郷建設指導精神の大供養塔の原稿たる點に於て、我が日本國家として、はた滿洲國家としても、當然、國實に編入すべき重要文書である。原稿は小笠原子爵の添状と共に、今予の手に在るが、相當の方法の下に永遠不滅に世界平和郷建設の光明として、否、大日本てふ大和丸の航海を照らす、一大光明たらしめたいと念願してゐる。(日統)

大元帥元大  
 兼用府帥  
 大元帥諭此次日本國舉行  
 蒙古軍樂養塔除幕式  
 委託高錫日統帥在期  
 代讀讚文并因特此奉  
 達即希

大元帥元大  
 兼用府帥  
 答照此致  
 高錫法評  
 大元帥府秘書廳

高錫法評  
 大元帥府

大日本志賀島蒙古軍供養塔讚

卓哉大慈氏法身遍塵界普曠四天下作一家族視  
 冤親奚足論平等無差別何意忽必烈渡海興雄師  
 被戕諸健兒荒原血長碧博多大海灣往往觸骸哭  
 迄今六百載遺塚多湮滅大德高錫師至仁被幽顯  
 改建此浮圖冥魂獲依託並藉信仰誠廣造和平福  
 俾亞細亞洲蒸為太和宇我知大師大華嚴經意讚為宣其蘊

欲謀大和平首除人我相眾生執我有究竟我安在  
如彼虛空雲斯須就漸滅四大本皆空何論一枯融  
枯融亦虛空敵我何畦畛以此大智慧宏振諸鬼趣  
無我無敵人一切皆度脫推此悲愍心普及於東亞  
為謀和平故開顯無上法煌煌法華文塔畔森布列  
宏闡日蓮宗天人盡歡喜此塔不可毀此願無終訖  
我今作此讚兩淚霑胸臆願以此因緣濟濟脩羅劫

中日同種族文教通沆漚庶體釋尊慈左右長提繫  
順逆證一如回向於佛道前路共蕃榮寶祚永無替

高錫法師興建蒙古軍供養塔

九六

先大元帥作倡讚歎以落其成其明年五月為第一屆例祭之期 服務鄉國近在東隣企慕仁風塋懷遺迹不能自已曩者中原鞠旅涿州一役互有傷亡 下令掩覆更樹

豐碑題曰奉晉兩軍忠命處味經設奠寃親平等友敵同

仁殆與法師此舉事殊志合然

傷今基於不忍之念法師

追遠實唱無緣之慈夫仁出於不忍尚待擴充慈至於無緣

最為廣大敬體

先人和平之心竊會法師慈悲之旨茲託高錫法師

齋奉香幣朝塔三肅敬屬

蒙古軍之靈而祝之曰懿我五族昔蒙最強天祚元室拓土開疆太祖世祖奄有華夏威行西歐統御東亞既臣率土遂征不庭樓船航海東渡滄溟風引神山潮翻地軸馬革不還鵠魂夜哭此事絲暖垂六百年田橫孤島徐福荒汗昔駭驚

九七



濤今成通道憑巾夕陽淒涼宿草有大法師宏闡宗風望古遙

九八

集與物俱融為妄幽魂爰立斯塔梵宇莊嚴靈風蕭颯長松  
古穆流水清漣今歲孟夏肇敷几筵豚醪既陳魚鼓斯作竊  
首一言用慰冥漠嗟爾壯志破浪乘風盡忠君命終為鬼雄  
嗟爾英姿拔山蓋世試念古人同傷雖逝生何所寄死何所悲  
有如三寶期爾皈依維我法師具大智慧澤及枯骨神通無際

無人無我無古無今以是因緣證吾本心人我眾生古今旦暮無

往知未待人自悟蓬瀛三淺世事潮翻麻姑一去惟賸仙壇成  
郭千年前氏已香丁令歸來依然華表卓哉浮圖永鎮此間  
千秋萬歲同伴河山尚

饗

日本、福岡市、橋口町  
 勝立寺 韓文  
 高鍋日統親下  
 至急

かを知るべく、殊に滿蒙平和郷の建設が我が皇道の世界的光被の前程に於ける當然必須の天業たるかを自覺せられたるに外ならぬ若夫れ我が對外政策を以て侵略主義じやの、帝國主義じやのと、あらぬ非難を敢てする徒輩にして、本書狀を味讀せば、その無認識と迷妄を反省するであらう。

本書狀は本庄繁將軍が、我が蒙古軍大供養落成除幕式の當年は、北京公使館附武官として在勤せられ而も近く姫路師團長に轉任せられむとする大忙裡に、悠々十五枚の長文である。是れ一片の義理や役目で出来る仕事ではないのだ。一に是れ將軍が國體原理上より博し得たる大信念の自然の流露で將軍が如何に我が建國精神の體者得たる

北京  
 日使館  
 本庄繁  
 二月十日

二月十日

本庄繁

高鍋日統親下

將軍陛下の御勅命

仰せ有らば一統御儀、奉

答之、公使館別荘

御座り申す

2  
 毛如廟三々及る業方面  
 一為貴又且早一肉經多  
 増子一し又少業示  
 一讚文ノ名前保安海ノ后  
 一ハラン中華氏大之仰  
 一ハ為ス下ハ張作霖ノ共  
 一旨何也且識キヤリ如言  
 一未<sup>伊補</sup>来常<sup>伊補</sup>也<sup>伊補</sup>

2  
 一潜文代流リ貴大仰ハ  
 一致サレタ義ハ何如大主  
 一仰我書<sup>伊補</sup>能<sup>伊補</sup>正<sup>伊補</sup>物<sup>伊補</sup>ノ  
 一コ<sup>伊補</sup>ル<sup>伊補</sup>也<sup>伊補</sup>  
 一三咳喇<sup>伊補</sup>流<sup>伊補</sup>玉<sup>伊補</sup>頁<sup>伊補</sup>三<sup>伊補</sup>業<sup>伊補</sup>流<sup>伊補</sup>商<sup>伊補</sup>知<sup>伊補</sup>  
 一出張ノ事ノ<sup>伊補</sup>未<sup>伊補</sup>夕<sup>伊補</sup>確<sup>伊補</sup>定<sup>伊補</sup>  
 一廿二<sup>伊補</sup>日<sup>伊補</sup>尾<sup>伊補</sup>ノ<sup>伊補</sup>正<sup>伊補</sup>乃<sup>伊補</sup>何<sup>伊補</sup>レ<sup>伊補</sup>西<sup>伊補</sup>三<sup>伊補</sup>

日中  
清の果は先人の血に在る

今日代議士生如素

今日代議士生如素

今日代議士生如素

今日代議士生如素

今日代議士生如素

ハ

只暗洲沈王自身ハ海自ク

希中望吾等ハ其北京

政府側ニテハ何トナク躊

躇ノ色アリ張作霖道

接漢ニモ亦ニテリ別カ

可智ノ意見ニ在リテハ

其内閣総理潘復ニ



驕馬大抵り、世園、妙  
又支那漢人種、  
：耕こいんカ一才、  
ナシ

右書、  
雅法、  
等、  
ニ、

ハ、  
：  
目、  
ナ、  
ハ、  
言、  
ナ、  
信、



一、先考慮せし可く中  
 二、向例の有之り  
 三、夫の角の生は此際人々  
 天の下の事と合はる世に  
 汗又日本例に之る多  
 而は咳喘必し此介し  
 候も有之る事又心難  
 大いなる道なり

一、咳喘必し液目より出  
 力可き一は其古る情  
 二、咳喘必し液目より出  
 三、咳喘必し液目より出  
 常者例懸念の由り日本  
 力全き利用に也





高 錫 大 都 德 塔 著  
 蒙 威 上 將 軍 陸 軍  
 上 將 督 辦 山 東 軍 務 張 宗 田  
 務 兼 制 直 隸 軍 務  
 務 兼 聯 軍 總 司 令

# 智 年 一 中

る 贈 を 書 本 し 贊 を 設 建 の 塔 業 供 大 軍 古 蒙 は 軍 將 昌 宗 張

## 滿蒙平和郷建設運動記

(昭和三年)  
 (於北京)

蒙古カラチン王會見及び同王招待交渉顛末

### ▼ 蒙藏院總裁としての カラチン王

予は濟南事變突發するや宗門の管長より支那派遣軍慰問布教を特命されたので(昭和三年)六月上旬より半ヶ年に涉りて、青島、濟南、天津、北京奉天方面の皇軍に説教し兼ねて内蒙古にも日本建國の平和的使命を宣傳した。更に進みて外蒙古の方にも布教する手順で居たが、ホロンパイルの獨立騒動が突發したので、軍事探偵の疑惑を受ける

の虞があるので、八月十六日の夜半チチハルより汽車に搭してハルビン方面に引返し、來年五月を期して入蒙の事に變更し、派遣軍への布教も兎に角一應相濟みこゝ一日の閑を得たので予の宗教上より觀たる否信念の命するがまゝ運動しつゝある大陸教策上の一端を叙してみたい。題は一名「蒙古カラチン王と語る」とあるが實は之れが大問題で若し張作霖氏でも存命して居たならば必ずや問題をひき起すべき談柄なのであるが、何にが幸ひじややら實に人生は塞翁が馬の本場たる東三省の主

人公張氏に關する問題だけに層一層、興味があるのだ。

『中華民國蒙藏院總裁』！然り『中華民國』、名は中華民國でも名に應はしからざる事實を呈露し來れるが由來支那である。曰く袁世凱の『中華民國』曰く國民黨の『中華民國』、曰く張作霖の『中華民國』等々、その時代、その人によりて意義を異にする。之のカラチン王の上に冠されたる『中華民國』の啓示する所の教訓はまことに複雑で、實はその事を説明する事それ自身が一種の支那論が成立するのである。

果然、彼れカラチン王は、中華民國大元帥張作霖氏の死と共に『中華民國蒙藏院總裁』の地位を叩き落され、今や國民黨の蒙藏部の支配に移された。蒙藏院とはお寺の名のやうだが實は行政上の名で『蒙』は蒙古で『藏』は西藏で蒙古と西藏の總督とも謂ふべき官職である。予が何の必要ありて彼

を招待せんとしたが。何等の理由によりて彼れと會見したが。問題は六百年前の元寇の國難として、蒙古襲來の大難として悲痛なる歴史を物語る筑前博多灣頭志賀の島に予等同志が蒙古軍大供養塔を建立したる事に關係する。

### ▼東亞信交運動の第一線

日本人としての我等の祖先をさんざ虐殺したる惡むべき蒙古の賊軍の爲めに而も被害者の日本人として蒙古軍大供養塔を建立するとは物好きにも程こそあれど、大に攻撃する日本人もあつたが、兎に角三月七日を中心として之が落成除幕式を前後一週間に涉りて左記の如く執行した。今、便宜の爲めに當時のプログラムを紹介する。

蒙古軍大供養塔落成  
一、除幕式 三月七日午前十一時、志賀の島建塔の地點に於て(同日朝九時、博多築港出船)

### 二、元寇役、日清役、萬靈供養大法要

彼我兩國殉難戰死者追弔大法要を修し以て東洋平和の大義を光顯するの盛典は三月八日午後一時博多東公園元寇紀念館に舉行以上二大盛典は日蓮宗管長大僧正酒井日慎祝下大導師にて親修

### 三、管長御親教、七日夜橋口町於勝立寺、同日は齋藤福岡縣知事、島田宗會議員も出演、管長博多驛御着は六日午前十一時十六分、八日午後六時二十分博多驛御出發御歸京の事

四、東亞親善大講演會、七日夜於勝立寺、八日夜東公園於元寇紀念館、講師は管長御一行は七日に出演、他は七日八日に涉りて出演の事

出 演 者  
日蓮宗管長 酒井 日 慎  
同宗會議員 島 田 勝 存  
福岡縣知事 齋 藤 守 圀

### 六、蒙古展覽會及び大講演會

蒙古展覽會、東京「亞細亞大觀社」後援  
於福岡縣商品陳列所(天神町)入場無料  
三月五日より十日迄、毎日午前九時より午後四時まで開會

福岡市長 時 實 秋 穂

陸軍中將 白 水 淡

蒙古前赤峰領事 北 條 太 洋

蒙古喇嘛 バトモンホ

蒙古青年代表 韓 紹 宏

パブチャップ將軍合息

勝立寺住職 新 野 正 觀

蒙古特命開教使 高 鍋 日 統

元寇紀念館主監 山 田 良 雄

五、滿蒙活動大寫真會(滿鐵會社より派遣)、三月六日夜西中洲福岡縣第一公會堂、同夜講演

『滿蒙開發の世界的使命』……高 鍋 日 統

入場無料

六、蒙古展覽會及び大講演會

蒙古展覽會、東京「亞細亞大觀社」後援

於福岡縣商品陳列所(天神町)入場無料

三月五日より十日迄、毎日午前九時より午後四時まで開會

右開會中毎日『滿蒙關係大講演會』

五日午後一時より

蒙古襲來護國の大マンダラ

高鍋日統

北條時宗と供養塔(上)

陸軍軍醫官 武谷水城

六日午後一時より

日蒙大騎馬旅行に就て

騎馬 監督 中屋中佐

六百年前入蒙の英雄僧日持上人論

高鍋日統

北條時宗と供養塔(下)

武谷水城

七日午前九時より

蒙古事情

亞細亞大觀社長 井田保雄

八日午前九時より

滿洲事情

亞細亞大觀社長 井田保雄

九日午後一時より

蒙古と喇嘛教

高鍋日統

蒙古軍大供養塔建立由來

勝立寺住職 新野正觀

十日午後一時より

蒙古軍供養塔の建立所感

中學修猷館長 白坂榮彦

蒙古襲來と日蓮聖人の態度

元寇紀念館主監 山田良雄

七、東亞親善大懇親會

三月九日午後四時より、西中洲博多商工會議

所樓上にて知事、市長、商工會議所會頭、蒙

古軍大供養塔發起人、各新聞社等官民合同主

催

右は蒙古人、支那人、日本人等の東亞親善騎乗者及び蒙古軍大供養塔落成祝賀會等を兼ねたる大懇親會に付奮つて出席を歓迎す、出席希望者は左記事務所に申込み事

福岡市橋口町(勝立寺内)

蒙古軍大供養塔事務所

電話福岡二八四三番

予等があらゆる非難を突破して建設したるだけにその影響する所はいろいろでその筋からは二月四日附を以て左記の如き書状を以て適當の時期迄除幕式の延期を希望されたほどであつた。文に曰く『拜啓陳者來る三月七日博多に於て舉行せらるべき蒙古軍供養塔除幕式に蒙藏院總裁喀拉沁王及喇嘛教高僧招待の件に關し電報を以て在支那芳澤公使に照會致置候處今般同公使より右招待は全然宗教的動機に出でたるものとするも支那側に在りては目下我方の對滿蒙態度に關して極めて神經過

敏なる折柄右總裁の渡日は支那官民に誤解を生ずる懼れもあるに付可成三月七日の除幕式を相當の時期迄延期する方好都合と被思料候も若し諸般の都合上延期し難き事情あらば喀拉沁王一行の内地巡遊の地點を限局し且講演其他目立ちたる催を可成避くる事に致度き旨の回電に接し候右に關し主催側の意嚮承知致度芳澤公使へ回電の都合も有之候條至急何分の儀御回示相成度此段申進候敬具』(之の書状は予がかねて北京に蒙古王を招待のため出張を依頼したる前蒙古赤峰の領事北條太洋氏に送られたるものである)予は當然の順序として予が特に筆したるその建設の趣意書の大要を左に掲ぐるの必要がある。其のに文曰く

▼日支共存の世界的使命

立正安國の聖者日蓮大師、弘安四年五月十五日

甲州身延山頭敵國降伏の一大祈念裡に靈筆を振つて圖顯し給へる護國の大本尊（俗に蒙古退治の大曼陀羅と稱せるもの、正式本尊）に高く標榜するに『我此土安穩天人常充滿』の聖文を以てす。更に天地の公道人倫の常經にして如來神明の統一的靈名たる妙法七字の玄題下の正中に特に『天照大神、八幡大菩薩、聖天子金輪大王』を奉安し、之を法國冥合的に結要して『諸天晝夜、常爲法故、而衛護大日本國』の十有五字を特筆大書し給へり並に是れ神武聖天子の『六合統化八紘一字』てふ建國の大理想を蒙古襲來敵國外患の危機に際しての開顯の一大光顯なりとす。大日本肇建の大理想は、娑婆即寂光の佛國淨土世界眞正平和の理想郷を實現せむと欲するに他あらじ。而して之を實現するの第一歩は、日支共存を確保するに存す。仰げ諸冊二神大八洲の綏撫經營と、天照大神、月讀尊、素盞鳴尊の三貴子分統關大の雄圖は實に這裡

玄妙の一大啓示たらずとせむや。是れ此の神謨の玄意中には、日本亡びて支那存せず、支那倒れて日本立たざるの微妙なる運命を活斷し給へるを拜すべき也。即ち日支相互の地理的關係、地形そのもの、先天的に策勵せる不可避の一大事の因縁たらずむばあらず。更に之を、人種學上より、民族學上より、言語學上より、經濟學上より、人口問題より、將た國防の機微より、綜觀し來るも日支は畢竟一心同體大亞細亞民族の中軸と成りて世界眞正平和實現の爲めに中心勢力として、世界の文化に貢獻すべき玄妙雄偉なる一大使命を有するを知るべし。日支の親善共存の事たる豈に單に同文同種と言ふが如き情誼的の觀念にのみ求むべむや。

▲蒙古襲來と志賀の島

日支すでに同心一體の同胞たるや斯くの如くそ

れ微妙の一大因縁を有す。然るに兄弟牆に閨ぐの通患は遂に六百數十年の昔に於て支那北方の強たる大元蒙古國襲來して我れを侵すの一大慘事を演せりき。幸にも如來祕密諸天神通の妙力は晝夜常恒に妙法正義の爲めに、國家を衛護すてふ誓願の儼として存する在り。遂に『ものゝふの心つくしの果てにこそうへ神風のふきおこりけれ』てふ如來神明折伏の神風は顯現せられにき。博多灣頭志賀の島は實にその敗殘大多數の敵首を刎ねたるの遺蹟たるは勿論、弘安第二回襲來戰闘の中心舞臺として最も顯著なるの地點たり。然も之を行ふや敵が我れに加へたる酸鼻暴虐の彌り殺しなるに反して、我れのそれは一刀ツボリの快風下に安祥として臨終せしめ畢んぬ。げに『やまと心を人間はゞ蒙古の首を切りしものゝふ』とも稱しつべきか。

秋雨六百數十年の今日に及ぶも未だし。乃ち怨親平等順逆一如一切衆生皆成佛道の大王經乘を以て眞實なる回向の活事業も意義ある供養の活修行も實現せられざりき。言はゞ『首の切りツ放し』として今日に至れるが如きは、斷じてやまと心の徹底せる發露とは稱し得べからざる也。

▲蒙魂排日の妖鬼と化すか

今や日本は世界的孤立の危地に陥り。支那亦た内亂紛擾の極に立ち。日支共に内憂外患交々臻るの情勢に在り。彼の通例唱道の日支共存とは即ち刻下に於ては正さに日支共救てふ新モットーとして絶叫せざるべからざるに至れり。此の秋に際し支那人に依りて行はるゝ排日運動の猶熾まざるが如きは何等悲惨にも亦た珍奇至極なる國病ぞや或は是れ蒙魂排日の妖鬼と化して然るなきを保すべけむや。茲に世界眞正平和の中心妙力なる大日

養濟度救護の一大功德事に至りては。あはれ春風

本國衛護の大本尊に啓發されたる吾等同行相謀り此の蒙魂を回向濟度し我が護國汎神中に攝化轉生せしむべく。志賀の島に一大供養塔を建立せむとす。而して舊時稱し來りし『蒙古首切り塚』を轉稱して『蒙古軍供養塔』と銘せむとす。蓋し是強露を北方支那滿蒙に征して、支那白人分割の端を救濟し給へる明治聖天子の『國の爲め仇なす仇は摧くともいつくしむべきことな忘れそ』との慈悲仁愛の聖意を光顯せむとの微衷に出づ。法華經に曰く

『毎に自ら是の念を作す何を以てか衆生をして無上道に入らしめ速かに佛身を成就することを得せしめん』又曰く

『願はくば此の功德を以て。普ねく一切に及ぼし我等と衆生と皆共に佛道を成せん』斯くて蒙古退治の大曼陀羅は日支共榮の大本尊たるべく此の大本尊は以て世界真正平和を任持すべき中心妙力と

しての一大天照の光明を發揮し給ふべき也。

▼國際聯盟の實行は博多より

以て我等同志の建塔の趣旨を見るべきである。右趣旨の教訓する所を世界の大勢と申したいが、先づ之を極東の現狀に比照し來るの時、そこに如何なる警策があるか。六百年前に於ては蒙古(實は蒙古漢民族朝鮮民族共同の軍隊)と日本とが戦争と申す大喧嘩をやらしたが、世界の八分通りをアングロサクソン民族たる英、米を中心としての歐州人によりて政治的に支配されつゝあるに對し、亞細亞民族、就中日支の兩國としての世界的使命が如何に玄妙であるかを一考し來るの時に、本事業は形は數萬圓の小事業たりと雖もその精神や、その本質や、國際聯盟の實行と稱するも決して過言にあらざるを信するものである。予はその趣旨の啓示する所に隨ひ日本としての世界政策上の基調

とも謂ふべき東三省に宗教上より平和郷を建立するの要ありとして、蒙古王を右落成除幕式に招待して提携信交の要あるを痛切に感したのである。而してその前程の仕事として先づ張作霖氏と前後二回も會見して宗教上よりの提携運動を起したのであるが。張氏一度び大元帥として北京の中原に乗り出すや國際的に微妙複雑なる事情もあるたらうが、どうやら彼はカラチン王の渡日を希望せざるやの疑ひが起つた。予は蒙古王渡日招待の發願者としての責任上、事の經過を叙して將來の光明に資したのである。而して予が蒙古王との會見は前後三回であつたがその前張作霖氏が予に對して如何なる一札を入れたるか、否、宗教運動上、彼張氏は如何なる文書を送れるかを公表して、よりますす。東亞復興の大義に資したのである。

▼張作霖氏より予に送れる讚文

予が以上の趣旨を説法すべく張作霖氏と會見したるは大正十一年と大正十四年の二回で、何れも奉天城内張氏の本邸に於てあつた。而して大正十三年張氏の軍事顧問本庄將軍(現第十師團長本庄繁中將)が楊宇霆氏を同伴して東京に來られた時に、予は兩氏と帝國ホテルに會見して右蒙古軍大供養塔建設の趣旨を説きて賛成を求め且つ氏等を通じて張作霖氏に『大日本志賀島蒙古軍供養塔讚文』を贈られん事を依頼したる所。兩氏は快諾され張氏も必ず諒承せらるゝ事であらうと申された。氏等の御配慮は空しからず。爾來一二ヶ月内に左記の如き讚文を送附し來つた。

その讚文に曰く

卓なる哉大慈氏。法身塵界に遍く。普く四天下を囑て一 가족視を作し給ふ。冤親愛を論するに足らん。平等にして差別無し。何の意ぞ忽必烈。荒海を渡り雄師を興し。諸の健兒を誡せらる。荒

原血長へに碧なり博多の大海灣。往々にして鬪  
 體哭す。今に至る迄六百載。遺塚多く湮滅す。  
 大徳高鍋師。(塔を起て供養する者と訂正した  
 し)至仁幽顯に被むる。此の浮圖を改建し。冥  
 魂依託を獲。並せて信仰の誠に藉り。廣く和平  
 の福を造し。亞細亞洲をして。蒸として太和の  
 宇と爲らしむ。我れ大師(高鍋大師との意なる  
 が故に大師の二字を起塔と訂正したし)の意を  
 知る。請ふ爲に其の濫を宣ん。大和平を謀らんと  
 欲せば。首として人我の相を除く。衆生我有  
 を執するも。究竟我安にか在る。彼の虚空の雲  
 の斯須にして漸滅に就くが如し。四大本皆空。何  
 ぞ一枯骸を論せん。枯骸も亦虚空。敵我何ぞ  
 嗔せん。此の大智慧を以て。宏に諸の鬼趣を拯  
 ふ。我も無く敵人も無し。一切皆度脱せん。此  
 の悲愍の心を推して普く東亞に及ぼし。和平を  
 謀んが爲の故に。無上の法を開顯す。煌々たる

法華の文。塔畔森として布列す。宏に日蓮宗  
 (この三字を供養の意と訂正したし)を闡き。  
 天人盡く歡喜す。此の塔は毀つべからず此の願  
 は終訖すること無けん我れ今此の讚を作り。雨  
 淚胸臆を霑す。願くば此の因縁を以て脩羅の劫  
 を消滅し。中日同種族。文教汎濫に通せん。庶  
 くば釋尊の慈を體し。左右長く提携し。順逆一  
 如を證し佛道に回向し。前路共に蕃榮にして。  
 寶祚永く替ること無けん。

(中華民國東三省保安總司令張作霖書)

▼張作霖氏と第二回の會見

右の讚文は建塔の精神を光揚するに眞に堂々乎  
 たる文章として予は感謝した。而も其文中、佛教に  
 關する専門語の使用等より見て名は張作霖氏であ  
 るが、多分奉天皇寺(ラマの一本山)の大和尚が  
 作つたものであらうと推察して居たが。(予が大正

十四年ハルビン方面から歸京の途次、釜山ホテル  
 で于沖漢氏『當時東三省官銀號の總裁ハルビン特  
 別行政區長官』と會見した時始めてその文章は  
 于氏の代作である事が判明した。于氏はナカノ  
 の學者で、殊に佛教學には専門家素足の先生であ  
 る。然し何人の作であらうと。張氏之を承認し署  
 名して、寄贈し來れる以上、氏は張氏の意を承け  
 て作つた事は勿論である。予はその年(大正十四  
 年)張氏に會見してお禮を述べた時に、張氏は  
 『お氣にいらぬか知らぬが。貴下等の御精神を體  
 して作らしたので私の精神も亦説きつくされて  
 居ると信じて居る』  
 と申された。その時に予は東洋平和郷建設の原理  
 を。日蓮大師の直弟子日持上人といふ英雄僧が六  
 百年前滿蒙に進入された史實の啓示する點から説  
 法して愈々供養塔が落成したならば張氏は勿論  
 蒙古人種を代表する大官も參列せらるべく何分の

御配慮を依頼したる所、張氏は

『自分は非常に多忙であるから確に御約束は出来  
 ぬが、蒙古カラチン王の如きは適任者と信ずる  
 から渡日するやう心配致しませう』  
 と心から同情された。

▼蒙古王渡日運動の經過

さて、蒙古軍大供養塔の大部分は昨年(昭和  
 二年五月)を以て落成した。本年二月中には長さ  
 十六間に及ぶ鐵骨コンクリートの階段等も落成し  
 三月七日を中心とし前後一週間に及びて、最も  
 盛大なる除幕式を舉行した。その盛大であつたと  
 いふ事は凡そ三大理由がある。その第一が吾等同  
 志が建國の平和的使命によりて敵軍の爲めにすら  
 供養塔を建立したといふ事と、その第二はその除  
 幕式に間に合ふやうにロシアと支那との國境たる  
 滿洲里を起點として滿洲里より博多へ、博多より

東京へと三千餘哩の騎馬隊を組織した事と、その第三は六百年前に攻めて來たる大元蒙古王の末孫たるカラチン王（名はコンサンノルフ職は中華民國蒙藏院總裁）が參列するといふからである。而かもカラチン王の參列を確むる爲め予の知人今里代議士が北京に行かるゝの機會を利用して王に會見を依頼したるに氏よりの返書に

拜啓北京にては張作霖氏始め政府側にも充分其の進捗の模様を話し一方政府側は現蒙藏院總裁たるカラチン王に數回會見仕候當方より正式の招待状を送ると同時に蒙古王の會議を開き蒙古王の代表並に喇嘛の代表を參列せしむる事に約束致置き候右御含みの上御準備の程願上候

とあるくらいであるから予は必ず來るものと信じたるは勿論、かねて予は前蒙古赤峰の領事北條太洋氏の御配慮で外務省とも相談して何かと便誼を與へらるゝやう運動の結果外務省の文化事業部長

（子爵岡部長景氏）よりは電報を以て  
『カラチン一行は三日北京出發陸路福岡へ直行の豫定なる旨當方へも電報ありたるに付補助規定の半額は同地へ電送手配中、同王今回の渡日は純然たる私的旅行なれば新聞等に、大袈裟に報道せられて迷惑掛けざる様注意ありたし。岡部文化事業部長』（二月二十八日附）  
而して其後（三月一日附）外務省（書記官岩村成允氏）よりの書翰に曰く（カツコ内は日統の註釋なり）

「拜啓今般來邦の蒙藏院總裁カラチン王貢桑諾爾布の一行は北京雍和宮（ラマ教の大本山にして僧侶四百名以上在住）の監督にして經文の教師たるラマ教の高僧芬森蘇巴外、秘書、通譯各一名、從僕二名合計六名にて三月三日北京出發、滿鮮經由の趣に有之候に付奉天、安東、朝鮮總督府及福岡知事等へ夫々本省より通達方取扱置

候間右御了知被下度尙貴下到着以後の旅行日程可相成速に御通報被下度願上候 拜具

三月一日

外務省 岩村成允

高鍋日統師待史

とある通り予としては、以上の公私の手紙や電報を信ぜざるを得ないのである。何にしる東亞の平和郷建設の國際的の大きなお祭りであるから、極力宣傳につとめ、あらん限りの廣告法を講じたのである。更に北京日本公使館附武官本庄中將から

『カラチン王渡日の件、昨夜確定せり一行は王の外、秘書通譯各々一、從僕三、計七名にて朝鮮經由直行するも來月二日乃至三日には當地を出發せざるべからざる故、迎の者を至急派遣せられたし。一行の旅費携行の事、念の爲め本庄』との電報も飛んで來たので予は北京まで迎へに飛

んで行きたいは山々であるが、博多の方が一日片時も離れないので、前蒙古赤峰の領事北條太洋氏に北京まで御足勞を願つた。

### ▲蒙古王の病氣診察

ところが不思議。何んたる事ジャ。何等の皮肉だ。三月の七日が落成除幕式であるのに三月の二日の夜半一時ごろに在北京の北條氏からの急電に『カラチン病氣行かれぬ』とある。

博多福岡は上を下への大騒ぎでの大準備中にこの電報を受取つた予の心はどうだ。若しこの電報を公表でもしやうものならば、數年來「蒙古王來」々々々々で待ちに待ちての大準備であるので、大數の同志信者は勿論、市民は何んと思ふであらうか。ガツかりして腰が折れて仕舞うであらう。

予は、この電報を先づ絶対秘密の條件で同じく發起人の一員たる新野正觀師に夜半、予の宿所た



る博多ひさや旅館に来てもらつてその顛末を打明け二人の坊主頭をつきつけて相談したが何とも仕やうがない。予は之の電報をいだいて熱い涙がポロ／＼と流れた。夜はほのぼのと明けても予等二人の心は暗の夜である。王の病氣は予等には何んとも解しがたい。あゝその病氣とは如何なる病氣ぞ？これ予が今回北京に乗り込みて王の病氣を診察した事情である。

予が今回、ペキンでカラチン王に會見したのは前後三回であつた。乃ち第一回は七月十二日で北京日本公使館附武官建川將軍に案内されて王府を訪問した時と、第二回は同十四日王と肅親王の王子憲立氏等のペキン東興樓に於ける招待の宴會と第三回は同十八日王府へ答禮を兼ねての予の説法であつた。第一回と第二回の時は他に人も居たので無遠慮に切り込んでの談論もせず。さしさわりの無い東亞振興に關する意見の交換ぐらいであつ

たが、第三回の時は支那語の通譯を依頼した同志の一員井上義澄師一人のみを同伴して最も痛快に最も無遠慮に説法した。

▼ウソつきの山師坊主とは何ぞ

然り予は今日まで積り積りし東三省問題や六百年前に日持上人が蒙古に進入された大理想等を無遠慮に説法した。王としても意見も十分にある事は勿論であるが、マアそれを聞く事よりも予のそれを聞かしたむるのが目的であるから此時とばかり公表し得ざる事まで説法した。而してその説法しつゝある玄妙なる機微の「北條太洋氏よりの電報『カラチン王病氣行ケヌ』とある所謂病氣なるものを診察し得た。苟しくも王とも言はるゝ人にしていざ鎌倉といふ土壇場に及んで『病氣』てふ理由の下に渡日中止を敢てしたのは予はテツキリ國際關係の生んだ急病と察したが案の如くその然

る所以を知り得た。

殊に王の紹介で北京雍和宮の管長（北京に於けるラマ教大本山の法主）と會見した時に管長は予の顔を見るや否や

「この三月博多に於ける蒙古軍供養塔落成除幕式の際にはカラチン王も非常によろこんで渡日せらるゝ都合であつた所、國際的の事情で中止する事に成つたのは貴下等に對して實に何んとも申上げやうもない事でした」

との問はず語りは正に這裡の消息を道破したるものである。予は茲に於てか本年二月二十三日附北京の某將軍より予に宛たる手紙はその複雑なる國際的事情を證するに足るものと信するから、之を公表するの必要があるのだ。否予を目してウソつきの山師坊主と攻撃する人々の誤解を釋くてふ個人的立場よりも事、國際的祭事についての問題であるから更らにその書翰を紹介するの必要がある

と信するのである。

「拜啓カラチン王渡日の件御焦慮の事と存じ小生に於ても日々當事者に督促致居り大元帥（張作霖氏）には別段問題なく總理潘復躊躇し蒙藏院副總裁差遣可然杯申居り候へ共、遂に之を説得し、大元帥の裏面的總參謀長たる楊宇霆をも同意せしめ候然るに政府より命令するは不可能なりとしカラチンより休暇願を出し個人の資格を以て行く事と爲りし處、カラチンは自分より請暇を申出づる事は官憲に日本と特種關係を疑はるゝ嫌ある故政府より請暇を出せず渡日可なりとの内意を自分に傳ふる様取計呉れとの事にて御互支那人の特性發揮困り居り候、併し此點は双方を説き付け遂に總理秘書長より内意をカラチンに傳へ同王（カラチン）より去る二十日漸く請暇願を國務院に呈出致申候然るに又々國務院（我内閣）は大元帥の裁可を請はざるべからずと

申出でし爲、萬一の場合を懸念し今以て確定的の電報を出し兼ね居り候、國務院にては本二十三日晚には必ず大元帥府に右裁可を受くべき公文を送る旨申居候、昨日も大元帥府に赴き國務院より右公文参り次第大元帥の裁可を得る様督促を兼ね懇囑致置候間兩三日中には確定可致存居候得共右延引の次第一應御通知可申上、又大元帥裁可は形式にて最早問題なしとは存居候得共確定次第打電可致候

尙カラチン王は渡日の場合は隨行者として秘書一、通譯一、從僕一、喇嘛僧一、同ラマの從僕一、を連行く旨申居候  
尙カラチンの請暇日数は往復二十日間と相成居候  
右の事情貴僧より北條氏へ御傳達願上候  
右の次第にて時間の關係上北條氏の來支の餘裕無之候はゞ右一行の旅費の一部公使館より借用

して行くの外なしと存候如何のものに候哉果して左様の場合には小生よりも公使館に可申出候得共外務省より此旨一寸當地公使館へも來電ある方可然乎とも存候不取敢右事情如斯に候敬具  
二月二十三日 ○ ○ 生  
以上の手紙を一讀し來る時、如何に張作霖等の漢人と蒙古人との民族的、また政治的關係の微妙であり複雑であるかを推知し得べきである。是れ即ち王の渡日中止の事情を以て予は國際的珍病と斷する所以である。

▲ 宗教ますく盛にして國亡ぶ

予は北京のカラチン王府に王と第一回の會見の時  
「閣下、閣下が渡日不能の爲めに、拙者はいよいよ以て日本の山師坊主と成りました」

と。この皮肉千萬なる一言にはさすがに外交辭令に巧みなる先生達も一言半句の辭も出し得なかつた。否予は彼等が予の面目を丸つぶしにした事を攻むる事よりも獨立の國家を有せざる民族なるもの、如何に悲惨なるかをむしろ氣の毒に感じたのである。予はしばしば北京あたりのラマ寺の情態を視察して、如何にもその寺々の坊主共の御經を讀む事はお盛んであるが、その聲は予の耳には亡國の聲としか聞き得ない。如何に讀經坊主の數は澤山あるもそのお經の心を國家の上に活かす事を知らずに居ては釋迦の心を殺すに等しいのだ。日蓮大師は立正安國論に

「夫れ、國は法に依つて而して昌え、法は人に因つて而して貴し。國亡び人滅せば佛を誰か崇むべき。法を誰か信すべけんや。先づ國家を祈りて須らく佛法を立つべし」

と、北京のラマ寺でも蒙古のラマ寺でも一寺に付

何百人といふ多數の坊主が居るが、「國家を祈る事」を知つた坊主が何人居るか。  
日蓮大師また教へて曰く  
「我弟子等、出家は主上上皇の師となり、在家は左右の臣下に列せん」  
と、之れは弘安元年の語即ち第一回蒙古襲來後の語で日蓮の徒は皇室中心の内閣を造れとの教である。國策を指導する程の主義主張、見識がなくてほんどの坊主とは言へないのである。蒙古カラチン王は北京の大本山雍和宮の監督であるが、その管下の坊主共は何をして居るのか。  
苟しくも蒙古王と稱する先生が漢人政府にビク／＼せなければ身の安全も保持し得ずとありては、御先祖のシンギスカンに對し何の顔ありや。予の説法の大綱は民族的自覺を促す事と、日持上人入蒙の大理想上より開顯せる滿蒙平和郷建設の説法であつた。それに對する王の意見の如何

なりしかは予は今言ふに忍びたい。

### ▼ロシアの赤化政策と蒙古

予は、何等の憚る所はない。更に進んで蒙古に對するロシアの政策を論じ、『王は安閑として居らるゝか』と喝破し大體左記の意見を述べた。

ロシアは、世界の赤化革命の目的を達するが爲めに、先づ以て外蒙古の獨立てふ美名の下に、遂に之をその聯邦の一に加へた。否、ロシアの領土とすべく最も巧妙老獪なる手段を取つた。王はナゼその時に奮起せざりしか。王よ、見られよロシアは更に進みて、南方支那政府に人物や金銀武器等を供給して、今や着々としてその野心を實現せしめんとしつゝあるにあらずや。王は之を何んで見らるゝか。ロシアの豫定の行動にして、着々成功するといふ事は支那本土は勿論、滿蒙を領土的に將た思想的に、支配せんとするに等しいので

ある。支那と滿蒙は日本と共存するにあらずんば赤露と白鬼の爲めに亡國の運命に導かるゝのである。

之れ日本の興亡に關する重大事件で、或は日本も爲めに亡國の悲運を來すやも知れないのである。これ東洋の一大危機ではないか。東洋の一大危機とは、實は蒙滿のバルカン化である。バルカンは國際的世界的三大噴火口の一で、歐洲のバルカンの噴火が世界大戰を産みたるが如く、滿蒙のバルカン化は即ち是世界大戰の導火線となるのである。而して滿蒙が日本の對世界政策の根本基調を成す重要地帯である事を思ふの時に、東洋の平和を確保する事を以て直に世界平和の大義に參する所以の玄妙雄偉なる使命を有せる日本として斷じて之を默過する事は出来ないのである。

換言すれば、日支共存東洋親善以て世界平和に貢獻すべきを現代對外國策の基調とせる我が日本

としては、之の國策を破壊せしめむとするものが若し米であり、露であるならば日本は須らく米露と開戦すべきものである。若しそれ支那がその破壊の獅子身中の毒虫であるとするならば、日本は彼れに對して大慈悲の殺生を斷行すべきである。

### ▼北の根の國隆ゆらん

王たるものは自個の一小安全をのみ思ふ事なく日本と滿蒙との關係が、世界を平和にするか戰禍の巷に化するか、地獄にするか、極樂にするかの微妙絶大なる世界的使命を有する事を一考せらるゝの時、私等の蒙古軍大供養塔建設の聖業がもたらす崇高玄妙なる教訓に奮起し漢人どもの誤解を解くの態度を示さるべきであつた。

カラチン王閣下よ滿蒙の地を、今の儘に推移せしめむかあはれ赤露及び白鬼をして支那を根據地として世界赤化を極東、インド及び南洋諸島に行

はしむるものである。我等にして此際、奮起するなくんば、それは與同罪を犯すに等しきものである。予は歸朝の上は、ヨリ一層輿論喚起の運動を起すべきは勿論であるが、苟しくも世界の英雄ジンギスカンの血をうけたる王としては此際、斷乎として奮起を要すべきの秋である。日蓮大師は王の祖先忽必烈がその大軍を日本に派して無名の戰端を開けるに際し世界の眞正平和確保の聖天子金輪大王を中心し奉安したる敵國降伏の大本尊を顯發された。之れ俗に蒙古退治の大マンダラと稱する國體擁護の本尊である。之の聖天子とは太陽の三大徳性を歴史的に體現し給へるものにして世界平和の中心である。一大光明である。滿蒙も、支那も東洋も、世界も、皆悉くその聖天子を主權者とせる國家の御稜威の力によつてのみ本有の尊形を發揮すべきものである。之を王の故國蒙古に約し來らむか『日の本の御稜威の光りてりそひて北の根

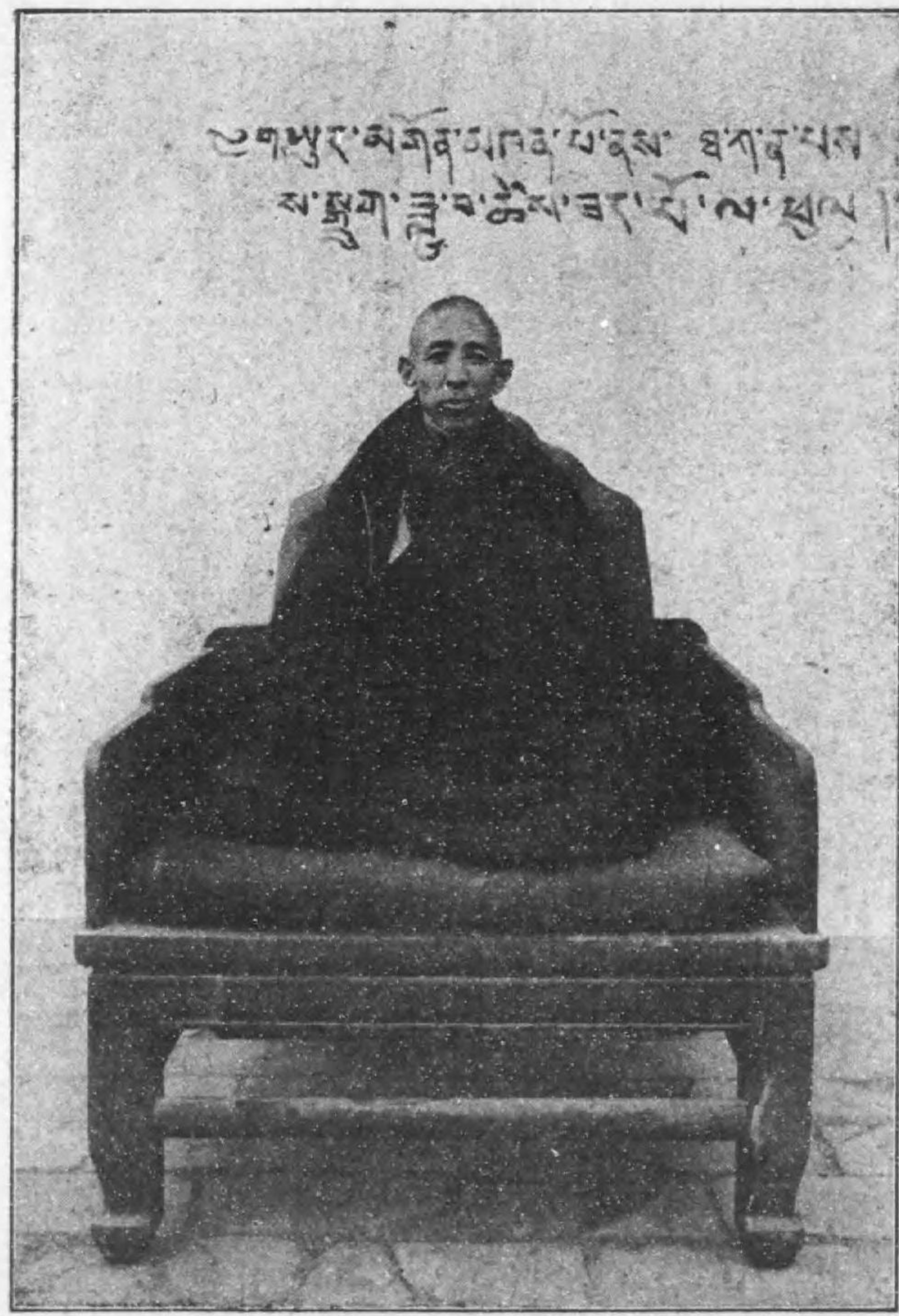
の國彌榮ゆらむ』とも申すべきである。之の歌は私の拙作ではあるが本春三月九日蒙古騎馬隊一行肅親王家一行、蒙古將軍バブチャツプ氏の令息ジョンジュリジャツク氏等を、敵國降伏の箱崎八幡宮に参拜せしめ、その御神前に新製の日本刀をさしげ、東亞信交、世界和平の祈禱を爲したる上その日本刀をジョンジュリジャツク氏に授與するに際し、氏をして聲高く御神前に三唱せしめたものである。王よ、之の歌の教訓する所、眞に雄大である。王の執るべき道は一に之の歌の中に存する。人、長壽なるも百年はまれなり。王たるもの如何に一身の安全を計るも餘命いくばくありや。王よ須らく奮起して東洋和平の聖業に参加し。ジョンギスカンの歴史をして意義あらしめよ。光明あらしめよ。予の無遠慮なる忠言には王も非常に感じた。その返答や果して如何。予は近くホロンバイルの獨立問題を論ずるに際し、之に對して點晴

的論斷を爲すであらう。因みに予が蒙古王に對する説法の原理は蒙古軍供養塔除幕式に際して参加各位及び一般に施本したる妙道誌上に公表せる「光は東方より」てふ論文に依つたから、之も併て近くせ紹介するの必要がある。(完)

### 日蒙交換留學生募集

國の將來をトせんと思ふれば現在の青年を見よ。予が日本の青年を滿蒙に將た支那本土に又その大陸の青年を日本に交換留學の計を立てたる所以のものは蒙古軍供養塔建設の大精神の啓示する活ける人間の寶塔を建設するに在り。此の寶塔や必ず世界和平の光明を發揮すべき也。志願の士は乞ふ左記に申込まれたし。

東京、内幸町一ノ五、統一社内  
高鍋日統



時長し見會に正僧大のマヲに宮和雍の京北で紹介の王ンテラカは予じ投相氣意果結るたし談會を神精本根の携提族民ヤジアてび及に同じ通を旨其に使公澤芳日即て以をるたし約を日渡に共と予は正僧大ら然、ガせ成賛てしとずらちに期時は使公にるため求を續手の日渡時其」く曰ガせ表を意賛に更使公にるたし押をメダと何如は春來ば事記頁一十五紙本。たつあて目駄も之、いあと「る依に勢情際國の(記統日)よせ照參を

# 蒙古王公說法要綱

一三八  
(昭和四年)  
於長春

## 蒙古王會議を點睛すべき滿蒙平和郷建設原理

予が今回、長春に於ける蒙古王公會議の機會を開顯利用して、來り會せる王公貴族等に教話せる要綱は乃ち次の如くである。

(第一)

立正安國論の啓示する

救蒙の三大精神

(1) 宇宙大生命の本尊を信奉すべし

——蒙古の現状を生めるラマ教の根本的

改革原理

(2) 理想的國家の王道に一如すべし

——滿蒙平和郷建設の原理、第三帝國主義光顯の妙道

(3) 道義的民族の膨脹を期成すべし

——徹底せる蒙古民族の優生運動と出雲大社の啓示せる日蒙青年提携の急要

(第二)

大元蒙古の國主忽必烈が西藏よりラマ教を輸入せる事情及びラマ教が蒙古の現情を招來せるに對し蒙古民族は何事を自覺すべきか

——宗教益々盛大にして其國彌々衰微せる皮肉なる現情を觀て如何なる教訓を受けたるか。蒙古の現情に約したる四個格言の玄釋

(第三)

蒙古襲來護國マンダラの現代日蒙關係と、東亞の現情と、世界の大勢への啓示教訓

——日蒙信交の第一道程より日支共存の第二道程へ。日支共存の第二道程より亞細亞復興の第三道程へ。亞細亞

復興の第三道程より世界平和の大道への前進運動を最も明快適切に教訓警策するものは蒙古襲來元寇國難の際(立正安國論唱道の聖者日蓮大師に依りて弘安四年五月十五日身延山頭に於ける世界平和の大祈禱裡に)開顯されたる護國マンダラなる所以の説法

(第四)

予等同志が六百年前、蒙古襲來、元寇國難の一大史跡たる九州博多灣頭(志賀の島)に於て昭和三年三月七日を中心として落成除幕式を舉行せる蒙古軍大供養塔の啓示教訓する日蒙信交、日支共存、東

## 洋平和運動の世界的使命

——特に日蓮宗管長大僧正酒井日慎殿下の「祭蒙古軍戦死者文」を演繹的に説法（管長の吊祭文は以て建塔の大精神を道破せる名文なるを以て左に紹介して参考に資する）

### 蒙古軍の戦死者を祭るの文

（原文は漢文）

維れ時昭和三年三月七日日蓮宗管長酒井日慎清浄の大衆と俱に香華茶菓の奠を具し、敬しく佛祖三寶の照鑑を仰ぎ、謹で平等大慧の妙典を誦し、以て大元蒙古軍戦死者の靈を祭る。曰く恭しく惟るに我祖の教を立て給ふや、閻浮をして同く一乘の妙法に歸せしめ、此の土をして直に寂光の寶刹たらしめんと欲するに在るなり

一四〇  
是の故に其の宗を唱ふるの始め、立正安國論を著して國家を諫め、其の中ごろは則ち衆難に當りて其の事を實にし、其の終りは則ち蒙古の事に及び玄猷を微詞に託す。一代の起盡懸つて斯に在り。蓋し智慧も其の惡を去ること能はず。威力も其の愛を全ふする能はず。其れ唯妙道乎以て群有を一善に歸せしめ、至仁を萬年に施すべし。是れ其の別頭の教化を振ふ所以なる乎。聞くならく蒙古の來る其の兵凡そ十餘萬、鯨鱸海を掩ひ、雞林野を蔽ふ而して忽ち颶風の起るに遭ひ一時に殲滅すと云ふ。嗚呼、何ぞ其の來るの壯にして、其の盡ること慘、且つ過かなる也。屍は博多の灣に漂ひ、骸は志賀の海を填む雲日晝晦ふして、幽鬼夜泣く。潮氣腥を帯んで、濤聲恨を吞む。悠々茲に六百有餘載、枯骸往々にして沙泥に委す。惟ふに其の師固より名有るに非ずと雖ども、其の兵何の恨ぞ。生きては血

途を踏み、死しては業海に沈む。弔祭至らずんば精魂何くにか依らむ。茲に本宗蒙古特命開教使高鍋日統勝立寺住職新野正觀及び有志縉素風に慈拔の意有り。嘗つて之が供養塔を建て永く其の靈を祀り、以て冥福を祈り、日支親善に資せんと欲する日あり。乃ち有志者と相謀り、縁を四方に募り、拮据經畫、漸く茲に其の完成を見、又此の大供養會を修するに至る。蓋し吾祖立教の主旨を體するなり。余が感喜曷んぞこれに加へん。今也世界各國皆平和を唱へ、凶を用るを慎む。而して猜嫌未だ絶えず。防備弭む無し。其の眞の和平を得る果して何れの日ぞ。若し吾祖をして在しめば將た之を何とか謂はむ。謹んで祖語を按ずるに云く、萬祈を修せむは一凶を禁ぜんには如かず。未だ國內の謗法を禁ぜずして、而して蒙古の恨無きを殺す。誠に感傷すべき也。嗚呼、仁忠惻怛、塞源伐根の意、千

歳の下、誰か之を仰がざらむ。金言一語、煌として光有り以て幽顯の二界を徹照し、濁末の闇を除くべし若し夫れ起塔の意は具に張氏の讃文にあり今特祖語の一端を擧げ、敢て靈位に告げ以て覺路の資糧に擬すと云ふ。願くば此の功德を以て、普く一切に及ぼし、我等と衆生と、皆共に佛道を成ぜん。又願くは日本乃至、漢土月氏一閻浮提同じく一乘に歸し、末法萬年盡未來際遠く妙道を沾し、寶土現前せむ。

### （第五）

蒙古の青少年を日本に招致留學せしむるの趣旨及び日本の青年を蒙古に派遣留學せしむるの目的

——之の日蒙青年交換留學の事は、今、長春に於ける蒙古王公會議に來り會せる蒙古王公貴族等に對する予の突

發的相談にあらずして、數年前から石の蒙古軍大供養塔が落成したならば、「人間」の蒙古軍大供養塔を造る必要ありと痛切に感じた事からである。而してその彌々具體的運動に従事したのは昭和二年十一月の「妙道」雜誌に左記の如き記事を公表してからの事である。之の記事は、その趣旨の一端を述べて置いたからこゝに註解の方便としてその大要を紹介するの必要がある。

予は本誌前號に於て「對支教策」と題して海外布教、就中、蒙古の開教に就いて一言して置いた今、その具體案の一として茲に「日蒙交換留學生」の件に關し一言したい。

予は先づ蒙古の青年僧（ラマ僧）と在家の青年

（就中、蒙古王族の青年）を日本に招致教養し。之に日蓮主義の信者としての日本婦人（師範學校女子醫學專門學校、産婆學校、女子大學の社會科、の一を卒業せる者）と結婚せしめて蒙古に送り込みたい希望を有して居る。日本に於ける教養に平均三年間を要するとせば、三年の未來には日本婦人を妻とするのであるから百人の日蒙信交の布教師が出来るわけだ。夫婦と成つたからには子が生れるのが原則であるから、數年後には

『男女交會の時も南無妙法蓮華經』

との日蓮大師の教訓を體した續種護法の佛子神胤がかりに一夫婦に付二人平均としても二百人出来る計算で、之をその親としての日蒙親交の夫婦と合計すれば四百人となる。その四百人が鼠算として近き將來の事を豫想するならば大變な世界平和の民族的中心が、北方亞細亞に延長さるゝ事になる。予のこの希望は、一見不真面目な申分のやう

だが、眞に亞細亞民族の統一を計圖し以て世界平和の大義を光顯せんとならば斷じて之の案を實行すべきである。

更に、日本の青年を蒙古に進入せしむる。その數は最少二十名としたい。之は予等同志の者が蒙古襲來の史跡博多の地に蒙古軍大供養塔を建立中で、本月はその第一期の事業たる大供養塔が落成し、近く除幕式の舉行に際し酒井管長猥下の大導師の下に彼我萬靈供養の大法要を修し、蒙古王も

之の盛儀に參列する事に運動したから、王の來朝を好機に萬事相談したいと思つて居る。之の日本の青年を蒙古の地に進入留學せしむる方法に就て諸種の案を有して居るが予は日蒙信交、日支共榮運動の都合上、單に蒙古のみに限らず有力なるラマ寺の所在地なる奉天や北京にも留學せしめたいと思つて居る。第一期に二十人として北京に三

人、奉天に三人、といふ風に分遣したい。問題はその經費であるが、それが出来ないやうでは日本も亡國だ。米國を見よ、支那に六千人からの宣教師を活動せしめて居るではないか。支那が白人から分割せらるゝやうでは日本が亡國となるといふ微妙なる一大事の因縁を有する日本としてこれ位の事が出来ないとなつては建國の御先祖に對して相濟まぬではないか。

而して、蒙古の青年を日本に招養する費用については二十人だけ引受け手が出來た。その引受けの同志者は、頭山滿翁を主盟とする敬神護國團や相州片瀨常立寺（同寺には一昨年蒙古の使節五人の供養塔を建立せり。同寺住職は予の學友にして主義に就て特に共鳴せるの人、立正大學の教授磯野本精師である）王城炭礦株式會社社長川合芳次郎氏の一手建立せる川合寺の如き乃ち然りである。

今、參考の爲めに常立寺や、敬神護國團より蒙古青年招養に關する引受證の寫しを左に紹介する。

貴師の蒙古開教の主旨を賛成し將來蒙古に於ける日蒙信交、日支共榮、世界和平運動大義光顯の教師たらしむべく當寺(又は當團)に貴師推薦蒙古青年(在家又は出家)を招養し相當の學校に通學せしむる事を約束致候也云々  
以上の如く、東京を中心としてその附近の寺院その他の團體に於て續々賛同者が出來つゝある事は復興亞細亞の機運到來の證で、誠に世界平和の爲め、人種平等、十界皆成の彼岸への前進運動の爲め慶祝に堪へざる所である。

(第六)

元寇役の梗概を論じて日本の國難は結極蒙古及支那の國難たる所以の玄由を高唱す

元寇の原因のその又原因は日本の朝鮮放棄の一大悲痛事を演じたる新羅と大唐との聯合軍と日本との大陸戦を論道せざればその徹底を期し難い。コハ予が「救國の人柱」と題して一冊子を公表した事がある。而してその朝鮮放棄、即ち大陸政策の中斷の期間に生起せる國難の大なるものが元寇である。更らに日清、日露の大戦の根本原因もそれを研究する事によりてのみ眞に判明する。その謂はゆる朝鮮放棄は何時でありしか、曰く筑前太宰府水城の築造の年である。即ち天智天皇の二年の事である。予はその大陸政策警醒の史跡を買収して滿蒙開發、海洋雄飛の警策道場として大陸山水城院なるものを創立した。而してその道場の山頭に日本の大陸戦に關して敵我兩軍萬靈供養の

鐘樓をも建立すべく目下折角の運動中である。すでに大梵鐘は前朝鮮總督齋藤實子爵が寄贈されて居る。其打出す鐘の音には大陸親善、世界平和の聲がする。この聲に自覺せよかしの運動がいろくの方面に顯はるゝのである。予が之の鐘聲を代表して元寇國難の現代への痛切なる教訓を蒙古王公等に説話する事、豈に無益の業ならんや。

▲蒙古王公會議の列席者は如何なる人ぞ

以上、第一(立正安國論の啓示する救蒙の三大精神)。第二(ラマ教改造の根本原理)。第三(世界和平統一の大本尊)。第四(蒙古軍大供養塔建設の趣旨)。第五(日蒙青年交換留學の急要)。第六(日蒙信交の世界的使命)の六ヶ條が、予が蒙古王公

會議に來り會せる王公貴族等に説法せる要目である。而してその所謂る長春に於ける蒙古王公會議には如何なる人物が來り會したか。コハ蒙古の現情を知る上に於て、又日蒙信交以て東洋安穩より世界和平に貢獻する運動を起す上に於て、重要な事項であるから、煩を厭はず左に之を紹介して置く。

哲盟旗務會議列席者(○印旗長)

- ◎哲里木盟盟長
- 東北邊防總司令顧問
- 管旗章京
- 印務梅倫章京
- 印務榮蘭章京
- 長春徵租局會辦
- 長春徵租局會辦
- 繙譯官
- 筆帖式章京
- 承啓
- 齊默特色木丕勒
- 阿穆爾沁勒圖
- 才音吉雅圖
- 胡圖
- 旺欽超克素榮
- 彭楚
- 拉錫多爾濟
- 薩嘎爾嘉布
- 巴圖巴雅爾
- 薩平
- 阿



承啓官

秘書

◎達爾罕親王

協理輔國公

管旗梅倫

達旗札薩克公署印務札蘭  
兼理旗務梅倫

梨樹公益地局知事

巡防統領

秘書長

◎博王旗代表協理

副管旗章京

慶成雙益兩地局副局長

筆帖式

筆帖式

◎圖什業圖旗代表副協理

管旗協倫

筆帖式

筆帖式

格爾圖

吳湘

那木濟勒色楞

松永偉魯布

綽克巴達拉呼

韓色旺

郝春山

劉震玉

趙承杰

額爾德呢畢勒格

多勒倫

崇阿倫

那德木特

富全

善吉米特布

富勒琿

依克塔春

吉勒章阿

幫辦哲盟務固山貝子

◎杜爾伯特旗札薩克貝勒

杜爾伯特旗管旗梅倫

署文案梅倫

署書記長

隨員

◎札賚特旗札薩克郡王

管旗章京

管旗梅倫章京

差遣員

○書記長

徵租分處主任

清理田賦局辦事員

杜爾伯特旗考查黨政代表

◎郭爾羅斯後旗札薩克輔國公

管旗梅倫章京

筆帖式

筆帖式

筆帖式

烏爾圖那蘇圖

色旺多爾濟

達蘭泰

馮文泰

包煥文

河通漢

巴特嗎拉布丹

默吉特僧額

朝格佈彥

德木林札木蘇

包悅亭

寶金山

王鳳亭

王孝威

多爾吉帕勒木

托克塔穆勒

和希克圖

那木吉勒

◎札薩克圖旗札薩克郡王

(巴王爺)

協理台吉

梅倫章京

繙譯梅倫

印務紫蘭

筆帖式

筆帖式

筆帖式

筆帖式

通事

◎賓圖王旗代表梅倫

◎依克明札薩克多羅貝勒

卓哩克圖親王

溫都爾親王 (陽王爺)

三喇嘛 (包王爺)

科爾沁左翼中旗(二貝子爺)

袁慶恩

楊黑春

奉天代表

吉林代表

巴雅思古郎

布彥陶克塔呼

布彥那遜

烏祥

依德爾巴拉

太平阿

陶克塔呼

孝順阿

德福

布彥陶克塔呼

巴勒清泥

巴勒清泥

賀喜業勒圖墨爾根

陽倉札布

阿穆沁梧勒圖

色拉哈旺珠爾

葉玉成 黑龍代表

以上その氏名である。予の六ヶ條に及ぶ説法をば、以上の列記の人々に悉く聴聞せしむる事は、諸種の複雑なる事情、殊に會議終了翌日の廿日の一日としては無理な事であつた。更に予は支那語、蒙古語の通譯等にも苦辛した。それやこれやで、奉天から大連へも二回も往復し、殊に長春の四月二十日の説法に間に合ふやうにするには更に奉天からは十九日の夜行を利用して長春へ着は朝七時で、朝めしも經王寺でソコ〜にしたゝめて、永井總領事を訪問してそも〜立正安國論の啓示する現代的運動の原理はから説き立て、公主嶺の新華公司の御主人で大の蒙古通たる富田仁三郎氏に電話を掛けてもらう。それから大連の滿鐵本社に御手敷をかけて長春地方事務所の中島五十治氏(支那語縱横自在の人)を依頼する。予の説法を筆記すべく引張り出した吉岡行辨師は朝めしも喫

して居ない。午前九時から午後四時まで各王公に説法したのを筆記せしめたのであるから師は餘程お腹がグウ／＼言ふたであらう。「先生ひるめしは如何ですか」とうるさく申されても夫れ所の騒ぎでなく、今日のこの機会を取はづしたならば、説法の機縁が又遠くなるから、「マア／＼辛棒して下さい」と引張り廻はされた人々こそ誠に以て御氣の毒千萬であつたが、御かげで以て、蒙古襲來元寇國難の六百年來、日蒙親交の根本原理の説法の下種結縁が出来たのであるから、その功德や無量無邊、予は此機會に於て、永井總領事閣下、中島五十治、富田仁三郎の兩先生始め吉岡師等に對して深甚なる感謝の意を表せざるを得ない。

▼哲盟旗務會議とは何ぞや

前項に、長春に於ける謂ゆる蒙古王公會議列席の氏名表に「哲盟旗務會列席者」◎印は旗長とあ

るを一言するの要がある。「哲盟」とは「哲里木盟」の略で、このチエリム盟は内蒙古の最東部に位置し東南一帯は東三省と界し西は照烏達及錫林郭勒盟に接し北方は黒龍江省に至る南北二百餘里、東西二百餘里の廣表を有し其面積の大なる東四盟中に冠たるもので、此盟域は東三省に接續しその東半部はすでに漢民族の北進によりて開墾せられて居るので、今や政治的や地圖的の名は支那でも、ソコに面倒なる蒙と漢との民族的感情が複雑するありて、吾等が何等野心なき純宗教的滿蒙開教運動上にも何かと小面倒なる障害があつて仕事かやりにくい。然し何と誤解されやうとも、事、苟くも東洋の平和に關する民族的、國防的、經濟的の一大事因縁を有する日本人としては堂々天下の王道上に正義の錦旗を押し立て、運動すべきの地帯であるから、之の哲里木盟の如きに對しては特に注意研究の要があらう。今、參考の爲めに哲里木

盟が支那としての政治地圖上の那點に在るかを左劃ではあるが、ソハ却つて現代への政治的變遷をに圖示してみやう。尤もこれは清朝時代の行政区知るの便に資する事になるであらう。



一口に蒙古と申しても右圖中にある清朝時代の北藩中の一で、その内に「内蒙古」あり、「外蒙古」あり、「科布多」あり、「唐努烏梁海」ありで殊に内蒙古の區別は戈壁の大沙漠によりて大別せられたるの稱でその南に在るを内蒙古と稱し、その漠北に在るを「外蒙古」と言ふのである。而して外蒙古の西北部に在るを「唐努烏梁海」と呼び「科布多」と稱する。今の所謂「蒙古王公會議」なるものは、「内蒙古」中の東四盟の一たる哲里木盟中の王公會議なので蒙古の全部の會議の意味ではない。ソコで一口に蒙古王と申しても蒙古全體の王といふわけでない。但し予が宗教上特別の關係を有し法縁を結べる喀喇沁王（貢桑諾爾布氏）は昭和三年迄は「中華民國蒙藏院總裁」の職に在つたから言はゞ蒙古王中の王とも稱し得べきであらう。その「蒙」は「蒙古」であり、「藏」は西藏であるから、實に蒙古王中の王たるのみでなく西

藏の總督の格であらう。予等同志が蒙古軍大供養塔落成除幕式に際し、カラチン王を支那（蒙古も含む）に對する國際的儀禮として正式に招待せんとしたるの消息も以て解し得べきであらう。序ながら一言して置く。それから「旗務會議」の旗務といふのは、内蒙古に在りては其部落の會長即ち一札薩克の統轄する部分を旗とし旗を合せて盟を爲し各旗の下に皆若干の佐領が置かれる。（佐領の講釋まですると長くなるから略する。）つまり哲里木盟各旗の政務會議といふ義である。即ち前記の「哲盟旗務會議列席者」の氏名中、支那側數名の官吏を除くの外、他は悉くその王公貴族官吏なのである。

### 六會に涉る各王公への對機說法

予が、右の謂ゆる「蒙古王公會議」にかけつけ

たのは四月の廿日の朝の事で、會議は十九日の一日で終了した。予は約一ヶ月に及ぶ打合せ會があつたのであるから、如何に本會議の期間が短少でも三、四日間や一週間は開催されるものと思つた所がタツタ一日の本會議とあるから驚く事一方でない。尤も予は一昨年上海に開催されたアジャ民族會議に日蓮宗門から派遣されたがその時ですら準備會の方が長期で、本會議は僅か一、二日で済んだ。實に支那といふ所は妙な國だと呆れたがその場合は、印度人や、トルコ人や、フィリッピン人、支那人、日本人といふ各種の民族の集合であるからゴタ／＼するのは同じ呆れるとしても、さうでもないが、今回の蒙古王會議なるものは水入らずの同一民族、而かも内蒙古中の哲里木盟だけの會議であるから、事はすら／＼と行きさうなものなのにその準備會、打合せ會に一ヶ月以上もかゝり、本會議が僅か一日と來てゐるから呆れると

いふよりも、驚くといふよりも、予としては一種言ふべからざる悲愴な感にうたれた。蒙古民族といへば日本人としては一番近い民族で、言はゞ兄弟であるのに、コンナ状態は何事ぞと、心底からなる同情の念にかられた。予は之の會議の機會を利用して、大に日本建國の平和的大理想等を説法するつもりで來たが、何分にも貧乏坊主の事であるから御一同を大料理屋に招待する費用もなければ、縦横自在に支那語や、蒙古語を話し得る人ややとう事もならず眞に困つた結果、奉天から夜行列車をホテルに代用して大連に二回も往復して某方面に運動の結果、「天は自ら扶くる者を助く」の格言通り、感應冥合、天人一如の御利益忽ち顯はれたといふ次第で、予はその不思議の應顯に難有なみだがほろりとした。御かげで左記の順序で思ふ存分、午前九時から午後四時まで説法の功德を

積む事が出来た。法華經に曰く「願くば此の功德を以て普く一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に佛道を成ぜん」と、乞らくば此の功德によりて一日も早く滿蒙平和郷の實現せん事を。

昭和四年四月廿日、午前九時より午後四時までに連續しての蒙古各王公貴族への説法は實に左記の順序に依つたのである。

第一回

巴王等を中心としては

蒙古軍大供養塔建設の主旨と日蓮宗管長の蒙古軍戦死者の祭文の解釋を」

第二回

チャライト王等を中心としては

「六百年前入蒙の英雄僧日持上人

の現代人への豫言的警策」を

第三回

タラハン王の宰相を中心としては「蒙古襲來元寇國難を背景として作られたる立正安國論の啓示する啓蒙の三大精神」を

第四回

トルボト王を中心としては「元主忽必烈が西藏よりラマ教を蒙古に輸入したる政治的事情及びラマ教の蒙古の現情を造れる責任とその根本的改造原理」を

第五回

コロラス王及其の伯父等を中心と

しては

「蒙古民族と漢民族との北方アジアに於ける微妙なる政治關係を大觀して日本の王道の光被すべき第一照點の北方アジアに存する所以の玄由」を

第六回

オンドロ王を中心としては「蒙古襲來元寇國難の際に圖顯されたる護國マンダラの日蒙信交、日支共存、東洋安寧、世界和平運動に就ての根本指導原理たる所以」を

第七回

なるかの如き誇りを見せつゝある、道の白色人種すら

黄色人種の支配者

光は東方より

「光りは東方より」

と稱せるは、吾等黄色アシヤ人種たるもの、特に注意を要するの點なり。  
光りとは何ぞや

これに二大方面あり、曰く

靈Ⅱ(精神的、宗教的)の文明と  
肉Ⅱ(物質的、科學的)の文明  
これなり。

光格天皇の御製に詔らせ給はく

敷島の大和錦に織りてこそ唐紅も色にはえあれ

と、吾等の思想は靈肉の二大文明を統一せる第三文明なり。第三文明は博大正明、包容恢弘、融合和樂の大精神を有す

### 南歐の大文豪

#### ヘンリツク・イブセン

は吾等の思想を知るや、知らずや。彼れはヘレニズム(靈的)とギリシヤズム(肉的)の二大文明を

統一したる第三帝國を唱道せり。

日蓮大師(三大秘法抄)に垂示して宣はく

王法、佛法に冥し

佛法、王法に合し

て、王臣一同に三秘密の法を持つ……

と、「王法」は肉的文明にして第一帝國なり、「佛法」は靈的文明にして第二帝國なり。「王臣一同」

とは、君民一體、建國理想活現の道義的民族なり

「三秘密の法」とは

#### 一に曰く本門の本尊なり

南無妙法蓮華經の七字を中心として顯されたる宗教的客體なり。宇宙統一中心の大生命なり。法報應三身即一の具體的信仰の正的なり。本尊の名は根本尊崇の義にして、人種、民族、時の古今方の東西の差別なく信奉受持すべき、世界文化統一の根本妙境の謂なり。

#### 二に曰く本門の戒壇なり

これ世界平和任持の中心威力なり。「如來秘密神通之力」の宇宙的大生命を所居の土Ⅱ國土に約したるの妙力なり。更に別言せば、世界の平和を紊し、人類の安寧を害するの國家的弱者を懺悔滅罪せしむべきの壇場なり。壇場の名を「大日本國」と號しその壇主を「すめらみこと」と稱し奉る。

「觀心本尊抄」に曰く

「賢王となりて愚王を戒責す」

と、聖語、儼として力あり賢王とは「すめらみこと」也。またの名を「聖天子金輪大王」と申し奉る。金輪大王は、妙法正義を立國の大精神とせる國家を擁護し且つその大精神を世界的に恢弘するに無限絶待の國力を有し給ふの聖天子也。その一大威力を輪寶とは申すなり。輪寶は妙法正義を中心内容とせる世界的文化を擁護するの妙劍なり

これを又御稜威とも申し奉る。

#### 三に曰く本門の題目なり

これ「所作佛事」の活動を生命とせる道義的民族の謂なり政治を祭事とし祭事を政治とするの國民なり。由來、佛と神とは吾等の思想に於ては二にして一なり、一にして二なり、佛は世界的に即し、神は國體的に約す。吾等の「所作佛事」は佛法と王法との冥合Ⅱ(教法と政治との統一)を理想としての行動を義とす。即ち心を本門の本尊宇宙統一の境地に定め、身を本門の戒壇國家統一の大道に置き以て心身統一、靈肉一如のおん題目を高唱し人類大平等、十界皆成佛の妙行を修するの意なり。八歳の龍女がさげたる春の光りの如き人格玉成の謂なり。

如上の三者、これを本門の三大秘法とは謂ふなり。三者いづれも「本門の二字」を冠す。これこ

の三は權述の道にあらず、暴力覇者の壓迫的教權にあらずして、

明治天皇の

「あさみごり澄みわたりたる大空

と垂示し給へる太古にして太新の妙道、蕩々乎として天の如き世界統一教の大宗旨也。諒解に便せむが爲めに、左にこれを圖示し置くべし。

の廣きをおのが心ともがな」

張主義主と念信の等吾

(一) 統一本尊の光顯

本門の本尊

|| 妙定(信仰の正境)

- 一、吾等は久遠大生命の本尊を信奉す
- 二、吾等は本門の本尊の啓示する神人一如觀に依りてあらゆる世界主義的思想の開顯統一を主張す
- 三、吾等は神器「鏡」に表象されたる國民文化の精神を王道師徳の教導に約して高唱す

(二) 第三帝國の建立

本門の戒壇

|| 妙戒(信仰の正規)

- 一、吾等は理想的國家の擴大を計圖す
- 二、吾等は本門の戒壇の啓示する法國冥合觀に依りてあらゆる國家主義的思想の開顯統一を主張す
- 三、吾等は神器「劍」に表象されたる國民尙武の精神を王道主徳の護持に約して高唱す

(三) 優生民族の活躍

本門の題目

|| 妙慧(信仰の正行)

- 一、吾等は道義的民族の膨脹を期成す
- 二、吾等は本門の題目の啓示する衆生平等觀に依りてあらゆる個人主義的思想の開顯統一を主張す
- 三、吾等は神器「璧」に表象されたる國民道徳の精神を王道親徳の愛養に約して高唱す

然り、本門の本尊は神鏡を以て表象されたる世界文化統一の中心標準にして明確なる智慧の光源なり。

本門の戒壇は神劍を以て表象されたる世界平和確保の威力にして強固なる意志の斷行力なり。

本門の題目は神璽を以て表象されたる世界淨化運動の第一線に立つべき道義的民族の寂光、春の如き麗美なる感情を有せる人格の謂なり。

三大秘法と三種の神器

はその名、別にしてその意一なり。

見よ現代、世界最大多数の人類の精神界を支配するものは何ぞや。世界の二大宗教と稱されたる佛教と耶蘇教及び回々教、婆羅門教、儒教、神道等にあらずや。

それ等の大宗教及び文教は何れも皆悉くアジャに光源を發す。これ靈の文明なり。心の光りなり。

更に文化促進の最大有力の武器たる印刷術を始め、火藥羅針盤等の發明、皆悉くアジャに發祥せり。彼れ白人等はそれ等の光源より方針を得、基礎を作り材料を求め、これに種々の工風をこらし雑多の研究を施して、今日の謂はゆる科學的文明を實現し得たるものにして、彼等の獨創にはあらざるなり。故に予は斷ず、科學的文明、即ち肉の文明、物の光りはアジャより發祥せりと。うべなり、彼等白人の「光りは東方より」の言や。さすがに嘘つき上手の白人も、この事のみは正直に白狀し居るぞ愉快至極なりとす。

神典「日本書紀」に曰く

「光明 明彩しく六合の内に照り徹る」

と、聖典「法華經」に曰く

「日月の光明の能く、諸の幽冥を除くが如く、斯の人、世間に行じて、能く衆生の闇を滅す」と、更に記せよ、「光りは東方より」の言を、書紀

の言は世界天照しの政治的雄圖を垂れ、法華の語は世界救護の宗教的理想を示す。

世界天照らしの歴史的一大人格者を天照太神と稱し、世界救護の一大人格的靈名を南無妙法蓮華經と申す。

日蓮大師曰く

### 無作三身の寶號を南無妙法蓮華經

と稱す。妙法てふ名は宇宙の大真理の名にして人格的にあらず。これに無作三身と南無する時に、眞と善と美との具體的内容の靈格||人格的具象化の實在者としての本尊とは活現し來るなり。我等がこの本尊の名を唱ふるに釋迦と言ひ、アミダと稱する個別的の名號を以てせざる所以のものは這裡玄妙の一大哲學の啓示に依りて然るなり。而して

### 天照太神と稱し奉る

は、天御中主神の名によりて宇宙の大真理を表象せる歴史的神格の具體化としての崇敬による也。即ち天照太神はゴットの如く、ブラマの如くヤーエの如き空想の神にあらず。大日の如く藥師の如く非歴史的化佛にもあらず。釋尊と同じく人界應現の具體的一大人格者なり。釋尊は印度にこれを「佛陀」と稱し天照太神は日本にこれを「カミ」と申す。「ブツダ」は大真理の覺者實行者を意味し、「カミ」は眞理的活現者を尊崇するの謂也。吾等はそのすべてを中心的に統一して南無妙法蓮華經と唱へ況神と一神との二にして一、一にして二、その不離一體上に第三法門としての本尊名を稱するなり。(本論は何れ南無妙法蓮華經如來論と題し公表すべし)

日蓮大師は

この本尊が日本に建立せられざるべからざる玄由

を「立正安國論」、「觀心本尊抄」、「三大秘法抄」等に切々無限の力を以て道破し給へり。

大師の

世界第一の本尊この國に立つべし

の宣言!寔にこれ世界を歴したる正大日月と光を同じふするの語也。故を以て蒙古襲來、敵國外患の危機(弘安四年五月十五日)に際しては護國の本尊を、身延山頭世界平和、國體擁護の一大祈念裡に圖顯して先づ世界平和の大理想、地上極樂建設の大雄圖、王法と佛法との冥合一體の大哲理靈肉統一第三帝國建設の大方針を一言にして統説せる法華の中心としての壽量品の金文たる。

### 我此土安穩天人常充滿

の十大字を高く標榜しその中心に南無妙法蓮華經の靈名(宇宙の大生命本門の本尊の名號)を記祭して

天照太神

聖天子金輪大王

八幡大菩薩

の三大柱神を奉安しこれを第三帝國的に結要して

諸天晝夜、常爲法故、而衛護大日本國

の十五大文字を記祭せられたり。(乞ふ記祭の二字に注意せよ)。

天照太神を以て、一小島國日本に局限されたる民族的一神と誤解する勿れ。而してその太神の鎮座まします所を高天原とは稱す。

高天原とは世界眞正平和の中心國との謂なり。世界の中心國とは大彌榮の國との義なり。日の本

ツ國との義なり。世界平和確保の大黒柱の國との意なり。これより北するもの朝鮮、滿蒙、シベリヤ等なり。天照太神の弟君素盞鳴尊はその母神（イザナミの神）の大精神を體して裏日本（出雲方面）を政令の中心として北方アジアに

### 「山幸」大陸政策の皇謨

#### 伸張の雄圖

を垂れ給へり。同じく天照太神の弟君月讀尊は父神（イザナギの神）の大精神を體して北九州（博多を中心とする方面）を政令の中心として南方アジア（支那の福建省、海南島は勿論、太平洋方面）に

### 「海幸」海洋政策の皇謨

#### 伸張の雄圖

を垂れ給へり。

而して、北は西を攝し、南は東を收む。東西南

北、四方八面、天照世界、寂光淨土理想郷の建設の大誓願、これを、これ大日本國建設の大理想とは稱し、同時に統一的大宗教畢竟の大目的たらずむばあらざる也。

法華經に曰く

「如來秘密、神通之力」と

「如來」とは、「如實の道に乗じ來つて正覺を成ず」るの義なり。豈に現實の世界に來らざるのゴツトや、ブラマや、大日や、藥師や、彌陀を稱すべけむや。

如實の道及び正覺を成ず

とは「皇孫、正を養ふの心」なり。これ神武聖天子即位の大宣言なり。正を養ふものは人格者也。養はるるものは非人格の眞理正法也。宇宙の公道たる妙法なり。我等の神は、我等の佛は死を示し生を現じて無量無邊に公道を實行し、眞理を修行し「久しく業を修して得たる」の歴史的人格

者なり。應現實在の覺者なり。智者なり。眞人なり。善人なり。美人なり。文化人なり。佛とは何を岩間のこけむしる慈悲のほかにはしくものはなし』てふ救済活動の人格者なり。

現實の人生と没交渉なる空佛や、活動の世間と無關係なる非歴史的なる神體なるものは我れすなはち與り知らざる所なり。難有くも、かたじけなくも何んともなきものなり。而して我等の信念は如上提唱の如く神と佛との別體なるの所以を知らざるものなり。これを身延山の奥の院に徴せよ。其所に奉安されたる日蓮大師の本尊マンダラには

### 天照八幡等の諸佛

とありて、神佛一體、祭政一致の消息を道破せられたり。これをこそ眞の「如來」とは申すべきなり。

「秘密」とは神靈の崇高  
玄妙、絶待雄偉の消息  
を稱するなり。

「神通之力」とは神に通  
ずるの力

なり。これ予が日蓮大師の「御義口傳」をそのまゝに拜したるの信念なり。釋尊は遠く月の國、西の國、印度の國よりこの神靈天照太神の延長の現實なる我が「すめらみこと」の聖天子を

轉輪聖王と讚美し給へり

若しそれ天照太神と釋尊の娑婆世界降誕の年にして前後の相違ありて、釋尊もし太神より前に誕生あらせられたりとせば因中攝果の豫言として拜すべきなり。而もその聖天子の世界統一の現神にまします所以の豫言として金輪大王として説法し



給へるの點に無限の價値を認むべきなり。金輪は四洲統一の聖主にして即ち世界統一の聖天子にましますなり。

今や世界の王朝としいへる王朝はロシアにせよドイツにせよ滅亡せり。英は帝國とは稱すといへども日本の意義より批判し來らば一種世襲の大統領たるに過ぎず。否、釋尊の豫言と全然意義を異にせるの皇帝なり。

### 若し大日本の「すめらみ

#### こと」が大日本國に

ましまさず、大日本帝國なるものが地上現實の國家として存在せざれば、釋尊の豫言は世界第一の大法螺吹きに化し了せむなり。釋尊の經文は一山三文の反古紙たらむのみ。否、一種の空論哲學たらむのみ。印度に如何に高遠の哲學を發生せりといへどもその國亡びては何にかせむや。日蓮大師誠めて曰く

「國亡び人滅せば佛誰か崇むべけんや法誰か信すべけんや先づ國家を祈りて而して後に佛法を立つべし」

又曰く

#### 「印度に佛教無し」

と、日蓮大師は佛教徒也。豈に徒に佛教を罵るものならむや。而も佛教の本来本元に對して「佛教無し」との一大喝破の啓示する所、世界興亡の史的教訓上、如何なる哲學を有するや。這裡玄妙の大喝破に警醒し得ざる現代なるが故に世界の暗も明けざるなり。佛教の佛教としての價値は、事實上に於て、その豫言の本尊たり主體たるこの國とこの聖天子まします事によりてのみ眞の意義を發揮し、光明を放つべけむなり。然らば即ち印度の釋尊の豫言たる

### 金輪大王は世界天照 らしの聖天子

たらずむばあらず。その聖天子は正義と威力を具有し給ふ。乃ち

#### 正義（眞理正法の内容）と 威力（國力神通の外力）

の二大方面を具有し給ふの聖天子なり。この具存一體の聖天子を金輪大王とは稱し奉るなり。印度の釋尊は、これを哲學的に堂々の説を立て宗教的に正大の統を示し、日本の國體はこれを事實の上に活現し、皇統はこれを人格の上に光顯す以て日蓮大師が元寇に際して圖顯し給へるの本尊が、如何に世界統一の大本尊なるかを、仰ぐべく又信すべきにあらずや。

これこの本尊は、元寇てふ眼前の一大事實の際に於ては「蒙古退治の大マンダラ」なりしかど、今や日支、日蒙の關係と、世界の趨勢と、大師本來の理想上より、これを大觀統説せば

#### 東亞親善、世界平和守

#### 護の大本尊

として崇敬すべきなり。人種の黑白を問はず、國の内外に論なく、世界一同に尊崇信念すべきの宗教的客體たらざるむばあらず。されば大師數百の門弟中に六人の英傑の内に日持上人と稱するがあり。

#### 日持上人はこの大本尊 に啓發されて蒙古に入 れり

世界救護の大生命を有するこの本尊の啓示は、當然、日持上人を日本國難の本地地なる北方アジ

### 我が所謂る第三帝國主義とは

ヤに進入せしめざるべからざるなり。而も弘安元寇後に、この事ありしの際に於て、我等は天の賦與せる使命の、如何に崇高なるかを最も痛切に感ずるものなり。乃ち日持上人は元主クビライの政治顧問たりしマルコポーロが、大陸支那のかなたに於て支那の東に「ジバングー」と稱する國ありと歐洲に紹介せるの年（永仁三年一月元旦）を以て我が鎮國の山、不二の靈峰下を出發して遠く北方アジアに進入せるなり。その理想は大陸との平和的提携運動より、世界平和運動への開展にてありけるなり。その究竟の大目的は、大陸と日本との共存を中軸の力として世界的理想郷建設の雄圖に存するなり。換言せば大陸をも王法中の共存的寶土とし、中心王法の延長の妙域とし、以て王法佛法冥合一如の第三帝國建設の大理想を實現せむとに他あらざるなり。

物質的、肉的、科學的文明の開顯を第一の帝國とし  
 精神的、靈的、宗教的文明の開顯を第二の帝國とし  
 その開顯せる第一帝國を王法と稱し、その開顯せる第二帝國を佛法（又は神法と稱するも可なり）とし、その二者の統一を第三帝國とは稱するなり  
 吾等の第三帝國主義よ、その中にはアジア民族の解決あり、日支共存の大策あり、東洋安寧の籌謀あり、經濟、國防の大策あり。その意義や玄妙なり。その理想や高遠なり。その經綸や雄大なり。その用意や周到なり。果然、日持上人入蒙の史的豫言は日露戰爭によりて日支共榮の義戰として六百年後に活現し來れり。この日露戰爭が日支共存

の確保、東洋平和の保障たりし點に、如何に我が日持上人大陸進入の雄圖が、公明、日月とその光りを同ふするの菩薩行たりしかを追想すべきなりこれをこれスロー民族の強露が、暴力霸道を以て沿海州を掠奪せる政治的一大罪惡に比し、果して世界の列強は如何なる感をか有するぞ。これ乃ち

### 日持上人の雄圖は護國本尊の啓示に依り

て然るなり。その動機に於て、その目的に於て斷じて侵略的雄圖にあらず。一意、正義妙法の大道を堂々活歩して以て世界を救護せむとに他あらざるしが爲めなり。法華經に曰く

「今、此の三界は皆是れ我が有なり。其中の衆生は悉く是れ我が子なり、而も今此處には諸の患難多し唯だ我れ一人のみ、能く救護を爲すと、上人の大精神は即ち然りとす。而して上人

の大精神は大恩師日蓮大師の大精神なり。大師の大理想は世界を悉く天照しの理想郷たらしむるにあり。正義妙法の一大大光明裡に世界をも、國家をも個人をも統一して、その本然の尊高價值を開顯せむとに存するなり。

日蓮大師曰く

「妙法五字の光明に照らされて本有の尊形となる。これを本尊とは申すなり」

と。而してその光源を日の本ッ國に發見せり。釋尊の理想せるの國は日の本ッ國に存せりとせり故に大師は更に之を中心的に要約して曰く

「日は東より」

と、斯くと光源の國が判明し而もその國創建の大理想が世界真正平和の任持たり、中心たり、大黒柱たるの歴史的の一大事實に證明し得られたりとせば、道の野郎自大の西洋人、就中、アングロサクソン人種といへども事實は如何とも致し方御座

無く候、地上に斯くの如き國ありとせば、否、光りの本源が、その物質的にせよ、その精神的にせよ、皆悉く東方たるの事實は、誰れが何んと申し候ても事實斯くの通りに御座候へば茲に一札差入れ候て

光りは東方より

と頓首再拜したるにも等しきが、本論劈頭に引證し來れるの成語なりとす。吾等同志相謀り弘安元寇の一大史跡たる博多灣頭志賀の島(俗にクビキレと稱する地點、曾て小なる蒙古首切り塚の在りし地帯)に

蒙古軍の首切りより大供養塔へ

との一大標榜の下に東亞親善の聖業を起せる所以のもの畢竟、日支の共存よりアジャの復興へ、アジャの復興より人種平等の地理的安住へ、地理

的安住より世界の平和へ、世界の平和より一天四海皆歸妙法の極樂國(第三帝國)の建設へ、進展向上、精進勇猛の修行たるに外ならざるなり。予に一首あり

日は東へてりさう西にさく花の、かほりの風の又も西して

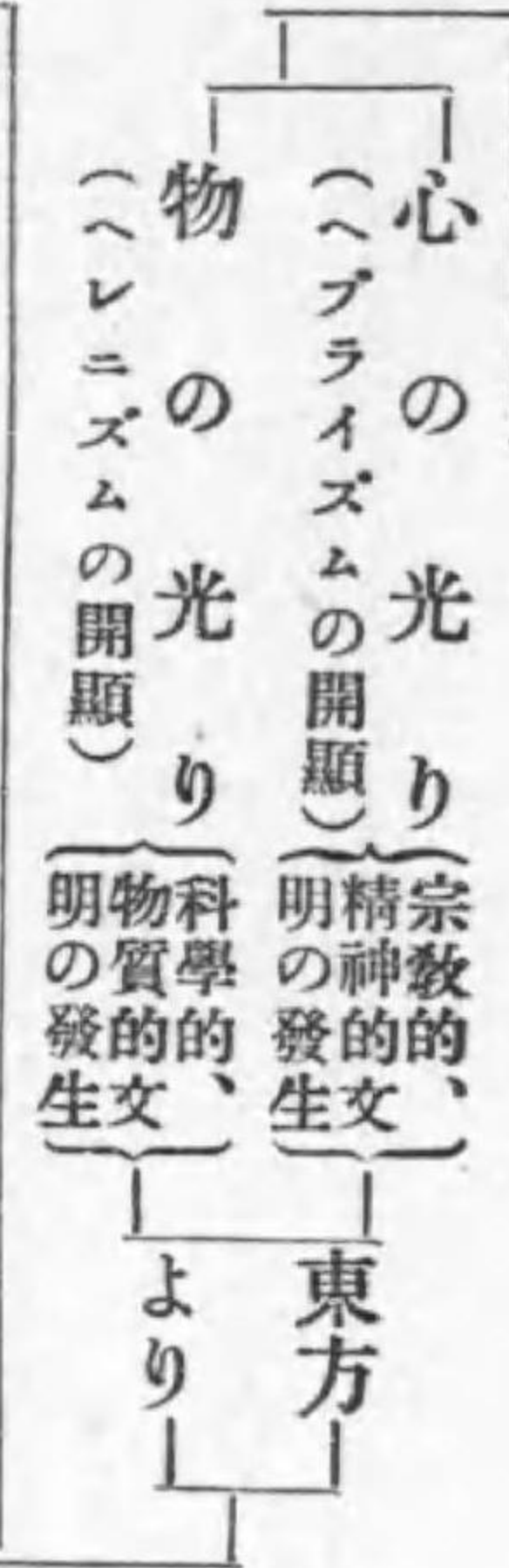
歌句として取るに足るまじけれど、その意

日は東より出て、西を照らす

との聖語を聖天子のまします日の神の東より西への九州博多に東亞信交の供養塔を立て、そのたむけの花のかほりが春風に乗じて支那滿蒙シベリヤは更らなり、遠く西の國白人の國にまで及ぶの時、

排日は變じて拜日と化すべし

光りは



素盞鳴尊の經論 山幸の使命 大陸政策の皇謨 北方アジャ建國以前への還元(北は西を攝す)

との大理想を寓せるものなり。あゝ「光りは東方より」日東人士の責任や玄妙にして雄大なり。以上論道の要、これを左に圖示して以て諒解に便すべきなり。

月讀尊の經綸  
海幸の使命  
海洋政策の皇謨

南方アジャ建國以前への還元(南は東を含む)

(二) 精神的  
統一

- A、二神の經綸
- B、授國の神勅
- C、神武の雄圖
- D、明治の中興
- (イ)過去の根底
- (ロ)現在の努力……強露調伏當年の心に還りての國力充實運動
- (ハ)未來の理想……六合統化、世界平和主義の實現

◎明治天皇御製……目に見えぬ神にむかひてはぢざるは人の心の  
まことなりけり……の心地に住して  
宇宙の大生命たる本門の本尊に精神を統一する事是れ即ち國民指導原理たると同時に世界文化統一  
の根本精神也

(二) 地理的  
統一

- (イ)大陸發展  
素戔素尊の使命
- (ロ)海外雄飛  
北方亞細亞の經綸  
月讀尊の使命  
南方亞細亞及海外の雄飛
- 六合天照の統一

◎維新中興の政綱……「遂には萬里の波濤を拓開し國威を四方に宣布し天下を富岳の安きに置かん  
ことを要す」

◎金色の大日本國(聖天子金輪大王、南無大日本國如來、排日より拜日へ)  
李鴻章曰く 日本之地、耕して山巔に至る、其貧弱憫れむべし

日統曰く 大國の支那、來りて媾和を哀求す、其原因察すべし

(三) 人口的  
統一

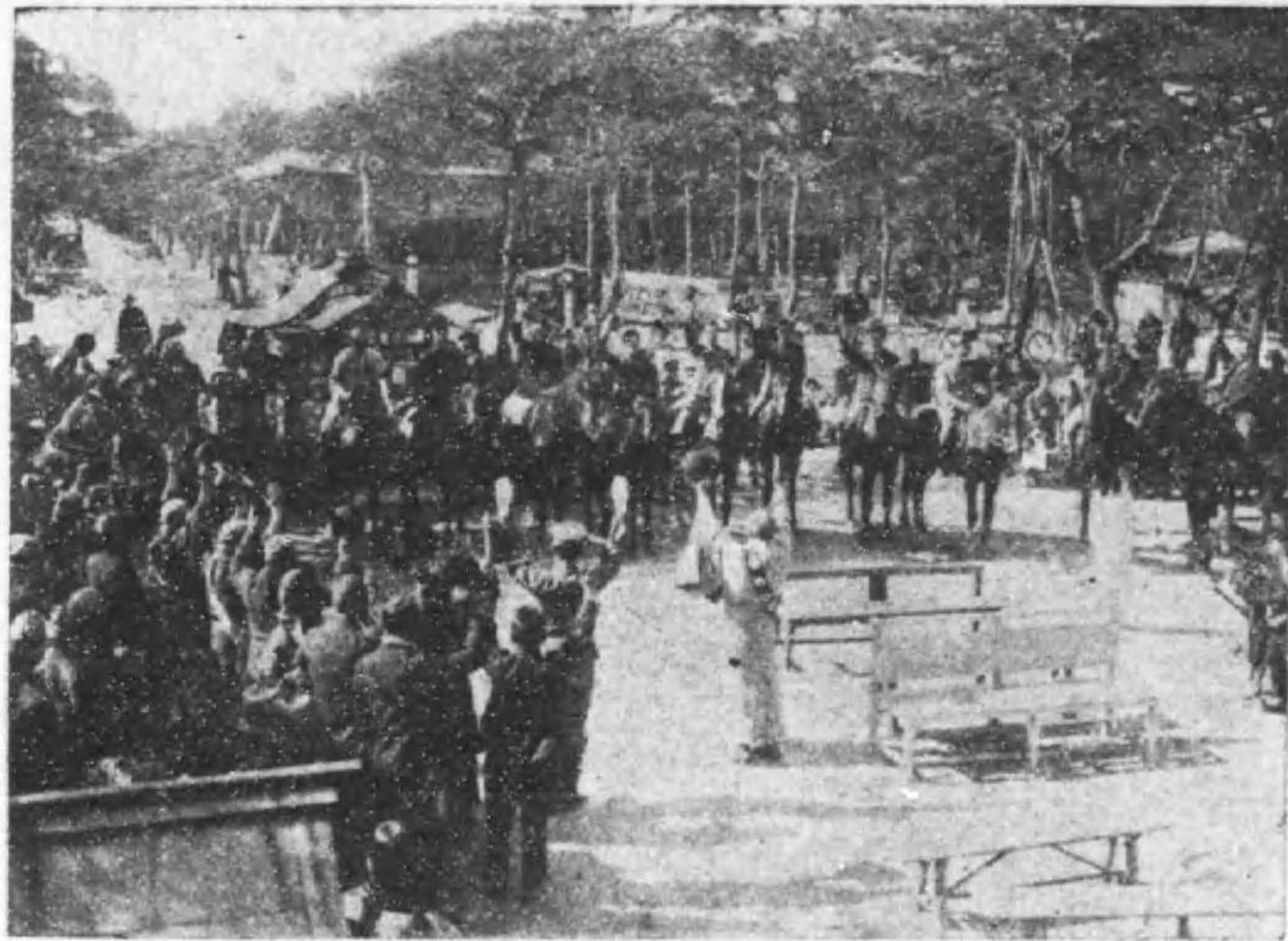
- (イ)人口増殖政策の表彰(黃泉國神話の哲理的、經世的の妙趣)
- (ロ)人口の増減と國運の消長
- (ハ)米國派遣の魔女サンガー
- (ニ)世界平和主義優生學の實行(道義的民族的膨脹運動)

(四) 經濟的  
統一

……忠實勤儉、大に金を作れ

◎對外爲替相場の慘落、經濟的第三等國の小日本  
◎金錢成佛の光明を海外へ、大陸へ(生産地を大陸に、加工地を日本に、市場を大亞に)  
以上、「光りは東方より」の一編は、蒙古各王公貴族に對して各方面より説法せるもの、原理である。  
これ子の主義、主張の根本であるから煩を厭はず茲に紹介した。これは曾に彼等に閲讀せしめんとに  
あらず、日本人それ自身の味讀、身讀を乞はんが爲めである。本文は、蒙古軍供養塔除幕式の準備中  
忙々勿々の間に博多の旅舎に於ての數時間に渉れる走筆で、素より増補訂正すべき點もあらうが、然  
し人の本心本底は何等の準備もなく突差の間に顯現するものであるからその文の拙を採らず、その意  
を味はれむ事を切望する。以下、蒙古各王公貴族への説法の綱領によりて各論するであらう。

(昭和四年五月廿日東京愛山莊にて)



高て於に前(念記寇元)像銅大連日師聖の導唱國安正立は隊馬騎善親蒙日  
景光の聲發歳萬同一てり終き聽を吼子獅の理原設建郷和平蒙満りよ統日鍋



鍋高、氏アヤジルユジノジ、隊馬騎古蒙、翁連浪嶋川、女王四第王親肅  
記に前神俊顯祈設建郷和平蒙満に宮幅八崎箱の々赫威神伏降國敵、等統日  
影撮念



高鶴仁兄先生惠存

色紙高濱等敬贈

連袖領年青派新(盟木里哲)公王古蒙

てに議會公王古蒙

高鍋大僧都惠存



敬入  
陽信義贈

王親ロドンオ(盟木里新)古蒙  
てに議會公王古蒙

# 蒙古退治の本尊と蒙古温都爾親王

## 世界平和郷建設指導原理としての護國本尊

### 諸天は晝夜に常に法の爲めの故に之を衛護す

昭和四年四月の蒙古王公會議モウコウキョウコウカイに謂ゆる哲里木盟ヂェリムメイ旗務會議キキョウカイに來り會せる王公貴族等六十有餘名に對し七所七回に及びての予が說法中、特に予が法悦を感じたるは長春城内に於ける說法の對告衆たる温都爾親王であつた。親王は第二回汽車中の會座に於て、遂に俗に蒙古退治の大曼陀羅と稱する護國大本尊の奉安を誓ひ遂に予の手に依りて之を正式に授與するの妙縁を結んだ。斯くの如く予と親王との法縁を結んだ事は、正さにこれ佛天の引合せて予が始めて親王等に説法したのは四月十

九日午後三時、右、長春城内であつたが而もその夜も亦期せずして長春驛から四平街まで同じ寢臺を取りて數時間同車の妙縁を結び水入らずで思ふ存分説法した事であつた。晝間の説法で相當宿縁發の端緒は認めしたが、而も即夜、本尊授與の關係にまで進展しようとは思はなんだ。同寢臺車は特に予と親王と日本語の達者な奉天の漢人が隨行してゐたので、何の事はない通譯付きで予の説法を汽車中にまで聴聞に來てくれたやうな結果と相成り、予はつくづく法華經の「諸天晝夜常に法の爲の故に之を衛護す」の金口空しからずの信念が一層強固に成り勇氣百倍の感があつた。親王は恭しくその大本尊を受くるや、トランクより自分

の寫眞を取り出して之に『高鍋大僧都惠存、敵人陽信義贈』と萬年筆で自署して寄贈さるゝのみか來春は是非自分の王府に巡教留錫すべく懇望された。予は勿論相當の準備をしてこの法縁を機として開教運動に躍進するの覺悟である。

### 日蒙信交運動に蒙古退治の本尊とは何ぞや

晝間、長春城内での説法の要綱は

『蒙古襲來元寇國難の際に圖顯されたる護國マンダラの日蒙信交、日支共存、東洋安寧、世界和平運動に就ての根本指導原理たる所以の高唱』であつた。城内に於ける予の説法は先づ『日蒙信交運動に蒙古退治の大曼陀羅』に始つた親王等は荒膽を衝かれたるの態ちであつた。頼山陽が筑前に來た時、龜井昭陽の案内で、國防の代表神としての箱崎八幡宮に參拜して彼の有名なる伏敵門頭

高く揚げられたる『敵國降伏』の勅額を仰ぎ瞻て『降伏敵國と書かねば意味を成さぬ。惜しい事をしたものだ』と鼻高々漢文先生を氣取つたものだ。言下直ちに昭陽は

『兎角の議論は御無用！これは神託でござる！』と『つくし丈夫』の一本に、道がの客氣滿々の漢文先生も二の句を繼ぐべき言葉が無かつたとの事である。漢文家ならぬ予は思ふ、『降伏敵國』とすれば漢文を成すかどうか知らぬが、やはり勅額の通り『敵國降伏』との辭句である所に玄妙なる意義があるので由來我が日本の對外戦争は敵國として襲來するものに對してのみ、弓矢の威力を發揮するのである。即ち侵略的國防にあらすして飽迄平和擁護てふ自衛的國防の大精神が光顯さるゝのである。『武』の字は『戈を止む』との合成文字である。日本は正直末法に武の眞義を遵奉して今日

### 聖天子金輪大王と世界の將來

迄對外戦争を起した。決して他國強盜の擄取主義の道具に武を汚すものでない。他民族壓迫の爲めに亂用する無道の師ではないのだ。その意味を光顯すべき御神慮の自然の象徴が『敵國降伏』といふ 龜山上皇の御宸翰として示現されたものと予は確信する。

『蒙古退治の大曼陀羅』！日本から自ら求め進みて蒙古を退治しようといふのではない。先きさまから敵國として襲來したから、當方では『蒙古退治』と出ねばなるまい。若し先方が我が日本の建國の理想が、蒙古と日本との親善は愚ろか、支那も羅馬も印度も一切がつさいくゝるめて、世界平和の理想郷の建設にありと知りて接し來るならばこの大曼陀羅は『日蒙信交の本尊』、『日支共存の本尊』、『日羅親善の本尊』、『日印提携の本尊』として活現すべきものである。予は先づランドル親王等に對して以上の趣旨を説法した。

予は進みてその本尊顯發の由來を簡單に説いてその中心に奉安されたる『聖天子金輪大王』に及んだ今、註解的に説く事にする。法華經安樂行品に曰く

『強力の轉輪聖王の威勢を以て諸國を降伏せんと欲せんに、而も諸の小王、その命に順はざらん時に、轉輪聖王種々の兵を起して往て討伐す』とある。金輪大王とあるは、その轉輪聖王中の最高位の聖天子を申すので、その下に『銀輪王』、『銅輪王』、『鐵輪王』等の三種の聖王がある。『西域記』卷一に曰く  
『金輪王は乃ち化、四天下に被り、銀輪王は則ち政、北狗盧を隔て、銅輪王は則ち北狗盧及び西瞿彌尼を除き、鐵輪王は則ち瞻部洲なり。夫の輪王は、將さに大位に即かんとするに、福の所感に

随ひ、大輪寶あり、空に浮ひ來り應ず、咸な金、銀、銅、鐵の異あり。其の境は乃ち四、三、二、一の差なり」

今、これを一々詳説の餘裕は無いが、左に要點を示して置く。

- (1)、金輪王は世界の東西南北の四洲、即ち世界の全部の境域を統一する。
  - (2)、銀輪王は世界の東西南の三洲、即ち世界の四分の三の境域を分統する。
  - (3)、銅輪王は世界の東南の二洲、即ち世界の四分の二の境域を分統する。
  - (4)、鐵輪王は世界の南の一洲、即ち世界の四分の一の境域を分統する。
- 文に「其境は乃ち四、三、二、一の差なり」とある即ち以上の説明で知るべきである。

立正安國唱導の聖者日蓮大師が、右四種の轉輪聖王中の最高位にある金輪大王を以て我が大日本

の聖天子に配し奉つたのは、我が御皇統は世界統一の聖天子にまします所以の眞義を光顯されたものである。即ちこれ世界各國は如何に盛衰興亡易姓革命がありとするも、獨り我が日の本つ國の聖天子のみは世界最後の光明として嚴存し給ふものとの玄意を道破されたものである。

### 帝にして神。神にして帝なる日本の聖天子

さて、前に引いた法華經安樂行品に顯示された「轉輪聖王」は以上四種の中何れに屬し奉るべきや。文に「強力の轉輪聖王」とある。「強力」とあるから正義擁護の爲に要する武力を有し給ふ聖天子であるから這は勿論我が日本の如き聖天子であらねばならぬ。又經文に「諸の小王」とは如何に國土の形や量は大であつても、正義擁護といふ建國の理想と及びその歴史的事實を有せざる國は、

大元蒙古にせよ、大羅馬帝國にせよ、大アメリカにせよ、グレートブリテンにせよ、悉く是れ小國の分域であらねばならぬ。建國の理想を有せざる國は皆悉く小國である。と同時に其の國主、元首主權者は同じく是れ小王であらねばならぬ。その小王の上に「諸」の一字が冠されてゐる所にお目とめられよ。この「諸」の中には佛も、英も、露も、米も、伊も、蘭も、その他の世界の「諸」の國が含藏されてゐる。依つて法華經に顯れたる轉輪聖王はその最高位の聖天子金輪大王であらねばならぬ。この意義に於ける聖天子なるが故に、觀心本尊鈔に

「當さに知るべし。此四菩薩、折伏を現する時は賢王となつて愚王を誡責し、攝受を行する時は聖僧となつて正法を弘持す」

てふ靈肉統一、第三帝國、本門戒壇の聖王であらせらる。諾威の文豪ヘンリック・イブセンは遠く

海の彼方から我が日の本つ國の聖天子を「神にして帝。帝にして神」と稱して讚美し奉つた。否、彼れイブセンのみにあらず、印度の大聖釋迦牟尼世尊といへども明確に「日本の聖天子」也として豫言も明言もないが、然し日本以外、彼等大聖や文豪によりて説かれたるが如き理想の國や帝王が、廣き世界の中に何處に在りや。長き歴史の上那點に發見すべきや。若し廣き世界の中に、日本の如き聖天子ましますんば、大聖の豫言は一山三文の空論に化するであらう。若し長き歴史上日本の如き國家なかりせば、文豪の名論もあはれ一種の駄法螺に了るであらう。此の意味に於て日蓮大師は佛敎の本家本場たる印度に對して「印度に佛敎無し」と堂々喝破された。

### 盛衰興亡常無き諸國帝王の末路



見よ。大聖釋尊は世界を道義的に統一すべき帝王をその一切經中に随分と多く説法されたが、左様な帝王が今の印度に存在しつゝありや。藥の能書は如何に麗々しくとも藥そのものが無くしては能書は畢竟反古同様ではないか。

イブセンも折角「帝にして神、神にして帝」てふ第三帝國主義を道破した所で左様な理想的なる聖王を地上何處の國に求めんとするや。若し彼等にして日本に之を求むるなくんば、折角の名論も名は迷に通ずで迷論に墮するであらう。露西亞にも有名なる批評家のメレヅニコフスキーなるものありて靈と肉との調和、「ヘレニズム」と「ヘブライズム」の統一の上に、新文明の建設を豫想したが、それとても同じく日本の聖天子に求めざれば結論がつくまい。事實は大なる雄辯で、世界の歴史は何事を吾人に物語るか。ヤレ羅馬が古いの英國にも皇帝があるのと、申した所で、天壤無窮

の我が國體に對しては、到底その匹儔ではない。成るほど羅馬の建國は日本の紀元前九十三年、支那周平王十八年、西曆紀元前七百五十三年ではあるが、命脈は二千二百〇六年で断絶した。その王統とても初めは帝政で、途中で共和制と成り、後又、帝政に再歸したものの、途中又、東西二帝國に分裂といふやうな歴史ではないか。而して英國はその羅馬に亞ぐの長命の國家ではあるが、その王國の基礎を造つたのは、我が五十三代淳和天皇(紀元一四八七年)に、グエセツクス王エグバートが七王國を統一したのに始まるので、是より數家を經て、カロール一世などが殺されて、クロムウエールが立つて共和政治に變革さるゝが如き一大悲惨事を演じた。その後、カロール二世立ちて王政に復古はしたものの、之を我が皇統の意義から嚴密なる價值批判を下すの時、あはれ一種の世襲の大統領たるに過ぎない。今の英皇室はハノーヴァー家

であるが、その王統は建國創業の歴史的事實としては中途に共和制が侵入したので、純乎なる一系の皇統とは申されぬ。ましてや他の王國でも、帝國でも換言せば西洋曆使用の國家は興亡盛衰常なき國家である。更に支那然り蒙古亦た然りである。

### 宇宙大生命の國家的活現體

さて、日蓮大師の一大生命である所の世界統一の大本尊の哲學的説明書とも謂つべき觀心本尊鈔の聖文を前に引いたが、その聖文中「此四菩薩」とあるが四菩薩は法華經涌出品に

『此の菩薩衆の中に四導師あり、一名上行、二名無邊行、三名淨行、四名安立行なり。是の四菩薩は其衆中に於て最もこれ上首唱導の師なり』とあるがそれで、此の四菩薩は本化の菩薩と申して久遠實成天御中主なる宇宙の大生命としての本體統一神の四大表現である。

本體統一神は歴史的には肉體的の親はないが、本來宇宙の大生命なるが故にその因縁に薰發し來らば西方印度には釋迦牟尼世尊と示現し、東方日本には天照大神と降生し給ふのである。その久遠實成たるの所以。その天御中主たるの所以。その宇宙の大生命たるの所以。その本佛たるの所以。その統一神たるの所以を一言に呼び顯はしたる統一の靈名題目が南無妙法蓮華經と申すのである。故を以て世界統一の大漫茶羅の正主本體としてその中央に南無妙法蓮華經とは奉安されたのである。

漫茶羅とは原梵語で之を直ちに本尊と譯すべきでないが、その本尊としての靈名、正主本體としての統一の題目たる南無妙法蓮華經如來即ち天御中主としての統一神の壇場界域を漫茶羅と稱するので、之を我が日本國に約して言ふならば、本尊とは『天皇』の御一身で、その天皇の治し給ふ統

一の領土(國土界域)が漫茶羅なのである。

今此の本尊(統一神)の界域壇場は十方法界の森羅三千の宇宙全體であるから一名之を十界の大漫茶羅とは稱する。故に日蓮大師が之を圖顯し給ふ場合には必ず、その傍書に

「佛滅後二千二百二十餘年(若しくは三十餘年)未曾有之大漫茶羅」

とある。而して俗に蒙古退治の大漫茶羅と稱されたる護國本尊の傍書には

「如來滅後於閻浮提內未曾有第一之大漫茶羅本門壽量佛本尊也」

とありて、他の諸種の本尊には單に「漫茶羅」とあるのに、この御本尊には特に「大漫茶羅本門壽量佛本尊也」とあるの一點に注目すべきである。これ即ち漫茶羅といふ領域、國土、世界、壇場を離れて壽量佛の本尊——統一神は存在せずてふ玄妙絶大の教訓の存する所で「本尊」と「漫茶羅」

との關係が此の傍書に依りて最も明快に啓示されて居る。而して我等はこの「本尊」と「漫茶羅」との關係に依りて眞の理想郷(天國、極樂、平和の理想國)には、必ず神にして帝、帝にして神なる本化の菩薩の活躍を信ぜざるを得ない。這般の消息を觀心本尊鈔には

「折伏を現する時は賢王となつて愚王を誠責し」と示して、「神にして帝」なる王法の威力を仰ぐべく又

「攝受を行する時は、聖僧となつて正法を弘持す」との聖文に依りて「帝にして神」なる佛法の眞義を信すべきである。

この「神にして帝」てふ第一の帝國たる王法、(政治)と、「帝にして神」てふ第二の帝國たる佛法(宗教)との冥合一如が第三帝國の實現本門戒壇建立成就の時であり謂ゆる一天四海皆歸妙法の春を迎へ本體統一神の天照らしの世界の實現の時であ

らねばならぬ。是れ即ち蒙古退治の御本尊の傍書の「大漫茶羅本門壽量佛本尊」の娑婆即寂光の世界と相成つた時である。さればこそ蒙古退治の大漫茶羅にはこの四菩薩の一名の下に大を入れ上行大菩薩、無邊行大菩薩、淨行大菩薩、安立行大菩薩、として統一神の左右に奉安されてゐる他の漫茶羅には「大菩薩」とはなく單に「菩薩」とのみ記されて居る所を見ると、如何に蒙古退治の大漫茶羅には四菩薩の地位が特に重大であるかが推知し得らるゝ。

### 小蒙古の肉體と大日本國の心靈

更に一大注目を要するのは、この大漫茶羅中に「諸天晝夜常爲法故而衛護大日本國」

との十五文字の記入された事である。而もその國といふ字が普通口がまへの中に、或と書くべき

を特に玉といふ字に似た王の右方に「」を附されて居る事など、特に研究すべきである。日蓮大師の教學を研究するには、現代の活字に顯はされたる御遺文のみでは不完全である。例せば御遺文中に蒙古國と日本國との對照の字句のある場合蒙古の國字も日本の國の字も同じく口がまへの内に或の國字が使用されてゐるが、その本據を御親筆に依りて研究して見れば蒙古の方の國の場合口がまへの中に民を入れ日本の方の國の場合口がまへの中に玉といふ字に似た王の右肩の所に「」が附されて居る。この點は吉祥點、又は稱美點で、我が聖天子としての帝王の靈德を讚美し奉るの意を顯はし奉るのである。この大漫茶羅の場合に於ける大日本國の國の字が特に口がまへの中に王字を入れそれに吉祥點を奉つてゐる所に帝王南面の學的鑽仰上重要な教目たる事に注意すべきである。予は今、普通の國の字とこれを比較し

て特種の研究を發表して見たい。普通の國の字は口がまへの中に或を入るゝ事は誰れにても承知して居るが、古來支那では或を『くに』と讀ましたものである。西洋舶來の國家學では一國構成の要素を主權と、領土と、人民の三とされてゐるがそれは今更ら我が東洋に於ては難有い教へでもないので、或を『くに』國と讀ましめたる思想上の要件は或を構成せる三分子に存する。乃ち

戈……を以て主權を表現し

口……を以て人民を表現し

一……を以て領土を表現し

てゐる。近頃でこそ宣戰の布告も媾和も議會で決定するやうなものゝ、昔の君主專制時代には、君主の心のまゝに戰爭もし媾和もしたから『戈』の字を以て主權を表現するの思想も起り、今日こそ地球説が確認されたから昔の天圓地方の説は用ひられないがその天が圓くて地が方たいたいといふ

舊思想時代には一の水平線を以て領土土地を表示され、又、人口調査とか戸口調査とか申すやうに口を以て人を表示することは今も昔も同じであるが、その口を以て昔の人は人民を表示したものである。この口と戈と一の三を合せた或を中味とした國といふ象形文字で國家構成の思想が表された。即ち或の東西南北の四方に圍をしたのが口がまへでそれを國と讀ましひるやうに相成つた。さて、日蓮大師が蒙古退治の大漫茶羅中に、大日本國といふ場合にこの國で可さうなものであるのに、特に口がまへの中に王に吉祥點を附されたといふのは世界將來はやがて萬邦一君の聖天子金輪大王たるべしとの玄妙絶對なる御見識からである。それが對照的研究の資として予は太田禪門御書の

『大蒙古國と大日本書國聯合戰』の聖語中、蒙古國の方に口がまへの中に『民』を使ひ日本國の方

には口がまへの中に『王』に吉祥點を用ひられてゐる。更にこの蒙古退治の大漫茶羅は弘安四年五月十五日の圖顯であるが、是れより一ヶ月以後即ち六月十六日に弟子檀那中に遣はされたる御書には、小蒙古の人、大日本國に寄せ來る』云々とある。この

族の赤化の魔王共から排日されるのであるが、やがてはその排日は變じて大日本帝國如來さまと禮拜さるゝやうに相成るのである。即ち排日より拜日へと彌榮の國運進展を見るべきである。

### 現代の國防に約せる四大菩薩の靈能

蒙古は所統の民國にして肉的、物的の小國……日本は能統の王國にして心的、靈的の大國……との大教訓が自ら存するのである。事實は雄辯で『日蓮が云ふ事、後に合へばこそ人も信ずれ』で、日蓮大師の教訓の通り豫言の如く建國の理想無き蒙古は當時如何に世界第一の大帝國でも今や果して如何なる末路ぞ。日本は之に反して國土の型は世界一の小國であるが、その建國の事實が宇宙大生命の統一神の大精神の活現で、その理想が世界將來の平和を任持するといふのであるから現代世界のアングロサクソン民族の白禍やスラブ民

さて前來引證の觀心本尊鈔の御聖文のつゞきに内憂外患の國難の事が示されたるに對し更らに玄釋を施す必要がある。蓋し是れ、現代の蒙古王公諸氏として是非學び置くの必要があるからである日本から申すと『蒙古襲來、元寇國難』であるが、蒙古王公諸氏の側からは『國威顯揚、日本征伐』であるか知らぬが、兎に角、日本に取りては迷惑千萬此上無しであるがその謂ゆる蒙古襲來は前後二回である。第一回が文永十一年で、第二回がそれから足掛け八年目の弘安四年である。不思議と、

その二回共「神風」が吹き起りあはれ世界第一とほこる大軍も敗北した。我が憂國の士をして「ものゝ心の心つくしのはてにこそうべ神風も吹き起りけれ」と詠せしめたるが如く、この神風は我が上下萬民の異體同心の「心つくしの結果」に感應生起したものである。國民護國の大信念が天地を感應せしめたものである。當時、大元蒙古には王公諸氏も御存じか知らぬが、大聖釋尊の再來とまで崇敬を拂はれたる喇嘛教の高僧に發思巴なる人があつた。元主忽必烈は日本に神風吹き起れりてふ眼前の事實を知りてさすがに世界の國土を悉く我物顔に搾取強盜しやうといふ物慾の總本山たる彼れもこの不思議の現象と、朝鮮の史家が、豊太閤の朝鮮征伐を評したるが如く

「勇悍、戰を好むものは倭（日本人）にして、死を恐れざる即ち其の天性なり。人の恐るゝ所は戰にして戰の難しとする所は死なり。死にして苟し

くも難からずんば、何ぞ敵に勝たざるを憂へん」

「倭人（日本人）其の必死を知れば、先づ死するを以て快と爲す。故に一士斃るれば、一士立ち進むありて退くなし。士卒の強きこと、天下此の如き國無し」

と驚嘆したるが如き武勇絶倫のほどを、いやといふほど味ははされたる諸氏の祖先たる忽必烈たるもの、何條以て日本國を目して不思議なる國家なりと感ぜざらんや。そこで高僧フアスバに對して「日本のこの不思議は果して何等の原因ありて然るか」との問を發した。フアスバ答へていふ「法華の祈禱の爲めなり。妙法の勝利なり。是れ即ち地水火風の四大を起し、森羅の萬象を制するが爲めなり」と、申し切つた。このフアスバは何たる不思議な事を申す男であらうか。否、決して不思議にあらざるべし。彼れは釋尊の再來とまで崇敬されたる高僧であるから、釋尊出世の本領精神た

る法華經一念三千の大哲學を知らざらんや。日蓮大師が建治元年に西山殿に遣はされたる御消息、（御返事）に「一切の大事の中に、國の亡ぶるが第一の大事にて候也、夫れ大事の法門と申すは別に候はず。時に當りて、我が爲め（我が國民の爲め）國の爲めの大事なる事を、少しも勘へ（蒙古襲來、敵國外患を豫言して）たがへざるが智者にて候也。……詮する所、萬法は己心に收まれりと、一塵もかけず、九山八海（全世界）も我が身に備はりて、日月衆星（森羅萬象）も己心にあり」

聖語、昭々天日の如きを拜すべし。彼れフアスバは海の彼方、支那大陸に在りて日蓮大師の靈のラヂオを感じたるべし。然らずして爾かく答へ得べけんや。更に注目すべきは、日本より燕京（今の北京）に引上げたる敗殘の將卒どもまでが元主に對して「日本の恐るべきは刀劍弓箭の武器にあらず、戰法戰略にあらず武勇の勝利の祈禱に在り

敵國降伏の祈念にあり」と報告した。こゝに於てか元の世祖たるもの、深く大に考察する所あらずして可なるべけんや。元は當時に於ける否、世界歴史ありて以來の世界第一の大帝國であり、最大強國であつた。その強大を以てして三度び日本に捲土重來せん事、敢て難事ではないのだ。而も事、茲に出でず、至元二十年（我が蒙古進入の英雄僧日持上人が日本内地を發足の永仁三年より四年前に相當する、即ち正應四年）に日本征伐の參謀本部とも謂つべき「征東行尙書省」を廢止した。是れ果して何に原因するか。立正安國唱導の聖者本化上行日蓮大師が堂々蒙古襲來の國難を豫言されたのは、「萬法は一念に收まれり」てふ一念三千の法門に根據が在る。

一念三千論は、佛教哲學思想の最高頂に達せる法華經述門の所詮たる諸法實相の宇宙論を基礎として組織せられたる大哲學である。而もフアスバの